

ЧЕМОДАН チェマダン

特別号

СПЕЦИАЛЬНЫЙ НОМЕР
РЕДАКЦИЯ: КОМАНДА ЧЕМОДАНА

ウクライナ侵攻とロシアの現在
チェマダン編集部

МАЙ 2022 年5月

2022.
02.
2222

チェマダン特別号

「ウクライナ侵攻とロシアの現在」

編：チェマダン編集部

『チエマダン』特別号 巻頭言

電子ジャーナル『チエマダン』は、二〇二二年二月二四日のロシア政府によるウクライナ侵攻を受けて、特別号を発行します。およそ七年ぶりの刊行です。

侵攻開始から三ヶ月が経過した五月末現在、依然として収束の道筋は見えていません。この間、日本国内においても、様々な情報が膨大に生み出され、そして消費されてきました。その情報は、いつしか個別性を失い、漠然としたイメージへと溶解してはいないでしょうか。人文学の役割が、大きなイメージを前に、いちど立ち止まり、思考することだとしたら、ここに集められた文章をそのための素材として位置付けたい。それは、一面的な「イデオロギー」を標榜するものではありません。本号は、あくまでもロシアの（複数の）文化を捉え直すこと、その複雑性を文字としてとどめ、一つの記録として残していくことを目的としています。

ここに寄稿している日本人執筆者の多くはロシア文化研究者で、アンケートを配布した友人たちもロシア人です。そのため、必然的に「ロシア」が中心になっています。しかし、「ロシア」とは为什么呢。「ロシア文化」とは为什么呢。本号を通して、「ウクライナ対ロシア」という図式に絡め取られがちな言説に抗い、そこにある「国家対国家」ではなく、「国家的イメージ対個々の人間・運動」の姿を描き出し、「文化」の多層性・多様性への理解がわずかなりとも更新されることを願っています。

だからこそ、私たちの小さな『旅行靴』^{チェマダン}でもって「ロシア人の実態」を示しているつもりはありません。むしろ、日本人寄稿者たちの文章、アンケートに答えてくれたロシア人たちの言葉、ゴラーリクの文章に出てくるそれぞれの「N」たち、いづれも個別的なものであり、たとえ仮名であろうとも匿名であろうとも、そこには個人がいます。翻つて政治的な言説に、プーチンの言葉に、個人の顔は見えてくるでしょうか。

かつて、八年前のクリミア侵攻の際、ロシア人の友人と話していて「君のアイデンティティは何？」と訊いたことがあります。彼は「僕のアイデンティティは、〇〇〇・〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇」と訊いたことがありますが、彼は「僕たちが手を携えるべきは、こうした個人であり、耳を傾けるべきは彼らの言葉ではないでしょうか。私やあなたや彼や彼女は、あのことやこのことやそのことは、ウクライナで、ロシアで、日本で、個別的に存在しています。だからこそ、今回ロシア人の友人たちがアンケートに対してリスクを負いつつ返答してくれたその意味を真剣に考えなければならぬと考えています。その経験を私たちは読者の方々と共有したいと考えています。」

最後に、日本人の寄稿者の方々、アンケートに回答してくれたロシア人の方々、翻訳の掲載を快諾してくれたアルテミー・マグーン氏とリノール・ゴラーリク氏に心より感謝を申し上げます。

願いが無力であることは、この間、幾度となく思い知らされてきました。それでも、被害にあつたウクライナの人々に想いを寄せるとともに、ウクライナに一刻も早く尊厳ある平穏が訪れることを心より願わずにはいられません。

8 「文化」のナショナリティについての覚書 八木 君人

27 ロシア正教会によるウクライナ侵攻支持の背後にある翼賛的な政教関係 高橋沙奈美

40 若き愛国作家の憂鬱 松下隆志

44 統計の奥を見据える 奈倉有里

54 ウクライナ戦争とロシアのクラシック音楽界の現在

——二重の踏み絵は新たな鉄のカーテンか 梅津紀雄

81 ロシア音楽に罪はあるか？ 山本明尚

86 沈黙に耳を傾ける 守山真利恵

- 93 アレクサンドル・ポノマリヨフとアートの未来 鴻野わか菜
- 99 闘争と逃走 ソヴィエト時代の反体制的な芸術をふりかえる 河村 彩
- 109 セルゲイ・パラジャーノフの「ウクライナ時代」とソ連のコンテクスト 梶山祐治
- 119 一八世紀ロシアの文学的想像力と戦争 鳥山祐介
- 125 罪とヒューマニズム アルテミー・マグーン(訳・解題 乗松亨平)
- 130 ロシア人アンケート
- 166 エクソダスー22 リノール・ゴラーリク著(訳・解題 伊藤愉)

「文化」のナショナリティについての覚書

八木君人

三月三〇日からパリで開かれていたユネスコの第二一四回執行委員会の場で、ロシア使節団代表であるアレクサンドル・クズネツォフは次のように訴えた¹⁾。

今、ヨーロッパでわれわれが目にあたりしているのは、国全体を、われわれ国民を「キャンセル」しようとする様子です。ロシアと関係のある文化人、スポーツ選手、学者たちの基本的な権利が破壊されています。それだけではありません。医療や銀行サービスでさえも、一般のロシア市民を拒否しているのです。しかもたんに拒否するだけではなく、さらには直截にこうも言われています——「ええ、われわれはあなたがたを差別しますよ、あなたがたはロシア人なんですから」と。これはあらゆる基盤の蹂躪です。これは憎悪のプロパガンダです。ロシアのウラジミール・プーチン大統領が言ったように、「いわゆる「キャンセル・カルチャー」は、「カルチャー・キャンセル」にかわったのです。コンサートのチラシからは、チャイコフスキー、ショスタコーヴィチ、ラフマニノフが消されています。ロシアの古典作家やその作品が禁止されています。ヨーロッパではこのことはすでに九〇年ほど前にドイツで経験したことです（著者註：一九三三年のナチによる焚書を指す）。しかしながら、ドストエフスキーにせよトルストイにせよ、それらを矮小化したり蔑んだりすることは不可能です、なぜなら、不朽のものには政治的ゴタゴタは関係ないからです。あ

あなたがたは彼らをキャンセルしているのではなく、自らのうちにある偉大な文化の一部をキャンセルしているのです。ロシアは決して、シェイクスピアを、ダンテを、あるいはシェフチェンコを拒否しません。それは全世界の財産だからであり、つまりわれわれの財産でもあるからです。

「ロシアと関係のある」「文化」が「キャンセル」されている惨状を訴えるクズネツォフの主張には、ある種の「詭弁」も含まれているとは思いますが、「ナショナリティに則る文化のキャンセルは差別でしかなく、文化と政治とは別物である」という、ある立場からすれば至極真つ当な主張をしているようにも思える（これが、現下の状況において「ロシアに属している使節団代表」の発言でなければ、大きな反感は湧かないのではないだろうか）。

素朴に考えてみよう。その対象が企業であれ個人であれ、「○○をキャンセルする」というとき、その基本的なあらわれ方は、「○○に属している△△をキャンセルする」というかたちをとる。不買運動などを例に考えると、△△は、○○が提供する財やサービスにあたる³⁾。これに則って「ロシア文化をキャンセルする」を言い換えるならば、それがロシア政府によるウクライナ侵攻に端を発する文化的制裁であることを踏まえて、「ロシアに属している文化をキャンセルする」となるだろう。△△にあたる「文化」は、この場合、往々にして漠然とその「文化全体」が念頭におかれるわけだが、しかし、現実的に「キャンセル」があらわれる局面では、△△は「具体的な個々の作家・作品」とならざるを得ない。概していえば、本来、○○（しかも、もっといえば○○○のうちの何か）ということもあり得る）を「キャンセル」することを目的としながらも、個別になし得る「キャンセル・カルチャー」的な行為は、○○○のあらわれと見なされる△△を「キャンセル」することを通じて（のみ）成立するしかない。

このとき、改めて「その△△は○○に属する／属さないのか？ それはどのような意味で属する／属さないのか？」と再考する契機が生まれなければならない。つまり、「その具体的な個々の作家・作品は、ロシアに属しているのか？」という問いを立てることで、個別に判断する必要性が明確になるだろう。差別やヘイト、フォビアで

ない「キャンセル」が成立するとするならば、必ずこの段階を通過する必要があるように思われる。

だが、ここでは少し別のことを考えたい。「具体的な個々の作家・作品」を敢えて捨象し、漠然と、あるいは抽象的に語られる「ロシアに属している文化をキャンセルする」という次元に留まりながら考えたいのは、「ある文化が、あるナショナルリティ（＝ロシア）に属しているとはどういうことか」である。それは畢竟、「属していること」を巡る問いになるだろう。

そのことを通して私が言いたいこともまた素朴なことである。それは、「文化」は、そのナショナルリティによって差別を受けるべきではないし、その「文化」自らが、そのナショナルリティやエスニシティへ帰属することを望んでいたり、それを重要な要素として考えたりしている場合を除いて、そもそも何かに帰属したり、させたりすべきではない」ということになる。これは、もしかしたらクズネツォフの立場に近いように見えるかもしれない（が、異なると思いたい）。

ただし、このきわめて凡庸で平板な結論に至るまでには、さまざまな隘路をくぐり抜けていかねばならない。それは、このウクライナ侵攻の大義名分に、「文化」が大きく関わっている（ように思える）以上、「政治的ゴタゴタは関係ない」とは言えないからだ³¹。

ウクライナとロシアの歴史的Ⅱ文化的Ⅱ一体性

リアルポリティクスの観点からは理解できない（と言われている）今回のロシア政府によるウクライナ侵攻Ⅱ特別軍事作戦の「大義」については、「ウクライナ東部のロシア系住民のジェノサイド」や「ウクライナ現政権の非ナチ化」といったきわめて根拠に乏しい「大義名分」（にすらならないもの）と共に、それを根底で支える「理念」のひとつとして、プーチン露大統領がウクライナ、ベラルーシ、そしてロシアの「一体性」を掲げていること

はよく知られている。彼が二〇二一年七月に発表した論説「ロシア人とウクライナ人の歴史的一体性について」の冒頭部と、終わりの部分から引用しよう（その最初と最後の間には、プーチンの歴史観による始まりから現在へと至る歴史講義が長々と横たわっている）⁴¹。

ロシア人も、ウクライナ人も、ベラルーシ人も、古代ルーシの後継者であり、古代ルーシはヨーロッパの強大な国家であった。ラドガ、ノヴゴロド、プスコフからキエフ、チェルニゴフにいたる広大な空間にいたスラヴ諸族やその他諸族は、ひとつの言語（今、われわれはそれを古代ロシア語という）によって、経済的な結びつきによって、リューリク朝の諸公たちの権力によって統合されてあった。ルーシの崩壊後は、ひとつの正教信仰によって。ノヴゴロド公であり、キエフ大公でもあったウラジーミル聖公の精神的な選択は、今日でも多くの点でわれわれの類縁性を定めている。

はっきりしているのは、ウクライナの真の主権が可能なのはまさしくロシアとのパートナーシップにおいてということだ。われわれの精神的、人間的、文明的な結びつきは、数百年にわたってかたちづくられ、ひとつの共通の源に由来し、共通の経験、共通の成果、共通の勝利によって鍛え上げられてきた。われわれの類縁性は世代から世代へわたり受け継がれている。それは、心に、現在のロシアとウクライナで生きる人々の記憶に、われわれ数多の家族を結びつける血の結びつきにある。われわれは共にあっていつも、しばしば、より力強くあり、より成功を収めてきたし、これからもやっていくだろう。われわれはひとつの民^{ナロド}なのだから。

ここでプーチンが語っている「一体性」は、「民族」^{エトノス}的なものというよりは、言語、経済、宗教（正教）、そして記憶＝歴史によって結びつけられた「歴史的一体性」である。それを「文化的一体性」と言い換えても差し支えない

だろう。この論説が発表される直前、六月三〇日にプーチンはこうしたことを恒例の人気番組「ウラジミール・プーチンとのダイレクト・ライン」で語っているが、その放送内容を受けるかたちで、ゼレンスキー宇大統領はインタファクス・ウクライナのインタビューで次のように答えていた¹⁾。

最後に、「と」という言葉にポイントを置いてみましょう。われわれは決してひとつの国民ではないということでももちろん、われわれには共通する多くのものがあります。われわれは、歴史の一部を共有していますし、記憶、隣人であること、親類、ファシズムに対する勝利も共有していますし、悲劇も共有しています。もちろん、これら全てはきわめて重要で、われわれはそのことを覚えています。[…]

しかし、繰り返しますが、われわれはひとつの国民^{ナロド}ではないのです。もし仮にひとつの国民^{ナロド}だったならば、そもそもモスクワでフリヴニャ(筆者註:ウクライナの通貨)が流通しているでしょうし、ロシア議会の上には黄と青の旗がはためられているでしょう。だからまったくひとつの国民^{ナロド}ではないのです。われわれそれぞれに、それぞれの道があるので

す。

ゼレンスキーは、主権国家の元首としてごく当たり前のことを言っている。歴史的にさまざまなもの「共有」していることは認めた上で、とはいえ、言うまでもなく国家としては別々なだから「それぞれの道がある」のだ、と。当然のことだ。

一方、プーチンにしてみれば、ソ連解体後に(初めて)主権国家として成立した現在のウクライナは、しかしながら、(同じ論説から引用すれば)「まったく完全にソヴェト時代の申し子」にすぎず、「大部分、歴史上のロシアを犠牲にして生み出され」たものであり、主権国家として成立して三〇年ほど、ソ連邦構成主体の共和国であった時期を含めてもたかだか一〇〇年程度の「歴史」しかなのだから、むしろ歴史的・文化的には、ウクライナ

とロシアとは「一体」となる。そうしたウクライナが自らの「勢力圏」から離れ、むしろ敵対する「勢力圏」へと入ろうとすることは、プーチンにとって耐えがたいのみならず、「不正」でさえあるのだろう。

そして、この「勢力圏」という露骨な(新)植民地主義的発想やそれに基づくプーチンの「歴史観」をソフトに下支えるイデオロギーのひとつとなっているのが、「ロシア世界 Духовный мир」という思潮であるように思われる。

「ロシア世界」を「キャンセル」する

それは、ウクライナ侵攻以降、新ユーラシア主義ほどではないにせよ、本邦のマスメディアでとりあげられることもあるため、すでによく知られているかもしれない。「ロシア世界」という発想は、その起源の問題はおくとして、とりわけ二〇〇〇年代以降、政府の外交政策の一環として、また、保守的な思想のナラティブとして語られるようになっていく。プーチン政権二期目の二〇〇七年、大統領令で設立された財団「ロシア世界」は、まさにその名称を戴き、国内外でのロシア語やロシア文化の普及を目的とする(ブリティッシュ・カウンシルやゲート・インスティテュートのような)組織だが、その「イデオロギー」として次のようなことが謳われている。⁶¹

ロシア世界——それは、ロシア民族、ロシア国民、近隣諸国や遠く離れた国々にいる同胞、移民やロシアからの出国者とその子孫たちだけのものではありません。ロシア語を話したり、学んだり、教えたりしている外国籍の人たち、心からロシアに興味をもち、その将来に心を寄せるすべての人たちのことです。

「ロシア世界」は、多民族的で、信仰もさまざまで、社会的・イデオロギー的に同質的なものではなく、多元的な文化をもち、地理的にも分割されていますが、そうしたあらゆる層は、ロシアに関わっているという意識を通して統合

されています。(傍点は原文による太字強調)

この「イデオロギー」に則れば、われわれ日本におけるロシア文化研究者も、「ロシア世界」の一員ということになるだろう¹⁾。言うまでもなく、「ロシア世界」の一員とみなされようとも、ロシア政府の見解と一致するとは限らないし、一致する必要も義務もない。研究者のすべてが「ロシア」を好きなわけでもないし、ましてやロシア政府を好きなわけでもない。

だが、たとえば「ロシア世界」が、「ロシア」という国家のプレゼンスを高めるために、政府のプロパガンダとしてロシア語やロシア文化を普及しようとしているならば、われわれロシア文化研究者の意図や考えとは関係なく、結果的に、その片棒を担いでしまうように見えることもあるだろうし、実際、そうなってしまう(恐れがある)。ただ、そうした映り方をしてしまう背景として暗黙裡に前提となっているのは、冒頭で述べた通り、「ロシア文化はロシア(という国家)に属している」と考えるような「文化」に対する眼差しであるといえよう。そして、「ロシア文化をキャンセルする」という立場も、基本的にはこうした文化観を共有することで成立するものであるといえそうだ¹⁾。

たとえば、二月二七日(あるいは二八日)付で発表された「ロシア連邦に対する文化分野の制裁の要請」という、ウクライナの文化人たちによる署名を呼びかける声明もそうした文化観に則ったものとして挙げられるかもしれない¹⁾。この声明をどう捉えるか、署名を求めるサイト内にある国際的にアピールするための英語版を見ると、実は複数(少なくとも私が確認したところでは三つ)のバージョンがあり、判断するのが少し難しいところがある(なお、ウクライナ語版は二つのバージョンがある)。その三つのうちの異同はいくつかあるが、一例として最後の部分を取り上げてみよう。署名を求める際に提示されるバージョンでは、「The Russian Federation is a rogue state. Russian culture, when used as propaganda, is toxic! Don't be an accomplice! (ロシア連邦はならずも

の国家である。ロシア文化は、プロパガンダとして用いられる場合、有毒である！ 共犯者になってはならない！」と弾劾の言葉が記されている。だが、おそらくは最初に記されたバージョンでは、二文目に含まれていた「プロパガンダとして用いられる場合」という留保はなく、「Russian culture is toxic」（ロシア文化は有毒である！）となっていたと考えられる^{10）}。三つのバージョンに共通して、「ウクライナに対するロシアの侵攻や軍事行動を公然と非難する、文化的影響力をもつロシアの人たちの一部のスタンスを高く評価している」という文言があるため、この声明をもつて一概に、「ロシア文化全体のキャンセル」というのは言い過ぎとなるかもしれないが、しかし、（とりわけ最初のバージョンは他の箇所も含めて）そうした色合いが強いのもあるかのように思う。実際、この声明文をとりあげた記事を投稿した『美術手帖』のTwitterには、このようなウクライナ文化人の呼びかけ（とそれに何らコメントを付すことなく記事をツイートする『美術手帖』の姿勢）に対して否定的なコメントが多く寄せられているし^{11）}、そうした意見に私自身もまた基本的には同意する。

ただし、二点、付け加えたいこともある。

ひとつは、今回の侵攻により、「文化」を含めて「ロシア」に関わるあらゆるものが嫌になり、それ故、「キャンセル」を訴えたくなるのも当然ということだ。侵攻されているウクライナのの人たちにとつてすればなおさらである。この呼びかけに署名もしている、ウクライナのロシア語作家アンドレイ・クルコフが、「私はもうロシアの文化や歴史にも興味はもてない。ロシアには二度と行かないし、本も出版しない」^{12）}と述べざるを得ない苦悩、こうした当事者たちの想いを、「ルソフオビア」という「キャンセル批判」として否定的に語ることもまたすべきではないと私自身は考える。無論、そうした「憎しみ」を戦争の論理に絡み取られてしまっている等の観点で批判することも理論的には可能であろうが、第三者的な立場からの「倫理」を押しつけることはできない。その意味では、「文化と政治は別」とは安易に言いがたい。しかしながら同時にそれは、（とりわけ第三者によつて）何らかの「正しさ」でコーティングされるべきものではないように私自身は考える。

付け加えたいもうひとつは、ウクライナの文化人たちによるこの呼びかけにおいて、どの程度、具体的に意識されているかはわからないものの、「ロシア世界」の「イデオロギー」が示しているように、「文化と政治は別」とあっさりとは片づけてしまうのが憚られるほどには、従来（それこそ「歴史的に」）、ロシア政府はきわめて強く、「ロシア文化」を「ロシア」の対外的なプロパガンダとして用いていることである。

「文化」を対外的なプロパガンダの道具とするのはロシアに限った話でないのは言うまでもないが、問題は、とりわけロシアに関しては、国外に対してのみならず、国内に対しても「文化」が「ロシア」を統合するイデオロギー機能を担うものとして、政府に強く意識されていることだ。

「文化」を「国家」に属させること

実際、二〇一四年一二月に承認された大統領令「国家の文化政策の基盤」を見ると、その主眼は対外的な文化政策というよりも国内に向けてのそれであるが、「文化（政策）」になにか尋常でない負荷がかけられていることがわかる。曰く、「国家の文化政策は、ロシア連邦の国家の安全保障戦略と不可分なものとみなされる」¹³⁾。そう、文化政策は「国家の安全保障」の問題なのだ。ここでは次のように謳われている。

祖国の歴史全体にわたってまさに文化こそが、民族の精神的な経験を保存し、蓄積し、新しい世代に伝えてきたのだし、多民族国家であるロシア国民の統一を保障し、愛国精神の感性と国家の誇りとを培い、国際的な舞台で国の権威を強化してきたのである。

文化のプライオリティを確立することの使命とは、より質の高い社会を保障し、社会のもつ国民を統一する力、その発展に関する共通の目的を定めて達成する力を保障することである。それらを実現する主要な条件は、道徳的で、

責任をもち、自立して思考する創造的な個性を形成することである。

科学、教育、そして芸術の統合は、国家の独自性の核を構成する道徳的、倫理的、そして美的な価値観の集成を新しい世代へと伝える機構としての文化のもつ社会的使命を理解するための礎を据える。

この「基盤」を採択することで、政府は初めて文化を国家的プライオリティを持つものに高め、文化を、生活の質や調和した社会関係の向上の最重要な要素として、ダイナミックな社会的・経済的発展の基礎として、ロシアの統一的な文化空間と領土の保全とを維持するための保障として認める。

ここでは「ロシアの文化」が、「ロシア」の国際的な権威を示すものであると同時に、ロシア政府によって国民統合のツールとして捉えられていることがはっきりと刻まれている。また、「国民の統一」や「新しい世代へと伝える」といった言葉遣い等からもわかるように、この大統領令と先に紹介したプーチンの「一体性」の論説との間にある似通った「雰囲気」——端的にいえばきわめて保守的な傾向——も感知されるだろうし、そのため、この官僚的な文章も不気味な相貌を帯びてくるだろう。つまり、ロシア政府にとっては「歴史」と同様に「文化」もまた、国民を統合し、「ロシア」のアイデンティティを保持するための強靱なイデオロギー装置なのである。もちろん、お役所作文の見本のようなこうした「理念」は、この手の文章にとしてはこの国であろうと似たり寄ったりなのかもしれない。なるほど、「ナショナル・アイデンティティを形作るのはその国の「文化」です」というのは、それ自体、なんの意味もないような一般論ではある。

だが、こうした「理念」がある意味では愚直に遂行されること、そして、繰り返しになるが、「国家の安全保障戦略と不可分なもの」、あるいは「ロシアの統一的な文化空間と領土の保全とを維持するための保障」というような質を「文化」に対してロシア政府が付与していることが問題なのである。とりわけプーチン大統領が三期目に入った二〇一二年以降、政府は保守化を深めていくことになるが、その傾向はこうした文化政策に強く反映され

ることになる。そして、この文化政策の方針がクリミア併合のあった二〇一四年末に承認されていることの意味も、推して量るべきであろう。

この時期、二〇一二年五月から二〇一年一月まで文化大臣を務めていたウラジミル・メジンスキーは、この「基盤」に関連して「自分たちの文化を養わないものは、よその軍隊を養うことになるだろう」と題する論説を二〇一五年六月に発表し¹⁴⁾、「国家が文化に金を使わなければならぬのだろうか？ もちろん、使わなければならぬ。なぜならそれは、慈善事業ではなく、国の、すなわち市民たちの主要な価値観が「つくられる」最重要分野への投資であるからだ」という文言で稿を起こし、「文化」が担うべき、「芸術家にとっても、政府にとっても、社会にとっても共通する価値観」として以下のような要素を挙げている。

創造的労働の価値。

全般的な繁栄の礎としての個性の発達。

祖国への奉仕。

一〇〇〇年におよぶロシアの歴史の統一と継承。

ロシアの諸民族や、かつてロシア帝国やソ連に入っていた友好関係にある諸民族の運命の歴史的統一。

正教や、ロシアにとって伝統的なものであるあらゆる宗教によって解釈されるものの、家族や人間の共同な生活の価値、すなわち、年長世代を敬うことにはじまり子どもを養育する原則に終わるもの。

この論説で述べられている「共通する価値観」を有する「文化」が政府の奨励する「ロシアに属する文化」であり、「ロシア」というナショナリティを帯びずには成立しない「文化」である。そして、そうでない「文化」は「よその軍隊を養うことになるだろう」。「ロシアの諸民族や、かつてロシア帝国やソ連に入っていた友好関係にある

諸民族の運命の歴史的統一」を訴えるようなものが「ロシア文化」だとするならば、今回のウクライナ侵攻を下支えしている理念のひとつがこうしたものである以上、それを「キャンセル」するのは、きわめて正当なものであるように思われる。

しかしここでメジンスキーがいうような文化観が、きわめて偏狭なものであることは言を俟たない。

かなり曰く付きではあるとはいえ、国営文化放送で歴史の講義をする「歴史家」であり、また、そのイニシアティブで二〇一三年に創設されたロシア戦史協会の代表をも務めるメジンスキーは、たんなるお飾りの大臣ではなく、積極的に「文化」に関与し（「歴史」の他にはとりわけ「演劇」に口出しする印象がある）、歴代の文化大臣のなかでも精力的に「文化」の普及に努めた人物と言われている¹⁵⁾。

「歴史」やそれのもたらす「統一」を重視しながら、保守的な考えが披瀝されるこの論説での彼の「文化観」が、プーチンの「一体性」のイデオロギーと類似していることは明らかであろう。メジンスキーにとってもまた、「ロシア人とウクライナ人の歴史的一体性」は歴史的に自明のことであり、ウクライナに出自をもつ彼自身、自らを「真のロシア人」であると考えている¹⁶⁾。

二〇年に文化大臣を退任し、それに続いて大統領補佐官に就任したメジンスキーは、現在、ウクライナとの停戦交渉のロシア使節団代表を勤めている。

マレーヴィチのナシヨナリティ

そのメジンスキーは、自らのインスタグラム（おそらく）使用停止になったことに伴い、三月一日にテレグラムを開設し、その最初の投稿で以下のような文言を添え、マレーヴィチの絵画《疾駆する赤き騎兵隊》をアップした¹⁷⁾。



最近、SNS上でマレーヴィチの《黒の正方形》に出くわすようになった。

文化に関心のある人間として私は、この世界的に有名なロシアの芸術家の作品が注目されることをよろこばずにはいられない。

カジミール・マレーヴィチの誕生日である二月二三日（キエフ生まれ）を記念して、もうひとつ彼の有名な絵をアップしよう。

この絵の正式な名称は、《ソヴィエトの国境を守るために十月の首都から赤き騎兵隊が疾駆する》。

とても好きな絵だ。美しい！

そして美は、世界を救う。

一文目の「SNS上でマレーヴィチの《黒の正方形》に出くわすようになった」というのは、侵攻直後、通称「フェイク法」が三月四日に施行されるまでSNS上で多く見られた、「戦争反対」を訴える「黒い画像」の投稿を指していると思しい¹⁸¹。

注目したいのは、次の文章で、マレーヴィチが「ロシアの芸術家」とされながら、それに続いて「（キエフ生まれ）」ということも明記されていることだ。さらにいえば、（これは偶然にすぎないが）マレーヴィチの誕生日である二月二三日は、

ロシアや、旧ソ連構成共和国のいくつかでは「祖国防衛の日」として祝われている。もともとはポリシェヴィキの軍隊である赤軍の創設を祝う記念日であったが、現在では、男女問わず現役の軍務従事者や過去に軍務経験のある人たちを讃える日になっている（もともと、一般的には、ほぼ二週間後にやってくる「国際女性デー」と対になるような「男性の日」のようにも受けとられている）。そして、ロシア軍がウクライナへ侵攻したのは二月二四日だった。

メジンスキーがいうようにこのマレーヴィチの「絵の正式な名称は、『ソヴェエトの国境を守るために十月の首都から赤き騎兵隊が疾駆する』だが、『十月の首都』というのはもちろん、十月革命のあったロシアの首都であり、赤軍を指す「赤き騎兵隊」が「国境を守るために」どこへ向かって疾駆しているのかは、少なくとも「マレーヴィチの意図」という点ではわからない。ただし、この絵画の制作年は一九二八―三二年と言われているが、絵画の右下に「一八年」と（あたかも制作年であるかのように）書き込まれていることから、マレーヴィチには一九一八年の出来事を描く意図があったことが窺える。この絵画にはいろいろな解釈が可能ではあるものの、社会主義リアリズムが到来したあとのソ連時代でも、赤軍を称揚する（ものとして扱われた）この作品は、マレーヴィチの抽象絵画のなかでは、唯一、公式に認められていたものだったということは付言しておいてもいいだろう。

いづれにしても、メジンスキーがここでこの絵画を引用した意図については、ある程度、明らかのように思われる。「戦争反対」を表明してSNS上で拡散される真っ黒な画像を、あえてマレーヴィチの《黒い正方形》に見立てることで、それに対してこの別のマレーヴィチの絵を提示する。そこでマレーヴィチが「キエフ」出身であることを示しながらも、「ロシアの」という形容詞をつけてそのことを強調する。さらには、マレーヴィチの誕生日である二月二三日という、のちに「祖国防衛の日」として制定され、かつ、それが今回のウクライナ侵攻の日の前日にあたるその日を強調しながら、「十月の首都から」「ソヴェエトの国境を守るために」「赤き騎兵隊が疾駆す

る」というナラティブが作られているわけだから、戦争反対を表明する《黒い正方形》に対して、ウクライナに対するロシアの「特別軍事作戦」を肯定する目的で、同じマレーヴィチの異なる絵画を提示しているということだ。

ところで、ソ連解体後の独立により、また、とりわけ二〇一四年のロシアによる一方的なクリミア併合以降はよりはっきりと、ウクライナでは、「ロシア文化」による「ウクライナ文化」の「掠奪」の問題が強く意識されるような流れがある。いわゆる「文化の盗用」の問題（のひとつ）である。たとえば、ウクライナ出身の作家ゴーゴリを「ロシア文学史」のなかで語ることを不当なものともなし、ゴーゴリを「ロシア文学」から「ウクライナ文学」へと取り戻すことを訴えるような態度だ。メジンスキーが記すようにキエフ／キーウ出身であり、家系としてはポーランド系のマレーヴィチもまた、そうした対象となっている。たとえば、オレフ・ティストルというウクライナのアーティストは、マレーヴィチを「民族的にはポーランド人で、ウクライナが生み、ロシアが殺した芸術家」として語る¹⁹⁾。二〇一六年には、キーウにある現代美術館ミステツキイ・アーセナルで、「マレーヴィチ＋」という、マレーヴィチを中心にして（ロシア・アヴァンギャルドではなく）「ウクライナ・アヴァンギャルド」を紹介する企画展が開かれている。この展覧会は、必ずしも「マレーヴィチのウクライナ化」のみを目指したものではないものの、そうした傾向を帯びるものでもあった。

こうした論調のなかでは概して、マレーヴィチの「ウクライナ性」が謳われるのだが、そのときに挙げられるのは、マレーヴィチが基本的にウクライナで育っていること（一七歳くらいまではウクライナにいた）、その絵画に見られるウクライナの民衆芸術の影響、手紙などでのウクライナ語の使用、一九二八―三〇年にかけてキーウ芸術研究所で教鞭をとっていたこと、ウクライナ語の歌をうたっていたこと、自伝にみられるキーウへの郷愁や、晩年にはキーウに戻りたいと語っていたりしたことなどである。

「ウクライナ」の側からみた場合、実際には「ウクライナ出身」のマレーヴィチが、しばしば「ロシアの芸術家」と扱われることに憤りを覚え、その不当さを訴える気持ちはわかる。また、そもそも帝政ロシアやソヴィエト・ロ

シアによる「支配」を受けてきたという意識に鑑みれば、植民地主義的な感覚に根ざしてしばしば悪意なくなきされる「文化の盗用」（しかもメジンスキーの場合は意図的なそれ）を弾劾する必要はあるだろうし、少なくとも、「出身」という点で「ウクライナの」ということは間違いない。

だが、「マレーヴィチはロシアに属していない」と訴えることと、「ウクライナの」というナショナリティをマレーヴィチに付与することとは異なるのではないだろうか。無論、「ソ連に属している」、ましてや「ロシアに属している」などと言いたいわけではない。つまり、「マレーヴィチはウクライナ出身である」という事実確認が、ややもすれば「マレーヴィチはウクライナに属している」という言説に転じてしまう際に生じるパフォーマティブな効果、すなわち、そう語ることによって実際に何が為されるのかについては、慎重に考えるべきなことだ。

マレーヴィチ自身が、自らのアイデンティティを「ウクライナ」というナショナリティに結びつけることを望むならば、もちろん話は別だ。マレーヴィチに限らず、自身がそうしたことを明確に望んでいるわけではない限りは、作家やその作品が第三者によって何らかのナショナリティに結びつけられるべきではないと、私自身は考える。

実際、マレーヴィチはどうだったのか。一九一八年頃に書かれた「人権宣言」プロジェクトと題されたメモのなかの言葉を引くことでこの稿を閉じたい。マレーヴィチの「思想」はきわめて複雑であるから、このようなメモのみを取り上げて述べるのはかなり恣意的かもしれないが、その誹りは甘んじて受けよう。

1. 生と死——それは各人の所有物であって、誰であれ、いかなる理由であれ、その権利を奪い取ることはできない。この法が人類に認められるそのとき、人は言うことができる、「私は自由だ」と。

2. 諸国家のあらゆる境界を廃絶すること、ナショナルリテイを廃絶すること、祖国を廃絶すること、それらが完全さへと導くことになる。

3. 生の目的とは、人間が多様な人種に分けられている状態から、人間をひとつの種へと構成することである。人種の廃絶は、人間の本能にある。そして、人種、ナショナルリテイを区分けするようなあらゆる法は、素朴な未開人の遺物である。[……]

4. 共通言語——それは未来の賜であり、その力は驚くべきもので、その音は、数多のオーケストラよりも力強い。

5. 人種の廃絶。²⁰¹

1

<http://unesco.ru/news/kuznetsov-remarks-214th-session-1/>

2

煩雑さを厭わずにいえば、たとえば、ある企業に属している社員による不適切な言動によって起こる「キャンセル」を念頭におけば、「××が属している〇〇に属している△△をキャンセルする」というほうがより正確にはなるだろうが、今回の「ロシア文化のキャンセル」を考えるにあたってはこの「正確さ」は必要ないだろう。また、「属している」ではなく「関係する」という言葉を用いることもできるが、しかしその場合はおそらく、際限なく△△が広がる可能性をもつため、結果的にその「キャンセル」からは説得力や妥当性が失われることになるだろう。

3

本稿では、ここで問題となる「文化」をきわめて曖昧なかたちで用いる。漠然と念頭においているのは、いわゆる「芸術」の諸分野や「思想」等を含めた人文的なものとなる。

4

<http://kremlin.ru/events/president/news/66181>

5

<https://interfax.com.ua/news/interview/753029.html>

6

<https://russkiymir.ru/fund/>

7

私も所属する日本ロシア文学会が、侵攻後、「ロシアの言葉・文学・文化を今、あるいはこれから学ぶ皆さん」というメッセージをHP上に掲載したが(http://yari.jp.nu.org/?action=common_download_main&upload_id=769)、このメッセージをロシア政府系メディアである「スポーツニク」が好意的に取り上げたのも「ロシア世界」という背景があったことだろうと思われる(<https://jp.sputniknews.com/20220330/10494601.html>)。

8

ただし、実際に「キャンセル」に関わっている個々人の考え方がどうかはおくにしても、このような短絡的な文化観を押しつけることでは片づけられない問題もあることは言うまでもない。「文化」とはそもそもイデオロギー活動であり(必ずしも政治的イデオロギーのことを意図しているわけではない)、そのなかには意図的にであれ、結果的にであれ、価値判断が含まれざるを得ない。たとえば、とりわけ帝政時代には、(大雑把にいえば)現在の「ウクライナ人」を「小ロシア人」、「ロシア人」、「大ロシア人」と(日本語でこのように訳されるロシア語で)呼んでいたが、ここでいう「小」の語源がいかなるものであろうとも、この「大」「小」には価値判断が含まれている(かの)ように映らざるを得ない。そうした例を挙げながら、たとえば、ウクライナ侵攻を引き起こすプーチンが抱いているような「ウクライナ観」は、「ロシア文化」や「ロシア語」によって直接的・間接的に培われてきたに違いないから「ロシア文化をキャンセルする」というのも理論的には成り立つだろう。ただ、その場合、具体的に何がどのように影響を与えたのかを明らかにした上で「キャンセル」が為されない限りは、ただのルソフオビアと区別がつかないものとなるのではないだろうか(そして、特

- 定の思想家や著作の影響ならばまだしも、キャンセルすべき「ロシア文化全体」がそうした影響を与えたといふことなど証明できるのだろうか。)
- 9 <https://arts.gov.ua/urges-to-impose-cultural-sanctions/>; <https://arts.gov.ua/en/petition-to-impose-cultural-sanctions-on-the-russian-federation/>
- 10 たとえば、インターファクス・ウクライナのニュースサイトの二月二十八日付記事では、このバージョンで紹介されている (<https://ua.interfax.com.ua/news/general/803654.html>)。また、この声明は複数の言語で用意されているが、独語・仏語・伊語・日本語版を確認する限りでは、このバージョンで翻訳がされており、それ故、署名を求める際に提示されるバージョンとは異なることになる。それらに鑑み、これが最初に表明されたバージョンと判断した。なお、二つあるウクライナ語版のうち、署名を求める際に提示されるバージョンは「Гі культура — токсична! (その文化は有毒だー)」となっている。
- 11 <https://twitter.com/bjutsutecho/status/149884745164596224>
- 12 「朝日新聞」二〇二二年三月十六日朝刊。
- 13 Основы государственной культурной политики. С. 1. [<http://static.kremlin.ru/media/acts/files/0001201412250002.pdf>]
- 14 *Мединский В.* Кто не кормит свою культуру, бюджет кормить чужую армию // Известия. 17. 06. 2015. [<https://iz.ru/news/587771#kzz3Okh5ak8>]
- 15 したがって、彼が文化大臣であった時期、すでに伝統となっているような既成のロシアの文化を普及するという点では、その「功績」を認めざるを得ないだろうと私自身は思う。
- 16 Владимир Мединский ответил митрополиту Софронию // Известия. 27. 03. 2014. [<https://iz.ru/news/568228#kzz3aayBS9vI>] × ジンスキーの「歴史」に対する姿勢や、自らの出自に関するアイデンティティについては、日本語で読めるものとしては以下が参考になる：青島陽子「ウクライナ戦争の歴史的位相」 [<https://src-h.slav.hokudai.ac.jp/center/essay/PDF/20220411.pdf>]
- 17 これはもともとインスタグラムに投稿されたものであった。
- 18 たとえば次を参照：<https://globe.asahi.com/article/14558543>
- 19 *Григорьевий Р. Малевич.* Український вимір. Як побороти культурну анексію? «День» зібрав найцікавіші думки // День. 17. 06. 2016. [<https://day.kyiv.ua/uk/article/kultura/malevuch-ukraynisku-vymir>]
- 20 *Малевич К.* Собр. соч. в 5 томах Т. 5. С. 99.

ロシア正教会によるウクライナ侵攻支持の背後にある翼賛的な政教関係

高橋沙奈美

はじめに

ロシア正教会は、五世紀近くにわたって東方正教会最大の規模を誇ってきた。今その基盤が、根本から動揺している。その原因は、ロシア正教会の首座主教（最高位の聖職者）キリール総主教のウクライナ戦争勃発後の一連の政治的発言や態度によるものである。キリール総主教とロシア正教会は、プーチン政権による戦争犯罪の「イデオログ（宣伝係）」として、西側メディアの批判の対象となっている。

例えば、日本のマス・メディアが正教会を取り上げる際には、KGBのエージェントとしてのキリール総主教の過去であるとか、核兵器をはじめとする武器を清める聖職者の姿¹だとかが強調され、不可解な宗教としてのロシア正教会が描かれる。また、欧米のメディアにおいても、ウクライナ侵攻の背景に、「ロシア世界」というロシア正教会が関わる理念が影響力を及ぼしていることが指摘され、この戦争を推進する正教会に対する批判が展開されている。筆者もまた、この「ロシア世界」の理念の影響力を否定するものではない²し、プーチンの戦争を全面的に支援し続けるロシア正教会が、この戦争とそれがもたらしている悲劇に対して重大な責任を担っていることに疑念はないと考えている。

しかしながら同時に、ロシアという国の宗教事情を俯瞰して、ロシア正教会に戦争支持以外の道があったのかと問うとき、その答えは極めて否定的なものとならざるを得ない。正教会の戦争支持の姿勢は、キリール総主教の個人的なキャリア形成や人間性どころか、ビザンツ帝国から受け継がれたとされる国家と教会の理想的な共存関係、すなわち「シンフォニア」の理念³⁾によっても説明しきれないのではないかと思われる。それはむしろ、現在のロシアの国家体制において、宗教団体が一定の社会的影響力を保持しようと考えるとき、不可避的に翼賛的でなければならぬという構造が存在していることによるのではないか。このような政教関係について検討することが、現状を分析するために重要であることを鑑みて、議論が十分に尽くされない点は多々あるものの、試論的に論じてみたい。

キリール総主教による戦争支持とロシア正教会の動揺

東方正教とは、古代キリスト教が東西ローマ帝国のそれぞれの領内で独自の発展を遂げる中で誕生したキリスト教の一宗派である。西側で発展したローマ・カトリック教会がローマ教皇を頂点とする中央集権的な教会制度を持つのに対し、東方正教会は世俗の国家領域に対応する領域を管轄する「独立教会制」をとる。その教会を管轄する首座主教以上の上位者を持たず、ほかの独立教会と相互領聖 (full communion) の関係を結んでいる教会を「独立教会 (autocephalous church)」と呼ぶ。二〇二二年五月現在、全世界に一五の独立正教会が存在する世界総主教の称号を有するコンスタンティノポリ総主教が「同輩中の首位」として名譽的な地位を認められてはいるが、相互に対等な関係にあることが前提とされている。

ロシア正教会は、アルメニアとジョージアを除く旧ソ連のほぼ全域とフィンランド、中国、日本、さらにそれ以外の地域のロシア人ディアスポラを管轄している⁴⁾。中でもウクライナは、ルーシと呼ばれた東スラヴ民族が東方

正教を奉じることになった歴史的な故地であり、モスクワ総主教座の管轄下にあるウクライナ正教会（DPO-MP）は、現在も一万人を超える聖職者を抱える⁵¹（ロシア正教会全体での聖職者数は約四万人⁵²）。ウクライナ国内の正教会はいくつかに分裂しているが、モスクワ総主教座の管轄下で特別の自治権（首座主教の任命権と外部の正教会の交渉権を除くすべての権利）を認められたウクライナ正教会は国内最大の宗教団体である。しかし、ウクライナ戦争が終結した時、ロシア正教会がどのようなものになっているのか、予測することは困難である。

二〇二二年二月二十四日、ロシアによるウクライナ侵攻が開始されて以来、キリール総主教は国家防衛の要としてのロシア軍を支持する言動を日曜の礼拝後の説教で繰り返している。ドンバスで八年にわたって戦争が続いているのは、この地が（キリール総主教にとつての）西側の価値観の象徴である「ゲイパレード」を認めないからだという説明をしたり（三月六日）、国家親衛隊にイコンを贈ったり（三月一三日）、モスクワ郊外のロシア軍のための聖堂を訪れて若い兵士たちを鼓舞したり（四月三日）、ロシアはこれまで他国に侵略戦争を仕掛けたことはない、その戦いはいつも防衛戦であるという主張をする（五月三日）といったものである。

キリール総主教によるロシア軍支持の表明は、なによりも正教会とキリスト教世界で大きな動揺を引き起こしている。ウクライナ正教会では、キリール総主教の権威を認めない主教区が増加している⁵³し、ロシア正教会からの独立を宣言する公会（教会会議）の開催を求める声も上がっている。アムステルダム主教区は、モスクワ総主教の管轄から断絶した⁵⁴し、リトアニア正教会でも一部の教区に同様の動きがみられる。ロシア革命の余波を受けて一九三〇年代のパリで形成され、二〇一九年にモスクワ総主教座の管轄下に戻ったばかりであった西ヨーロッパ大主教座を率いるイオアン府主教は、キリール総主教に戦争反対を呼びかける公開書簡を送った⁵⁵。正教会の政治状況に精通している研究者のニコライ・ミトロヒンによれば、ニューヨークに本部を置く在外ロシア正教会もまた、キリール総主教に対する畏敬の念は薄いようだ⁵⁶。この教会もまた、ロシア革命によって亡命した高位聖職者たちによって一九二〇年代に形成され、二〇〇七年にモスクワ総主教座と和解を果たしている。

ウクライナ正教会の司祭アンドレイ・ピンチュークは、最も権威ある総主教（コンスタンティノープル、アンティオキア、アレクサンドリア、イエルサレム、キプロス）によってキリール総主教に対する教会裁判を開催することを求め、四〇〇を超える署名を集めている¹¹⁾。アメリカのフォードム大学正教研究所とギリシアのヴォロス神学研究アカデミーは、キリール総主教が唱えているのは自民族中心主義（ethno-phyleism）を前面に押し出した異端であると非難する、「ロシア世界」（ルースキー・ミール）教説に関する宣言」を発した¹²⁾。また、キリスト教の宗派間の対話と統一のためのプラットフォームである世界教会協議会（WCC）では、ロシア正教会を除名すべきであるという声が高まっている¹³⁾。また、キリール総主教とオンライン会談を行ったローマ教皇フランシスコは、総主教がキリストの言葉でなく、政治の言葉を語っていると批判した¹⁴⁾。

ウクライナ正教会やロシア国外に展開する教区をその管轄下から喪失することや、キリスト教世界における威信低下の現実的な可能性にも関わらず、キリール総主教が「政治の言葉」で語り続けるのはなぜなのだろうか。

正教会に留まらない、「翼賛的」な政教関係

ソ連解体後のロシアにおいて、伝統宗教は民族と結びつけられ、これらの宗教団体の調和的共存が、多民族国家の平和的共存を象徴するものとして、常に強調されてきた。ロシアにおける正教徒信者の割合は人口の七割前後であると言われるが、多民族多宗教国家であることには議論の余地がない。ロシア連邦の宗教法は、前文において、ロシア正教に特別の地位を認めながらも、正教、イスラーム、仏教、ユダヤ教を伝統宗教として重んじることを謳っている。これらの宗教団体は「ロシア宗教間評議会（Межрелигиозный совет России）」を結成し、社会生活全般における宗教的伝統とその価値観の重視や、非伝統的宗教（外国由来の宗教や新宗教）の浸透を抑止する方策などを推進している¹⁵⁾。ここでは現在のロシアにおける国家権力に対する伝統的宗教団体の姿勢を、「翼賛

的」な政教関係と位置付ける。「翼賛的」政教関係にあつて、宗教団体は実質的には国家権力を支持する以外の選択肢を持ちえないにもかかわらず、法的には個別に独立した意思決定機関を有しており、その意味において「自律的」に多様な分野において国家権力を補佐する役割を担う。

そのような翼賛的体質は、これらの宗教団体の指導者が、それぞれ異口同音に今般の「特別軍事作戦」を支持していることにも端的に表れている。ウクライナにおける最大規模の宗教団体である「ウクライナ正教会」の上位にあるロシア正教会のみならず、ウクライナにおいても一定の信者数と重要な歴史的つながりを持つイスラームや古儀式派もまた、そのロシア国内の指導者がこの戦争を支持しているのである。ただし、これらの宗教指導者たちは、ウクライナ戦争を「ロシアによる侵略」とはみなさず、ロシアを防衛するための「特別軍事作戦」というロシア政府の立場を共有して、あくまで「防衛」を支持しているという立場を強調する。イスラームでは、三月一六日にウラジカフカースにおいて行われた会議で、ウクライナ戦争をムスリムにとっての「ジハード」であると認める声明が出され、中央ムスリム宗務局（ロシアにおけるイスラームの統括機構）のムフティらがこれに署名した¹⁶¹。一七世紀にロシア古来の伝統を守る宗派として分裂したロシア正教会古儀式派（ベロクリニツキー派）においても、モスクワ府主教コルニリーが、「軍の使命は兄弟民族の統一維持」であるとして支持を表明している（三月六日）¹⁷¹。唯一、ロシア・ユダヤ教会の首席ラビ、ベレル・ラザルが戦争反対を表明し、ウクライナとロシアの仲介になる用意があると宣言した（三月二日）¹⁸¹。このことはつまり、ロシアの宗教団体による戦争支持が、個々の宗教団体の内的な倫理観や、指導層の議論ではなく、別の権力構造や力学によって方向づけられている可能性を示していると考えられるのである。

伝統的宗教団体は、家庭生活や学校教育、慈善活動などに留まらず、経済産業活動、メディア、医療、学術研究、芸術文化、軍など社会のありとあらゆる分野にその影響力を及ぼしている。社会学者のレフ・グドコフは、宗教団体の制度的資源が、市民の行動に対する社会的統制を補足的に確立するものとして利用されていると分析してい

る¹⁹⁾。国家にとって、伝統的宗教団体が伝統的価値観による秩序の維持を提供するものであるとすれば、伝統的宗教団体にとって、制度的資源を提供することは、自らの社会的影響力を拡大することにほかならない。つまり、翼賛的な政教関係は国家と伝統的宗教団体の双方にとって魅力的な構造をなしており、ソ連解体後の混沌としたロシア社会において急速に浸透したのである。翼賛的政教関係を、近代社会における「世俗化」の流れに逆行する「教権化(крепкая власть)」と捉えて批判する言説も現れ始めてはいるが、概念としてはいまだ十分に議論されているとはいえない状態である。

過去の教訓

帝政期までのロシアでは、ロシア正教は重要な位置付けを与えられていた一方、「聖宗務院」という機関によって国家の統制下に置かれていた。帝政期までの政教関係がソ連期以降の翼賛的な政教関係にいかに関承／あるいは断絶されたかについては、より詳細な検討を要するため、安易な言及は避ける。

ここでは、ロシア革命後のソ連体制形成期に構築された政教関係を「翼賛的な政教関係」と捉えたい。宗教を否定したポリシェヴィキ政権は、そもそもロシア正教会の完全解体を狙っていた。ソ連国内で合法的に活動を展開するために、ロシア正教会に残された選択肢は、政権の要求に応じる従順な組織として生まれ変わる以外になかった。まずはその点について、確認しておきたい。

ポリシェヴィキ政権によって、正教会をはじめとする宗教団体は徹底的な政治弾圧を受けた。それは聖職者・信者の逮捕や流刑・処刑、聖堂の破壊・転用といった物理的抹殺にとどまらず、教会組織全体を解体しようとするものであった。一九二〇年代末までに、ロシア正教会の指導層は、亡命や政治的見解によって分断され、文字通り存亡の危機に瀕していた。一九二七年、当時の暫定的な首座主教であったセルギー府主教は、「私たちは正教徒で

あると同時に、市民としてソヴィエト連邦を祖国としたいと思う。その喜びと成功は私たちの喜びと成功であり、その失敗は私たちの失敗である」とする声明を発表した。のちに「忠誠宣言」と呼ばれるこの声明は、高位聖職者（主教以上の教会指導者）にさらなる分断をもたらした。国内では「反セルギー派」ともいうべき、セルギー府主教の権威を認めない派閥（Непоминишники）が生じ、ソ連政権への忠誠を書面で提出するように求められた亡命主教たちは、本国教会と実質的に断絶した。こうした大きな分断はあったものの、ロシア正教会の本流は、ソ連体制に翼賛的な宗教団体として、存続を試みることに舵を切り、その後の独ソ戦という総力戦の中で、愛国主義を鼓舞しソ連体制を支える教会へと積極的に変貌していったのである。

この状況は、現在のロシア正教会を取り巻く状況に酷似していると、ウクライナの政教関係についての専門家であるカナダの研究者アンドリー・クラウチュクは指摘する²⁰。ただし、セルギー府主教の声明がソ連政権による圧倒的な暴力を背景に出されたものと理解されるのに対し、キリール総主教の言動は主体的であるとしか理解されない。一九二〇―三〇年代、亡命者の教会を率いていたアントニー府主教は、セルギー府主教を「哀れに思う」という書簡を残したが、キリール総主教に対する「同情」や「憐憫」は管見の限り表明されていない。一九二七年のロシア正教会が、政治弾圧の結果物理的に困窮し、さらに内部の分断まで抱えた弱体化した組織でしかなかったのに対し、二〇二二年のロシア正教会は莫大な資産を有し、世界中に影響力を行使しうる巨大な組織である。こうした違いにもかかわらず、国家との協力なしにしては、現状の教会体制を維持しえない、という点において、セルギー府主教とキリール総主教の立ち位置はやはり類似しているのかもしれない。セルギーにとっても、キリールにとっても、キリスト教的倫理に基づいた訴えは彼の教会を抹殺する恐れがあるが、国家的要請に基づいた訴えを繰り返すことは彼の教会を、少なくとも「この世」において、「救済」するのである。

正教会の良心のゆくえ

一方のロシア正教会内部で、こうした翼賛体制に抗おうとする人びとはどの程度存在しており、どの程度の影響力を及ぼしうるのであろうか。

このことを如実に表していると思われるのが、第一にボリシェヴィキ体制に抗して命を落とした聖職者・信者を現在の正教会がいかに記憶するか、という問題である。二〇世紀の殉教者たちは、一九八一年の在外教会本部、ニューヨークにおいて「新致命者」として列聖された。彼らについて語ることが不可能であったソ連国内では、文学青年だったウラジーミル・オルロフスキーによって、一九七〇年代末から殉教者に関する情報の収集が始まった。のちに、ダマスキオン修道士となったオルロフスキーは、一九九〇年代半ばまでにソ連各地で回想や家族や知人の残した写真や記録を集めることに成功した²¹⁾。ソ連解体後のロシア正教会は、列聖委員会を組織してさらなる殉教者の情報を集め、二〇〇〇年のミレニアム公会において新致命者を列聖した。その数は二〇一八年までに一七七六名に上る²²⁾。

しかしながら、新致命者は現在のロシアにおいて「人気のある聖人」ではない。ソ連解体後のロシアでは、聖人崇敬は一般の正教信者にとって信仰の重要なファクターとなっており、ラドネジのセルギー、サロフのセラフィム、といった伝統的なロシアの聖人のみならず、サンクト・ペテルブルクのクセーニヤ、モスクワのマトローナ、果ては最後の皇帝ニコライ二世²³⁾までもが、篤く崇敬されている。一方で、新致命者は聖人としてほとんど崇敬の対象になっていない。新致命者はその圧倒的な数の多さゆえに集団として記憶され、個別の偉業が記憶されにくい、聖人崇敬にとって重要な聖遺物が残されていない場合が多い、奇跡譚と結びつかないなど、新致命者が崇敬されない理由はさまざまに説明されている²⁴⁾。しかし、ここで重要なポイントとなるのは、新致命者が信者大衆にとっての「ロールモデル」とならない、というジャンナ・コルミナの指摘であろう。権力に抗ってでも自らの信

念、理想、理性などの価値観の塊である信仰を手放すことを潔しとしなかった殉教者の生き様は、一部の知識人を惹きつけるものでしかない。²⁵⁾ 翻つて(いささか極論ではあるが)、現在のロシア正教会における新致命者の知名度の低さが、ロシア正教会の大勢がそうした批判的な知性の存在を求めていない、ということを物語っているのである。

第二に、ロシア正教会内部で活動してきた批判的知識人たちが、二〇一〇年代以降、正教会の活動から離れていったことも、正教会が翼賛的な性格を強めていったことを示している。例えば、ロシア正教会代表者として国際的な舞台上で活躍し、神学校の教授を務め、二〇〇八年以降はウクライナ正教会の渉外局代表としても活躍してきたキリール・ホボルン掌院は、キリール総主教に対する批判を理由に二〇一二年以降、要職を解かれていた。²⁶⁾ 同様に、二〇〇九年からモスクワ総主教庁の公式広報誌『モスクワ総主教庁ジャーナル』の編集主幹を務めていたセルゲイ・チャプニン(一般信徒)は、二〇一四年のマイダン革命、クリミア併合を経てロシア正教会への批判を強め、辞任という形でロシア正教会を去った。このように、現在のロシア正教会に対して批判的な人物は、正教会から「追放」されるか、沈黙を余儀なくされているのである。

第三に(第二の論点とも重なり合う問題だが)、正教会における批判の声、特に戦争反対の声が徹底的に無力化されているという問題がある。戦争開始直後の二月二五日、コストロマーの一司祭イオアン・ブルジンは、戦争反対のメッセージを友人と共に編集してインターネット上に公表した。イオアン司祭の友人は、ゲオルギー・エデリシュテインという異論派の伝統を汲む司祭で、イオアン司祭の前任者でもある。三月六日、イオアン司祭は自身が司牧する村の教会にて戦争に反対する説教を行い密告された。²⁷⁾ ゲオルギー司祭は現在八九歳。メディアの取材に積極的に応答してはいるが、闘士としての一線はすでに退いている。また、一般の司祭たちの間でも、ウクライナ侵攻に反対する声はわずかながらに上がっている。三月一日、「ロシア正教会の聖職者による和解と「特別軍事作戦」の停止を求めるアピール」と題する声明文がグループフォームでインターネット上に現れた。²⁸⁾ 信仰と希

望と愛の精神に基づいて即時停戦を訴えるこのアピールに署名したのは、五月九日現在までに、わずか二九三名の聖職者に過ぎない。モスクワ総主教座のスポークスマンであるウラジミール・レゴイダは、このアピールについて、ロシア連邦全土には、二万人を超える聖職者がいることを考えれば、これに賛同する聖職者は大河の一滴に等しい存在であることを指摘し、この書面には意味がないと主張した²⁹⁾。

このアピールに署名をすることは、社会的な制裁を受ける危険性や、聖職から解任される恐れを引き受けることでもある。大学で教鞭を取ることを生活の糧にしている研究者が大学を追われては生きていけないように、司祭職を解かれれば聖職者の多くは食べてはいけない。圧倒的で巨大な翼賛体制に組み込まれた巨大な正教会という組織の中で、際立った才覚や支援を与えてくれそうな国外の機関とのつながりを持たない「普通」の人間が批判的に行動するということは、極めて大きなリスクを伴う。翼賛的な政教関係においては、内部からの批判は大きな火種になる前に揉み消されてしまうため、内部からの体制変革が非常に起こりにくいのである。

本論では十分に論じることができなかつたが、現在のロシア連邦内で、ロシア正教会がどのような分野でどのくらいの影響力を行使しているのかについては、詳細な検討が必要だろう。さらにそのうえで、ほかの伝統的宗教団体の翼賛的な体制についても明らかにし、比較検討をする必要がある。また、日本やそのほかの国における類似の宗教団体との比較さえ必要になるかもしれない。そのうえで、「教権化」と呼ばれる現象が展開しているロシアの現状について、より考察を深めていくことが求められている。

- 1 正教会と軍の関係に詳しいアダムスキーによれば、核兵器の聖別は一九九〇年代後半から行われるようになった。しかし、核兵器をはじめとする大量破壊兵器の聖別には、教会の内部でも異論があり、二〇二一年一月開催予定だった高位聖職者公会での廃止が議論される予定であった。しかし公会は新型コロナウイルスのために延期され、この問題は宙づりのままである。В РПЦ задумались об отказе от освящения оружия // Интерфакс, 28 мая 2021 г. (<https://www.interfax.ru/russia/769460>)
- 2 高橋沙奈美「割れた洗礼盤——「ロシア世界」という想像の共同体とその終焉」『現代思想 総特集「ウクライナから問う」二〇二二年六月臨時増刊号を参照。
- 3 地上の世界において、国家と教会は肉体と魂のように相互に影響し合う不可欠の関係にあるという考え方。ニコライ・シャブローフ「今日のロシア正教会と国家」津久井定雄 有宗昌子編『ロシア 祈りの大地』大阪大学出版会、二〇〇九年、二〇一―二五頁参照。
- 4 ロシア正教会の公式ページに記録されている情報による (<http://www.patriarchia.ru/db/organizations/30908/>)。ちなみに、フィンランド、中国、日本の正教会はモスクワ総主教座から自治教会 (autonomous church) の地位を認められている。
- 5 二〇二二年一月一日時点でウクライナ文化省による統計。Статистичні матеріали // Державна служба України з етнополітики та свободи совісті (<https://dcss.gov.ua/statistics-2020/>)。ロシア正教会は二〇一九年の統計。Внутренняя жизнь и внешняя деятельность Русской Православной Церкви с 2009 года по 2019 год // Русская Православная Церковь. Официальный сайт (<http://www.patriarchia.ru/db/text/5359105.html>)
- 7 三月一六日時点で、ウクライナ正教会の五三の主教区のうち、西部を中心に、少なくとも一五の主教区で、教会における礼拝において慣例となっている高位聖職者のための祈祷から、キリール総主教の名を除くことが書面で表明されている。15 епархий УПЦ КП перестали поминати Кирила, однак про розрив стосунків з РПЦ наразі не йдеться, — протоієрей Данилевич (https://tsu.ua/15-eparhij-ucp-mp-perestali-pominati-kyryla-odnak-pro-rozriv-stosunkiv-z-rp-paraзи-ne-jetsya-----protoierej-danilevich_n127239)。祈祷しないことをもって、直ちにロシア正教会からの離反や独立を宣言したことにちなむわけはなさ。
- 8 Russian Orthodox Parish of Saint Nicholas of Myra in Amsterdam (<https://orthodox-amsterdam.nl/en/>)。二〇二二年三月、コンスタンティノープル世界総主教の管轄下に入った。
- 9 Open letter to His Holiness KyriI, Patriarch of Moscow, 09 March 2022 (<https://archeveche.eu/en/>)

- open-letter-to-his-holiness-kyril-patriarch-of-moscow/).
 // ロローナに於ける五月五日のFacebook投稿 (https://www.facebook.com/nikolaymitokhin.1/posts/pfbid02UosVUrwbNHmZSSB4NEA4XHL5jKFeUy81rvFahYtA6Nz1qtgtZu6k8J6XwzvY6hPU?comment_id=713912516626187&reply_comment_id=2540226426115007¬if_id=1651706330092652¬if_t=feed_comment_reply&ref=notif)。
- 11 Овьяненко УПЦ МП Андрей Пичук: Теорія «Русского міра» — ересь, яку має засудити міжнародний трибунал// Українська Правда, 14 квітня 2022 р. (<https://www.pravda.com.ua/articles/2022/04/14/7339571/>)
- 12 「ロシア世界」教説に関する声明 (https://www.rolyumenyvolos.org/2022/04/05/orthodox_declaration_in_japanese/)。五月六日時点の「一四〇〇名を超える神学者、聖職者が署名した声明」。
- 13 例えば、英国教会の前カントナリー大主教が除名の可能性を示唆したなど (<https://www.christiantoday.co.jp/articles/30802/20220411/rowan-williams-talks-ekrel-russian-orthodox-church-wsc.htm>)。ただし、対話のために除名を避けるべきだとする意見も、WCC総幹事代行のイオアン・サウカ司祭（ルーミアニア正教会）から出ている (<http://www.kirishin.com/2022/04/16/53856/>)。
- 14 「教皇「モスクワに行く意思ある」伊紙編集長との対談で」 Vatican News (<https://www.vaticannews.va/ja/rope/news/2022-05/colloquio-del-papa-col-corriere-della-sera-20220503.html>)。
- 15 評議会の公式サイト「トミンネージ」 (<http://intelligious.ru/>)には「ロシア連邦の国旗である赤白青の三色旗と国章である双頭の鷲が描かれており、一見して国の機関であるような印象を与えるが、ロシアは憲法で国家と宗教団体の分離を掲げる世俗国家である」。
- 16 Вадим Сидров. Мусульманское измерение российско–украинской войны// ТРПТнарусском, 30 марта 2022 г. (<https://www.ttrussian.com/mnenie/musulmanskoe-izmenenie-rossijsko-ukrainskoj-voiny-8395145>)。また「ロシアにおける仏教団体の指導者であるタンバ・アルシエエフ博士もウクライナ侵攻を容認する発言を行っている」。「С нами Будда» — глава буддистов России о спецоперации (<https://region.ru/news/society/3522915.html>)。
- 17 「лава старообрядцев назвал спецоперацию на Украине религиозной Апокалипсиса// Интерфакс религия, 29 марта 2022 г. (<http://www.interfax-religion.ru/?act=news&div=78826>)。
- 18 «Я готов на любое посредничество»: Главный раввин России призвал религиозных лидеров выступить за мир// Коммерсантъ. 3 марта 2022 г. (<https://www.kommersant.ru/doc/5239559>)。

- 19 Гудков Л. Д. Абортивная модернизация. М.: РОССПЭН, 2011. С. 395–397.
- 20 Andrii Kravchuk, Putin's War against Ukraine: the Religious Dimension, SRC seminar, 16 March 2022. *Дамаскин (Орловский)*, архим. Слава и трагедия русской агиографии. Причисление к лику святых в Русской Православной Церкви: история и современность. М.: Региональный общественный фонд «Память мучеников и исповедников Русской Православной Церкви», 2018. С. 224.
- 22 Karin Christensen, *The Making of the New Martyrs of Russia: Soviet Repression in Orthodox Memory* (Routledge, 2018), p. 28.
- 23 ニッポン二世もまた「新致命者」として在外教会で列聖された。高橋沙奈美「皇帝が捧げた命」『ロシア史研究』107号 1011年 110–114頁。
- 24 Christensen, *The Making of New Martyrs*, pp. 176–180.
- 25 Jannine Kormina, 'Canonizing Soviet Past in Contemporary Russia' in Janice Boddy and Michael Lambek ed., *A companion to the Anthropology of Religion* (Wiley Blackwell, 2013), pp. 414–415. <https://antimodern.ru/o-kinill-govornik-tajnoe-stanovitsya-yaluput/>
- 26 «Прийти в храм и делать вид, что ничего не случилось, невозможно» Костромской священник Иоанн Бурдин — об антивоенной проповеди, за которую его будут судить // Медуза, 9 марта 2022 г. (<https://meduza.io/feature/2022/03/08/pryti-v-hram-i-delat-vid-chto-nichego-ne-sluchilos-nevozmozhno>).
- 28 «Нет другого пути, кроме прощения и взаимного примирения»: Священники РПЦ призвали к прекращению боевых действий на Украине // Коммерсантъ, 1 марта 2022 г. (<https://www.kommersant.ru/doc/5238782>), Обращение священнослужителей Русской Православной Церкви с призывом к примирению и прекращению войны (https://docs.google.com/forms/d/1u0GduXidFQ1A3VQaEEQr744swDzmqS1QePaAvI4z6vq3w/viewform?edit_requested=true/).
- 29 Легейда: Пастырский долг сегодня ведет священника в пункты размещения беженцев // Российская газета, 28 апреля 2022 г. (<https://rg.ru/2022/04/28/legoida-rastyskiy-dolg-segodnja-vedet-svashchenika-v-punkty-razmesheniya-bezhencev.html>).

若き愛国作家の憂鬱

松下隆志

ロシアによるウクライナ侵攻が開始された後、二〇一四年のクリミア併合の頃からイギリスに半ば亡命していたアクーニンは、反プーチン派の在外ロシア知識人らと協力して「本当のロシア」と称するウクライナ支援の組織を設立した。これは画期的なことだ。ロシアの言論界の分断はつとに深刻なものだったが、二〇世紀の亡命文学のように、今後はアクーニンのようなリベラルな価値観を持つ在外ロシア作家たちが「本当」のロシア文学を担っていくことになるかもしれない。

もともと、どんなロシアが「本当」なのかは主観的な価値判断に基づく。プリレーピンは開戦後のブログで、今「偽物とオリジナルの闘争が起きている」と綴った。筆者は五年ほど前に『ゲンロン6』に寄稿した論考でプリレーピンを「ポスト・トゥルース時代の英雄」と呼んだが、私たちがいま目の当たりにしている戦争はまさに「真実」の覇権をめぐる戦争でもあり、プリレーピンのような右派の作家にとっては愛国的であることが「本当」の条件となる。

こうした状況にあつては、物事を客観的に見ることは困難を極める。そもそも「客観的」という概念が今日いったい何を意味するのか、それすらも判然としない。とはいえ、ロシアの文学や文化という総体が本当／嘘、体制／反体制、保守／リベラルといった二分法で語れるはずがないのは明白であり、両極の間には無数のグラデーショ

ンが存在している。そうした機微に触れるものこそ文学であり、それをすくい取ってやるのが文学研究者の役割ではないだろうか。

さて、言い訳じみた前置きが長くなったが、筆者はこの雑文で、ある若い愛国作家の言葉を書き留めておきたいだけだ。名前はアレクサンドル・ペレーヴィン。一九八八年生まれの新進気鋭の作家で、当初はインタートネットで詩を書いていたが、二〇一六年に作家デビューした。「第二のペレーヴィン」とも呼ばれ、実際、ナショナル・ベストセラー賞受賞作『ポクロフー17』（二〇二〇）は、現実と虚構が入り子になったメタフィクション的な構造が「ヴィクトル」の方のペレーヴィンを強く想起させる。

しかし類似は形式的な面に留まり、内容は祖国のための自己犠牲の尊さを説く愛国的なものになっており、物語は五月九日の戦勝記念日のパレードで締めくくられる。この若いペレーヴィンは愛国者であることを公言し、詩の朗読のためにドンバスの両「共和国」を何度か訪問している。作品が気に入ったわけではないが、プリレーピンやシャルグノフとは雰囲気の違い新世代の愛国作家の出現に興味を持ち、筆者は何気なく彼の「Twitter」アカウントをフォローした。

その後、大方が予想しなかったロシアによる現実のウクライナ侵攻が始まると、ペレーヴィンは次のようにツイートした。

ロシアはこれ以上は行かないと思っていたのだが、間違っていた。ああ、今起きていることを大喜びで歓迎することはできない、戦争はつねに非常に悪いものだから。すべてができるだけ早く終わって、民間人が苦しまないことを願う（二月二四日）。

立場に関わらず多少なりとも適切な状態を保っているすべての人に、心の健康と、周りで起きている最悪なことに耐

える精神力を願う。自分や近い人を気遣って、気を逸らすことが助けになるなら、気を逸らしてほしい。そう、周りでは最悪なことを起きている、これは絶対的な事実だ。でも最悪なことは必ず終わるし、僕たちはその後(たぶん)生きなくてはならない(二月二七日)。

三月八日、ナヴァリヌイのYouTubeチャンネルで「血に飢えたプーチンのスターたち」の一人としてペレーヴィンが紹介された。彼はそこで自分が『文学新聞』の「特別軍事作戦」を支持する声明に署名したと伝えられたことに反論し、「あそこに僕の署名はなかった」とツイートした(確かに『文学新聞』の声明の署名リストにペレーヴィンの名前はない)。

今起きていることは気に入らない。戦争は最悪なことだ。人が死んでいるときに、これを喜んで支持し、「ウラー」と叫ぶことはできない。幻滅した人がいたら悪いが。

無論、僕は邪悪で血まみれのワトニク¹、ファシスト、ヒトラー等々だが、どうか悪魔の角を余分に描き足さないでほしい、もう自分の角で充分だから。僕は人も食わなければ、血も飲まない。たとえそれが月経の血だろうと。

僕からヒトラー (Hitler) を作るのはやめてくれ、「ペレーヴィン (Perevin)」という苗字には同じ文字は三つしかない。(三月九日)

こうした断片的な文章を拾い上げてペレーヴィンを擁護する気は毛頭ない。ただの一時の感傷にすぎない可能性もあるし、筆者がこの文章を書いている五月初頭の時点ではペレーヴィンの「Twitterアカウント自体が消滅している」。

ロシア語には「言葉は雀ではない、飛び立ったら捕まえられない」という諺がある。皮肉にもこのSNS全盛

の二一世紀に言葉は雀のさえずり（ツイート）となり、放った言葉は自由に削除したり編集したりできるようなった。だからこそ、彼の言葉をここに書き留めておくことには意味があると思う。

今後「第二のペレーヴイン」がどのような作品を書くかはわからない。しかし、それはもはや単純な愛国小説ではあり得ないはずだ。

1

ロシアを盲目的に賛美する愛国者のこと。ソ連時代の質の悪いキルティング・ジャケット Буржес に由来。本来は蔑称だが、ロシアの愛国者も皮肉を込めて自称として用いることがある。

統計の奥を見据える

奈倉有里

一・統計の信憑性——「支持率」をどう読むべきか——

日本では「世論調査によると、プーチンは大半の国民に支持されている」という情報を、あたかも事実であるかのように引用する報道を多く見かける。

いったい報道機関は、なにを根拠にその「統計」を信用しているのだろうか。

たとえばロシア政府が「ウクライナにおける人的損害はすべてウクライナ政府と過激派の仕業」としたとして、その荒唐無稽な見解を「政府の公式発表だから事実」と捉えた人は、ごく少数なはずだ。しかしこと「支持率が高い」という発表となると、どういうわけか信じてしまう人が多い。「武力行使による人的損害について虚偽の見解をでっちあげる政府であれば、支持率をでっちあげることも多い」という前提は、なぜ見過ごされるのか。

まず、このようなとき問題になるのは、たとえ「政府の公式発表」が信用ならないとしても、その統計がいわゆる「独立系調査機関」によるものであればある程度は信用できるのではないか、という点である。

ロシアの統計調査機関は少ない。現存する主な調査期間はフォーム(FOM)、フツィオム(BIROM)、レバダ・セ

ンター (Levada-Lenra) の三種だが、このうち現在日本を含む国外のマスコミが依拠している情報源はほぼレバダである。二〇〇三年に創設されたレバダ・センターは、現在では政府から「外国エージェント」のレッテルを貼られている機関で、確かにそれだけを見るなら政権に阿るような結果を簡単に捏造しそうにないようにも思えるかもしれない。少なくともほぼ完全に政府のコントロール下にあるフォムやフツィオムよりは独立性を保っているのだと判断されているのだろう。

しかしレバダのおこなってきた(とりわけここ数年の)調査には、奇妙なものも多い。たとえば三年ほど前には、こんな質問による統計がとられている——「あなたは、スターリン時代のソ連がもたらした人的損害は、偉大な目的とごく短期間に達成した実績をかんがみるなら、肯定できるものであると考えますか」。少しでもものを考えたことのある人間なら、この質問のおかしさがすぐにわかるだろう。スターリン時代の「偉大な目的と短期間に達成した実績」などというものが事実として質問文に含まれ、それが「人的損害」と並べられて肯定するか否かと問うこの質問は、誘導尋問を通り越して脅迫のようですらある。

レバダには以前から依拠しているコンセプトがある——「ソ連人 Homo Sovieticus」。一般的な用法と細かい点で異なる部分はあるにせよ、全体的にはおなじみのあの言説だ——「多数に迎合し、強権を望むと同時に恐れ、主体性が弱く、奴隷的に従順で、上から言われることをそのまま受け入れてしまう人々。ソ連が崩壊しても、彼らの本質はなにひとつ変わらない」。いまもロシアの人々について、同じような批判をよく耳にする。しかし二年ほど前に政治学者のエカテリーナ・シュリマンがこの件について解説していた言葉を借りるなら、「こういう言説は往々にして、植民者が植民地の人々に対して、あるいは強者が弱者をひとつのまとまりとして区分するときを用いるものである。かつて白人が黒人に対し、あるいは男が女に対し、「相手をどう扱おうとも法を変えようとも、相手は本質的にそういう(従属的な)性質なのだから仕方ない、むしろその性質にみあったやり方が確立されているのだから、それを貫くべきだ」という考えかたを、相手を支配するために用いていた。ここではそれと同じ構

造が繰り返されており、たとえレバダの意図が社会批判的なところにあつたとしても、統計はえてして単体で切り離され別の威力を持つものに容易に加担してしまふ危険性をはらんでいる。

そしてこれにともない「外国のニュースを受容する」私たちの観点から重要になってくるのは、「支持率の高さ」を信じることによつて生じる、他者への断罪性である。上述の「ソ連人」についての話とも関連するが、「ロシアの人々はこんなひどい政権を信じている」「信じ易く騙されやすい」「考える力のない人々」というイメージは、国民全体をあたかも自分たちより一段劣つた人々のかたまりのように見ることができ、便利で浸透しやすい性質のものであり、それは容易にその国籍に属するすべての人々への攻撃性にもつながる。

言論弾圧が進むなかで自由な統計調査ができない状況は、とりわけ二〇一六年以降急激に進んできた。レバダが「外国エージェント」認定を受けたのも、与党の支持率が大幅に落ちたという統計を発表した四日後のことであり、その後のレバダの調査をみると、これが実質上の警鐘と脅しの役割を果たしたことがみてとれる。上述の一例をはじめとして、この時期以降にレバダがおこなつてきた数々の奇妙な質問とその統計結果の公表の経緯を検証することもなしに、現在の「統計」による政権支持率を事実として報道するのはあまりに軽率ではないだろうか。

むろん、「支持率」そのものが完全に嘘だ、というわけではない。大きな社会不安があり、反戦を訴えることで自分や家族の身に危険が及ぶ場合、できるだけ身の安全を最優先して発言しようとするのはまったく不思議なことではない。だがそれも「もし発言するのなら」である。考えてもみてほしい——「政府に賛同していない」ことが少しでも周囲に知れるだけで、警察から拘束され、職を追われ、その他ありとあらゆる危険が考えられるときに、あなたは「世論調査」に協力するだろうか。自分がその調査に応じて「反対」と言つたところで、ほんのわずかなパーセンテージが動くかもしれないだけだし、それすらわからない——調査機関が誠実に数字を反映することでもし調査機関自体が弾圧されると判断すれば、機関はそれを避けるための手段をとるだろう。逆に、支持率

が増えていけば堂々と結果を発表できる。現在の「独立系調査機関」が置かれているのはそういう状況だ。そして一般の人々にとって、調査で反政府を表明することは、リスクの割にメリットがあるかないかもわからない行為なのである。「なにかにつけて支持を表明しておくことで少しでも安全を確保したい」と思う人以外に、調査に協力する理由がないのだ。支持率の増大は、沈黙と恐怖の増大を示すものにほかならない。

リュドミラ・ウリツカヤは三月、インタビューにこたえて、「ロシア国内の私の知り合いのなかに、一人としてこの戦争を肯定している人はいない。けれども彼らの声は、マスコミの大きな声にかき消されてしまっている」と語っている。ウリツカヤとて、開戦直後の反戦声明以降、ドイツに逃れるまでの期間はほぼ沈黙をしており、このインタビューは出国後のベルリンでとられたものである。これまでいかなる状況であれ恐れずに自分の意見を述べてきたウリツカヤも、ロシアにいるうちはほとんど私たちにその声を届けることができずにいたのだ。次項では、いま大きな波となっているこの「国外移住」に焦点をあてる。

二. 理性と良心の流出——国外移住の新たな波——

二〇二二年二月二四日以降、多くのロシア人が国外に移住している。そのなかには作家や芸術家のほか、これまではたとえ出国の機会があつてもあえて国内に残っていた人々が含まれる。いったい、どういう人々なのだろうか。

そもそもソ連時代の初期から、ロシア人といえば「亡命」という言葉が連想されるほど、ロシアの文化人は国外移住という選択と隣り合わせで生きてきた。ソ連の亡命の波——「第一の波」（一九一七年の革命直後）「第二の波」（第二次世界大戦後）「第三の波」（「雪どけ」以降）、加えて仕事や私的な理由でソ連崩壊後の一九九〇年代に出国した人々もおり、ミハイル・シーシキンがスイスに移住したのもこの時期だ。

そして近年では二〇一二年の反政権運動以降の弾圧、二〇一四年のクリミア併合とウクライナ東部での紛争にともなう言論の弾圧により、かなりの数の著名人が出国を余儀なくされてきた。推理小説家のボリス・アクーニンはこの時期にヨーロッパに移住している。しかし、いま新たに出国している人々には、これまでとは異なる層の人々もいる。今回はそのいくつかのケースに焦点をあてて紹介し、国外移住の現状を探る。

①リユドミラ・ウリツカヤ——息子に心配されて——

長らくモスクワに拠点を置いて活動してきたリユドミラ・ウリツカヤも、今年三月、ついにベルリンに移住した。彼女の身を案じた息子に説得させられる形での出国だったという。

確かに、これまで反政府的な発言をしてきた作家や、今回の戦争に反対した作家はすでにほとんどが国外に逃れている。たとえば私が「無数の橋をかけなোস」(『新潮』五月号)のなかで言及した作家も、ブイコフ(アメリカ、後述)シーシキン(スイス)、グルホフスキー(イスラエル)、ゲニス(アメリカ、亡命第三の波)といった具合で、ロシアを訪れることはあっても生活の拠点は海外に置いている人がほとんどだったため、ロシア在住の作家としていちばん身の安全が気がかりだったのがウリツカヤだった。

ウリツカヤは今回の出国について、ドイチェ・ウエレのインタビュに答えてこう語った——「かつて、私は息子たちを国外に避難させたことがあります。あの子たちが兵役にとられる年齢になったころのことです。ロシアはアフガニスタンやチェチェンなどで常に戦争をしてきましたから、兵役にとられることだけは避けなければいけないと考え、息子たちをアメリカに留学させました。そして今回は、息子のほうが私の身を案じて逃げたくれと諭した。今度は私の番か、と思い、私は従うことにしました。どうやら慣れ親しんだ生活のすべてを変えていかなければいけないようですね。けれどもやはり、いつか、今度はモスクワの自宅にあなたたちを招いてお話ができる日がくるといいな、と思っています」。

②ドミートリー・ブイコフ——帰国が不可能に——

開戦直後、モスクワのラジオで反戦を訴えたブイコフは、アメリカの大学で講義をするためアメリカに滞在していた。しかし当初は「もし帰ってきたら殺されるから帰ってくるな」というフアンに対し、「すぐにロシアに戻る」と繰り返し返していたが、次第にその発言をしなくなり、四月以降は、おそらく当面は帰国を断念したと捉えられる発言をしている。四月、ロシア国内の言論規制はいまどうなっているのかという問いに対し、ブイコフは「政府のやっていることの内容は去年となら変わってはいない〔去年からすでに言論の弾圧が激化していた〕が、いまはさらに大量の文化人や企業のトップなどが国外に逃れている。今後、国内で生産的な活動するのはほぼ不可能になり、価値のあるものはほとんど国外でしか生み出されなくなるだろう」と語っている。また、アメリカでの講演にも以前より積極的に参加しオンライン公開をするようになっており、この流れでみると、今後は新たな「亡命ロシア人作家」として活動を進めるかのようにみえる。

③エカテリーナ・シュリマン——研究滞在と「スパイ認定」——

四月一三日ごろ、エカテリーナ・シュリマンがドイツに発った。研究助成を受けた一年間の研究滞在という名目だが、その二日後の四月一五日には彼女は個人として「外国エージェント」のレッテルを貼られ、当面の帰国がほぼ不可能になった。出国と事実上のスパイ認定の関係について彼女は、「ロシア政府のこうした決定は、通常わずか二日でなされるものではありません、私が出国する以前からその動きは進んでいたのだと思います」と答えている。また別の機会には、「自分がいつ外国エージェント認定されるかわからないとはずっと感じていた」とも語っている。つまり結果的に、ぎりぎりのタイミングで出国に成功したとも考えられる。身の安全が確保できたことについては安堵するが、むしろこれは苦渋の決断であった。

そもそも、ロシア政府はこういった人々を国外に出すことを止めようとはしないのか、という質問を受けることがある。逮捕できるうちに逮捕しておく、といったことはせず、ただ国外に逃れさせるのはなぜか。ラジオ局「モスクワのこだま」で政治コメンテーターをしていたシュリマンは、局が弾圧され閉鎖を余儀なくされた後、活動の場をYouTubeに移している。開戦後の動画の再生回数は多いもので二五〇万回を越え、国民からの注目と影響力は明らかだった。しかしロシアでは現在もまだYouTubeは見られるのだから、むしろ国外から心置きなく発言できるようになったら、政府にとって都合なのではないか、という疑問が生ずるかもしれない。しかしここには、徹底して叩き込まれた「国内／国外」の壁がある。シュリマン自らも語るように、国内にいるうちは、「この困難な状況をとともに乗り越えようとしてくれている仲間」と見られても、国外に逃れてしまえば「自分たちは見捨てられた」とか、「どうせ自分は安全なところからものを言っているんだ」とかいった批判がついてまわるようになる。これこそが政府にとって願ってもないことである。なにしろ国営放送を中心としたマスコミが徹底的にやってきたのが、「ほらみる、やはりスパイだった！」と言わんばかりにそういった人々の言葉を一括りに無効化することなのだから。

いま国を逃れているのは、作家や芸術家、そしてシュリマンのような政治学者、マスコミ関係者のほか、いかに弾圧が厳しくなろうともむしろ圧政下で苦しむ人々を助けようとしていた人権擁護団体、独立系報道陣、教育関係者に加え、ロシア国内のビジネス界で成功を収めていた企業家なども含まれる。ここまで人々が流出して、国内はどうなってしまうのだろう。今後ますます厳しくなるであろう弾圧から人々を守る術は残されているのだろうか。

そもそも、シユリマンが四月一五日に新たに認定された「外国エージェント」とはなにか。これは二〇一七年からロシア政府が主にマスコミなどの団体に対し用いるようになった認定であり、表向きは「外国からの資金援助を受けている団体」についてその特定をおこない、特定された側は常になんらかの形で自らが外国エージェントであることを示さなければいけない、というものだ。

この「外国エージェント」が政府公認のレッテルとなったとき、少なからぬ衝撃があった。この言葉は二〇一四年のクリミア併合のころから、「外国のスパイ」「非国民」といった意味合いで「民族の敵」や「第五列」とともに罵倒語のように用いられており、政府に批判的見解を示す文化人（ウリツカヤ、グイコフ、DDTのユリー・シエフチュークら）の悪魔的カリカチュアにこうしたレッテルを貼った粗雑なビラが街角でばら撒かれるなどの事態が起きていた。その他の罵倒語に比べれば比較的中立的な字面に見えなくもないが、このような差別的な攻撃性を持つ言葉を政府が公に認定として用いるようになったことは、控えめにみても言論統制が新たな段階に入ったことを示していた。

まず二〇一七年にこの弾圧が開始された当初は、「アメリカの声」「ラジオ・スヴァボード（フリー）」など広く国際的な報道網を持つ放送局や、「クリミアの真実」など明らかに政府の標的になる「都合の悪い」団体が標的となった。だがこの動きがさらなる猛威を振るいだしたのは昨二〇二一年である。「モスクワのこだま」「ドーシチ」といった主にロシアのみに拠点を置く放送局も次々に認定され、法的支援団体「OVD-info」やLGBT擁護団体も加わった。挙句の果てには二〇二二年から徐々に「非営利団体」と認定されていた人権擁護団体、報道の自由を訴える団体、憲法を守る会などが、それまでの「非営利団体」から芋づる式に「外国エージェント」の認定にスライドさせられていった。もはや、なにがどう「外国」なのかも定かではない、政府の独断による「裏切者」「非国民」のレッテルとなっていったのである。

このレッテルが個人に対して初めて用いられたのは二〇二〇年一二月、本格的に用いられるようになったのは

二〇二一年に入ってからだ。「ラジオ・スヴァボード」や「ドーシチ」といった放送局のスタッフ、雑誌『メディアゾーン』の編集長などメディアや出版界の上部が認定を受けていった。二月の開戦直後はいったん休止していたものの、四月一日以降突然これまでの枠を大きく拡大し、学者や作家やユーチューバーなどで目立った活動をする人々も次々に認定されていった。シユリマンが自ら近々標的となるのを悟ったのも無理はない流れである。

まとめ

今回ここで見てきた「支持率」と「国外移住」と「外国エージェント認定」は、それぞれが互いに深く結びついている。ロシア国内の人々は、頼りにしていた放送局や出版社や個人に対し、次々に命の危険にもつながる「裏切者」のレッテルが貼られていくのを日々目にしながら生きている。名のある人物は出国しても国外からの活動を続けられるが、私の友人を含め多くの市民は、国外に逃れたところで生活の術もない。ウクライナから避難してきた人々とは違い、「ロシア人」であれば、現在の世界の一般の人々が彼らに対しどのような攻撃性を持ち得るかもよくわかっているから、なおさら外に出られない。これまで文化と芸術を守り反政府の声をあげ、なんとか社会を変えようとしてきた友人たち——大学関係者、美術館・博物館のスタッフ、出版関係者、翻訳者、中学校の英語教師、職を転々としながら自らの道を模索していた若者——彼らはいま、ある者は徴兵の恐怖に怯え、ある者は職を失い、ある者はウクライナの祖父母の身を案じて日々涙し、ある者は自殺の際に瀕している。人権擁護団体や法的支援団体さえ徐々に身動きがとれなくなっている状況で反政府運動などしたところで、瞬時に潰されることは目に見えている。

よく耳にする、「ロシアの国民は真実に気づき、立ちあがるべきだ」というような批判は、開戦直後の情報が混乱した状態であればある程度の意味はあったかもしれないし、戦闘と弾圧が本格化する前に打つ手があるので

は、という希望もあつただろう。だが現在の状況をみる限り、それはあまりに酷な希望になってしまっている。

爆撃は目に見えるが、弾圧は見えづらい。「支持率」の数字を見ただけではわからないその内情は、国内の個々の事象をつぶさに追っていくことでは、解き明かせないのだろう。

ウクライナ戦争とロシアのクラシック音楽界の現在 ——二重の踏み絵は新たな鉄のカーテンか

梅津紀雄

二〇二二年二月二四日に開始されたロシア軍のウクライナ侵攻は、音楽の領域にも多大な影響を与えている。本稿では、まもなく三ヶ月を迎えようとする戦時下の中で、ロシア内外のクラシック音楽界にどのような状況が生じているかを特に重要と思われる事象を軸にまとめておきたい¹⁾。

はじめに

本稿は、主にオンラインの情報をもとにし、ロシアのクラシック音楽の音楽家の動向に軸足を置き、歴史的過去の事例にも着目しつつ、執筆時点までに起きている事象を整理する試みである。特に指揮者ヴァレーリイ・ゲルギエフ（一九五三）については繰り返し言及することになるが、それは彼が開戦の時点で世界の音楽界で大きな存在感を有していたからであり、ロシアに限って言えば、そのプレゼンスの大きさに変化が生じたとはいえない。彼の動向を見ていくためにはソ連時代に立ち返る必要がある、またソ連時代の文化政策を検討するためには帝政時代の状況も一瞥しておく必要がある。歴史的過去の事例は様々に挙げるができるが、文化国家として

のロシア連邦のあり様は帝政時代に遡って考える必要があることを予め述べておく次第である。

一・戦争勃発に伴って何が生じたのか

まずは戦争勃発直後の事態を整理しておこう。最も注目を集めたのは、いわゆるキャンセル・カルチャーであり、【a】外国アーティストのロシア公演・ロシアでの職務のキャンセル、そして【b】ロシアのアーティストの外国公演・外国での職務のキャンセルが生じた。これらはまだ終焉した事態ではなく、仮に二〇二二年冬の客演／演奏旅行までを見据えれば、まだまだ尾を引きそうな事態である。

同様にメディアを賑わせたのは、演奏家たち、アーティストたちが戦争や戦争を起こしたプーチン政権、そしてプーチン大統領個人に対して、どのような態度表明を行うのか、または行わないのか、ということであった。非ロシア人のアーティストの反戦メッセージがあふれたことは言うまでもないが、ロシアのアーティストも様々な形で反戦を訴えた【c】ロシアのアーティストの反戦メッセージ。ただし、ロシア国外を拠点としていたアーティストは反戦を容易に口にすることができたが、ロシア国内にとどまっていたアーティストは、政権からの抑圧が懸念されるために、自由に発言することができず、その発言も抽象的・間接的、あるいは曖昧な言葉遣いで行われることが目立っていた（特に三月四日の虚偽情報に最大一五年の刑を科す法案採択以降）。ここでは戦争を批判したとしても、政権批判と聞こえないような工夫が感じられることも多かった。特に、プーチン政権が「戦争 война」という言葉を避け、「特別作戦 спецоперация」という用語に固執していることも多大な影響を与えている【d】反戦メッセージにおけるプーチン批判の有無、例えば「軍事作戦」か、「戦争」か、というレトリックのちがひ）。

もう一点は、これも進行中の状況で、【e】ロシアの作品の上演・放送中止、あるいは差し替えの動きである。こ

れはいわゆるキャンセル・カルチャーの一部をなしているが、必ずしもそのパフォーマンスにロシア人が関与していないなくても、ロシアの作品がキャンセルされ、別の作品に差し替えられる、という点で、ロシアのアーティストに対するキャンセルとは別の現象として捉えたい。

二.ゲルギエフとキャンセル・カルチャー

開戦直後から音楽界の話題の中心となったのは、サンクト・ペテルブルグの歌劇場、マリインスキー劇場の総監督を務め、同劇場を拠点として、欧米の様々なオーケストラ、歌劇場、音楽祭との協力関係を持ち、また監督を努めてきたヴァレリー・ゲルギエフであった。ソ連時代にはモスクワのボリシヨイ劇場がロシアの中核劇場だったとするならば、ペレストロイカ期以降、その地位に取って代わったのが帝政時代に遡る伝統を持つマリインスキー劇場であり、その原動力となったのがゲルギエフだった。ゲルギエフは様々なイベントでプーチン大統領と同席し、ロシア音楽界の大規模なプロジェクトにおいては明確な協力関係にあったことから、戦争を起こした政権に対する明確な態度表明を求められることになったのである。

踏み絵を求められたゲルギエフ

ゲルギエフがキャンセルされ、または解任されたポストは多岐にわたる。直前に迫っていたウイーン・フィル公演は、ピアニスト、マツエフの出演とともにキャンセルされた。ミラノ・スカラ座の《スピードの女王》公演は指揮者を交代する事態となった。また長期にわたっていたロッテルダム・フィルとの協力関係は、彼の名前を冠したゲルギエフ・フェスティヴァルとともに終了した。同様に、メトロポリタン歌劇場との協力関係も終了し

た。音楽祭では、エディンバラ国際音楽祭、ルツェルン音楽祭、ヴェルビエ音楽祭の音楽監督を解職されるに至っている。

中でも特に象徴的な意義を持ったのは、ミュンヘン・フィルの首席指揮者解任事件であろう。これはミュンヘン市長の指示によるもので、プーチン大統領との明確な決別を求められ、応じなかった結果であり、一種の踏み絵が明瞭に求められていたからである。

開戦直後にミュンヘン市長のライター・ライターは、三月一日を期限として、「プーチンがウクライナに対して行っている野蛮な侵略戦争と、特に我々の姉妹都市であるキエウ（キエフ）に対する戦争と、明確に、誤解の余地のない形で距離を置くように求め」てきた。しかし期限までにゲルギエフは回答しなかったため、市長はゲルギエフとの関係断絶を選択したのである。「私はロシアの支配者に対する彼の肯定的な意見を再考し、変更するよう期待していました。彼はそうしませんでした。しかしながら、現在の状況では、オーケストラや聴衆、市民や市議会に対する明確なサインが、協同作業の継続を可能にするために不可欠です。しかし、それが実現されなかったため、私たちには、彼を解雇する以外の選択肢がなくなりました」²⁾。

ミラノ・スカラ座での《スペードの女王》でも同様の措置が取られた。スカラ座の理事長でもあるミラノ市長のジョゼッペ・サラが態度表明を求め、ゲルギエフが応じなかったため、二月二八日に予定されていた残りの公演のキャンセルが公表されたのである。事例としてはスカラ座のほうが先んじているのだが、単なる客演ではなく、音楽監督という地位の重みに照らして考えるならば、ミュンヘンの解任のほうが重要である。これらには自治体の長が関与しているという共通点がある。加えて、ミュンヘンの場合はキエウと姉妹都市提携を行っていた、という背景もあった。

讃えられるゲルギエフ

政権側からはゲルギエフの姿勢を称える声が上がった。下院議長のヴァチエスラフ・ヴォロージンはインタビューに答えて次のように述べている。「ゲルギエフはウクライナでの軍事作戦を糾弾するか、辞任するように言われました。そこでは中立の立場は受け入れられません。彼は米國務省が言うことに同意しなければならなかったのです。彼はその道を選ばず、彼は解任されました。[…]

彼の行為は、自分の国に対する市民的責任の模範です」³⁾。さらに、「Telegram」上で次のように書いている。「西側ではゲルギエフはよく知られていないようです。強靱な意志と性格の人間なのです。南オセチアで亡くなった人々を追悼するため、ツヒンヴァリの廃墟から立ち上がった人々のためにコンサートを行ったのは、まさに彼でした。パルミラの屋外でも演奏しました。その時彼は「なぜこんなことが私たち全員に必要なのでしょうか」と尋ねられました。彼は「生きるため、私たちが誰であつてどこから来たのかを思い起こすためです。そして人であり続けるためです」と答えました。全く明らかなことは、ヴァレーリイ・ゲルギエフは自分の国を裏切ることができなかったということ⁴⁾です」。

プーチンとゲルギエフの結びつき

ここでゲルギエフとプーチン政権はどんな結びつきがあるのか、確認しておく必要があるだろう。まず重要なのは、ゲルギエフが文化的な街、文化的な国家への強い志向を抱いていた、ということである。一九八八年のムラヴィンスキーの急死を受けて、レニングラード・フィルハーモニー交響楽団の指揮者にユーリー・ティルカーノフが任命されると、空白となったマリィンスキー劇場首席指揮者に就任したのがゲルギエフだった。後に触れるソヒエフ同様に、オセチア人でレニングラード音楽院で名教師ムーシンに師事し、ティルカーノフのもとで歌劇

場での指揮の研鑽を積み、抜擢されたのだった。ソ連邦末期、歌劇場の運営は困難をきたしていた。一九九一年には改革派のサブチャーク（一九三七―二〇〇〇）がレニングラード市長に任命されたが、ゲルギエフは彼に不満をいっていた。「サブチャークは「……」ペテルブルグを世界の文化的な首都の一つにしようとする努力はさほど払ってくれませんでした」。

ゲルギエフは強い指導者、そしてその強い指導者との深い結び付きを欲していた。「私は政府の先頭に立つ強い人がほしい。平和、教育、そして文化が、われわれの自然資源を開拓するのと同じくらい必要だということを理解する人です。我が国の首相が赤でも、緑でも、黄色でもかまいません。彼の政治色など一向に意に介しません。「……」もし彼が市長あるいは首相であれば、私は彼とうまくやってゆかねばなりません」⁵¹。

こうした文化に対するこだわりは、スターリン文化にも、それ以降のソ連にも見いだせるが、帝政時代に遡って、次のように述べている。「認めなければならぬ、イタリアの一座がなければ、世界の一流の帝国の首都としては何か欠けているように思われるということ。絢爛さ、壮麗さ、そして洗練された娯楽には、支柱がないように思われる。あらゆるヨーロッパの首都において、最も豊かな装身具、最高の気品、一言でいえば社会の洗練のすべてはイタリア・オペラにあるのだ「……」。従って、「イタリア・オペラは」我々の音楽的渴望のみならず、我々の国民的自尊心を育むものでもあるのだ」と。

サブチャークがレニングラード大学の教え子の一人、プーチンをサンクト・ペテルブルグ市の第一副首相に任命したのは一九九四年のことで、この頃からゲルギエフとの結びつきが生じている。サブチャークに見いだせなかったような、彼が指導者に期待する要素がプーチンには見いだせたのだろう、二〇〇〇年の大統領就任とともに、ゲルギエフとプーチンとの協力関係を示す出来事が目立つようになる。二〇〇八年のグルジア紛争後には、前述のように、八月二一日に南オセチアのツヒンヴァリで追悼演奏会を行った。演説の中で彼は、「もし偉大なロ

シアの援助がなければ、一層多数の犠牲者が出ていたことをもう一度強調しなければなりません」「私たちは今人々が八月七―八日に起こった事件についての真実を知ることが願っています」と述べて、ロシア軍の介入に謝意を表している。ここではチェチェン独立派が起こした二〇〇四年の北オセチアのベスラン市での学校占拠事件にも言及し、もともと人口の少ない北オセチアでは大きな損失であったことを示唆している。その直後にも彼は慈善演奏会を行っていた。当時の大統領はメドヴェージェフで、プーチンは首相だったが、二〇一二年の選挙でプーチンが大統領に返り咲く。その際、ゲルギエフはネトレプロらとともにプーチンを支援していた。二〇一六年五月五日にはシリアのパルミラ遺跡でもゲルギエフはマリンスキー劇場管弦楽団とともに演奏会を行っている。かつてイスラム国（IS）に占拠されたこの地での演奏会は、「テロリストからの解放」とロシアとシリア両政府の軍事作戦の「成功」を宣伝する機会になった。

この間に、マリンスキー劇場は世界でも有数のオペラ劇場に発展し、二〇〇六年にはコンサート・ホールを新設し、二〇一三年には新館を開館させ、三つの舞台を持つに至った。国立の歌劇場のこうした大規模な事業には政府の協力が欠かされたことは疑いない。新館開館の際にはプーチン大統領も臨席している。二〇一四年のクリミア半島併合の際には、賛同する文書の署名者の中にゲルギエフの名前もあった。ちょうどこの頃始まったのがモスクワの新名所ザリャジエ（ホテル「ロシア」の跡地）のプロジェクトであり、ゲルギエフはプーチン大統領に働きかけて、「首都モスクワにふさわしい」新ホールの建設に動いた。これが実現するのが二〇一八年で、九月八日の開館記念コンサートを担ったのは、モスクワのオーケストラではなく、ライバル都市と言っても良いサンクト・ペテルブルグ市のゲルギエフ指揮のマリンスキー劇場管弦楽団であり、プーチンも臨席して、祝辞を述べている。「この豪華なコンサート・ホールの創設に対して、皆さんに心から感謝を申しあげます。このホールが、我らの地球の指導的な音楽的な首都の一つとしてのモスクワの地位を高めるために、重要な、著しい役割を果たすことを確信しています」「わたしたちは常に、音楽が首都を訪問する人々にとってロシアをより良く

理解するのを助けるのをうれしく思うでしょう」⁷⁾。これらのプーチンの発言に、先のブルガーリンの言葉と呼応するものを見出すのは難しくはないはずだ。

三、キャンセル・カルチャーの拡大

ゲルギエフのミュンヘン・フィルからの解雇は、その後を予測する先駆的事例の一つとなった。すなわち、その直後の三月二日、ウクライナ文化省が主導する形で、ロシアへの文化的制裁の呼びかけが出されている。そのアピールには例えば、以下のような記述があった。

四、ロシア人の国際コンクールへの出場（例：ユーロビジョン禁止）、および以下のような国際展示会、フォーラム、その他の文化イベントへの参加を禁止する。

【c】ザルツブルク音楽祭、アヴィニオン音楽祭、アレナ・ディ・ヴェローナ音楽祭などの音楽祭、演劇祭。

六、ミュンヘン・フィルハーモニー管弦楽団、ミラノ・スカラ座、ロンドン・ロイヤル・オペラハウス、その他多くの劇団が既に例示しているように、ロシアのプーチン大統領と彼の行動を公然と支持するすべてのアーティストやエンターテイナーとの提携を解消する。⁸⁾

その署名者の一人に現代ウクライナを代表する作曲家ヴァレンティン・シリヴェストロフの名前があったことは注目に値する（彼については後述する）。

アンナ・ネトレプコの事例

アンナ・ネトレプコ（一九七一）は、クラスノダール出身のソプラノ歌手で、サンクト・ペテルブルグ音楽院時代からマリインスキー劇場の舞台に出演し、音楽院卒業直後から欧米の著名な歌劇場の舞台にも次々と客演するようになり、ロシアのみならず世界的なオペラの歌姫として知られている。二〇〇八年にはロシア人民芸術家の称号を授与されている他、二〇一二年の大統領選挙においてプーチン候補に協力したことも知られていた。ウクライナ紛争絡みでは二〇一四年二月七日、ドネツク州の劇場に百万ルーブルを寄付したことが物議を醸していた。⁹¹

今回の戦争では、ネトレプコは勃発の二日後にInstagramで戦争反対の意を表明した。

「……」何よりもまず私は戦争に反対しています。私はロシア人で、自分の祖国を愛していますが、私にはウクライナに多くの親類や友人がいて、平和な市民たちが経験している痛みや苦しみに、心が引き裂かれます。私は戦争が終わって、人びとが平和に暮らせるようになることを望んでいます。

しかし、一つのことを付け加えておきたいです。アーティストやあらゆる社会活動家に対して、自分の政治的な見解を公的に言明したり、自分の祖国を糾弾したりするよう強いることには耐えられません。そうしたことは個々人の自由な選択でなければなりません。私の多くの同僚と同様に、私は政治家ではありません。私は音楽家です。そして私の目的は、政治的な不一致を克服して、人びとを結びつけることです。

しかし、プーチン政権に対する態度を明瞭に示さなかったことから、西側の歌劇場の関係を断たれるに至った。二月二七日には、米国ニューヨークのメトロポリタン歌劇場がプーチンと関係のある音楽家、機関との関係中断

を発表し、その一人がネトレプロコだった。また三月一日には、バイエルン歌劇場が彼女との協力関係中止を声明した。三月四日には、メトロポリタン歌劇場がネトレプロコの代役にウクライナ歌手モナスティルスカヤを決定している¹⁰¹。

ネトレプロコが特に目立った存在でなければ、彼女が主張するように、政治的な見解を表明しないことは許されたかもしれない。しかし多くの人が彼女とプーチン政権との深い関係を憶測していた。ノヴォロシア議会（人民共和国連合議会）議長ツァリョーフとともに映る写真は、ウクライナ東部におけるプーチン政権の政策を支持していると受け取られたのである。逆にこの段階でのネトレプロコは、ゲルギエフ同様に西側でのキャリアを断念したとみなされて、むしろロシアでは評価される存在だったと言える。

その後のネトレプロコ——政権批判と舞台への復帰

そうした批判を意識してか、休養を宣言した後、三月三〇日、ネトレプロコは新たな声明をFacebookに発表した。

私は明確にウクライナでの戦争を糾弾し、私の思いは、この戦争の犠牲者とその家族とともにあります。私の立場は明確です。私はどんな政党の党员でもありませんし、私はロシアのどの指導者の支持者でもありません。私は、誤解されるような過去の行動や言明を認め、後悔しています。実際には、私は生涯でプーチン大統領とは数回しか会ったことがありません。特に、私の芸術が承認されて受賞したときと、オリンピックの開会式でのことです。私は決してロシア政府から財政援助を受けたことはありませんし、私はオーストリアに住み、納税しています。私は祖国ロシアを愛していて、芸術を通してただ平和と連帯を求めています。私が告知して休養した後、私は5月末に、まずは

ヨーロッパで演奏を再開する予定です¹¹⁾。

多くの人がこれを歓迎したが、ロシアでは祖国に対する裏切りとも理解され、また遅きに失したとの非難もあった。下院議長のヴァチエスラフ・ヴォロージンはこれに反応し、Telegramで「ある者は金のために、ある者は名誉あるコンサート・ステージを維持しようと列車に乗る。アンナ・ネトレプコのようにだ。さもなければ、裏切りとは呼ばれまい。声はあるが、良心がないのだ」と手厳しく糾弾した¹²⁾。前述の百万ルーブルの寄付を委ねられたツアリョーフはこれまでの立場との矛盾を指摘して、批判した¹³⁾。またノボシビルスク歌劇場も「ヨーロッパに滞在してヨーロッパの舞台に出演できる可能性のほうがロシアの運命のほうが彼女にとっては重要だったのだ」として、六月二日に予定されていた彼女の客演キャンセルの声明を発した¹⁴⁾。

このような祖国での糾弾は、ネトレプコの西側での活動にはむしろプラスに機能したのかもしれない。五月末に予定されていた活動再開(二五日のパリでの演奏会)は、代役という形ではあったが、モンテ・カルロ歌劇場からの招聘により、プッチーニの《マノン・レスコー》のタイトルロール役として四月二二日に早まったのである¹⁵⁾。彼女の公式ホームページには月数回ずつではあるが、スケジュールが記載されており、少なくとも西欧では活動再開が順調に進む見込みであることがわかる¹⁶⁾。詳述は避けるが、メトロポリタン歌劇場との間にはわだかまりが残っており、北米での舞台復帰はまだ先のこともかもしれない。

ソヒエフと二重の踏み絵

ネトレプコの例に見るように、戦争／特別作戦に対する立場を鮮明にせよとの要求は双方から突きつけられるようになる。板挟みになった痛ましい例はポリシヨイ劇場音楽監督だったトゥガン・ソヒエフ(一九七七)に見

いさせる。ソヒエフはゲルギエフと同じくオセチア人であり、同様にサンクト・ペテルブルグ音楽院で学んだイリヤ・ムーシンの弟子であり、マリインスキー劇場で多くの仕事をした点まで共通である。キャピトル・トゥールーズ管弦楽団やドイツ・ベルリン交響楽団といった外国のオーケストラで首席指揮者や音楽監督を務め、二〇一四年にモスクワ・ポリシヨイ劇場の音楽監督に就任した。ペレストロイカ後こそ、マリインスキー劇場の後塵を拝しているとはいえ、ソ連時代には国を最も代表する劇場であり、その音楽監督がロシアでもっとも重要なポストの一つであることに変わりはない。

ソヒエフはトゥールーズで三月二〇日に演奏会を控えており、予定通り行えるのか、行えるのなら一五日までにトゥールーズ市に来てほしいと市長から呼びかけられていた。その際、市長は戦争に対する見解を表明することも求めていた。ソヒエフが抱えた苦悩は計り知れぬものだった。信頼する音楽家たちのどちらか片方を選ぶことはできない……彼が下した決断は市長も含め、多くの人々を驚かせた。キャピトル・トゥールーズ管弦楽団の首席指揮者とポリシヨイ劇場音楽監督の両方の地位を同時に辞任すると発表したのである¹⁷⁾。彼が公表した声明はいくつかの箇所で邦訳されているので、詳細な紹介は避けるが、どちらの国のどちらの楽団とも信頼関係があり、いずれかを選ぶことができない、という苦渋に満ちたものだった。彼は慎重に言葉を選び、音楽家たちに深い敬意を払いつつ、キャンセル文化とその担い手になっている人々を非難している。当然ながら、「ロシア国民なのだからポリシヨイを選ぶべき」「ゲルギエフやネトレプコをリスベクトする」という反応も起こった。

その後、キャンセル文化それ自体を批判するキャンペーンも起こった。「ロシア人とベラルーシ人をその国籍によつて無分別に排除することに強く反対する」署名である¹⁸⁾。多くの著名音楽家が署名を行った。一部を挙げる。サイモン・ラトル、パツパーノ、ウエルザー・メスト、ツインマーマン、コパチンスカヤ、シトコヴェツキー、アレクサンドル・メーリニコフ、クリスチアン・ヤルヴィ、セミヨーン・ビシコフ、ナカリャコフ、ノセダ、ヴィクトリア・ムーロヴァ、クリストフ・エッシェンバッハ、クラウス・ペーター・フロール……。これによつて「無分別な排

除」がなくなるわけではないだろう。しかし、「排除」の理由を示す意識は高まるかもしれず、それにともなって「無分別な排除」が減っていくことを期待したい。

戦時下に響く「戦争交響曲」

ソヒエフがシヨスタコーヴィチに言及しているのは示唆的である。「私たち音楽家には、シヨスタコーヴィチの音楽を通じて、第二次世界大戦が人類にもたらした惨禍を想起させる使命があるのです」（彼の声明で「戦争ボヤ」に言及しているのはこの一箇所のみだ）。こうしたシヨスタコーヴィチへの認識は多くの人に今日共有されていると言えるだろう。

三月一一、一二日の第四九九回定期演奏会に際し、シヨスタコーヴィチの交響曲第八番の演奏を予定していた名古屋フィルハーモニー交響楽団において、後述するようなプログラム差し替えの是非が取りざたされた。公式Twitter（三月七日）は曲目変更しないことを次のように告げている。「ロシアによるウクライナ侵攻が現実起こっている中で、シヨスタコーヴィチの『戦争交響曲』を演奏することになってしまいました。しかしこの曲は、戦勝を記念するための曲でも、戦意を高揚するための曲でもありません」。指揮者の井上道義は演奏後に「この曲が書かれた時と余りにも共通した今のウクライナへのロシアの（その頃は一九四三年のソヴィエトの）戦闘状況が影を落とし「たかが舞台上の出来事」とは言えない仮想現実の現実との濃厚接触だった」、「八番の終わりのコントラバスのピッチカート（ドレドロー）は今、「ダメだ」と聞こえる」と記している¹⁹¹。

四、演奏作品差し替えの事例

この事例のようにロシアの演奏家を出演させてよいのか、という問題とは別に、ロシアの作品を上演・放送しても良いのか、という問題も生じている。戦争とは特に無関係で単にロシアの作品だから除外・中止された、という事例も多数あるが、特に開戦直後に問題になった事例は、チャイコフスキー祝典序曲《一八二二年》や《スラヴ行進曲》だった。いずれも機会音楽として、いくらか控えめに評価されている作品だが、人気曲であり、大衆向けのコンサートを彩る楽曲として演奏頻度は高い。どちらも帝政ロシア国歌を引用した「戦争音楽」であり、ソ連時代には改ざんの対象になったことでも知られている。

《スラヴ行進曲》からヴェルビツキー作品へ——ベルリン放送交響楽団

開戦直後の二月二六・二七日に《スラヴ行進曲》を含むオール・ロシア・プログラムを予定していた指揮者のウラジミール・ユロフスキーとベルリン放送交響楽団は、《スラヴ行進曲》をヴェルビツキー作曲のウクライナ国歌と序曲第一番に差し替えることにした²⁰⁾。実際にはオール・ロシア・プログラムの中の一曲を差し替えたに過ぎなかったのだが、あたかもプログラムがキャンセルされたかのような印象を与えたのも事実である²¹⁾。

指揮者のユロフスキーは音楽家一家の家系で、彼自身はロシア生まれだが、祖父（一九一五―七二）はウクライナ出身でユダヤ系の作曲家だった。「私はロシア連邦によるウクライナへの軍事侵攻開始があり得るとは信じていませんでした。私はこの行為に強く憤慨し、同時に非常に悲しんでいます。私は家族の歴史を通し、両国と深く結びついているからです。私はできるだけ早く平和が戻ることを願っています。私たちは、週末のコンサートのプログラムを変更することで、ウクライナの人びととの連帯のサインを送りたいのです」²²⁾。

ウクライナ出身の音楽家への配慮として——ザグレブ・フィル

クロアチアの首都を本拠地とするザグレブ・フィルハーモニー管弦楽団も二月二五日の演奏会のプログラムを変更した。オール・チャイコフスキー・プログラムのうち、ヴァイオリン協奏曲のみを残し、《イタリア奇想曲》と交響曲第四番をバーバーの《弦楽のためのアダージョ》とベートーヴェンの交響曲第七番に差し替えたのである。《スラヴ行進曲》のような戦闘にかかわる作品がないことから、プログラムの変更が必要だったのか、疑問にも感じられるが、特にウクライナ出身の団員の存在が決定に影響したようである。まずホームページの記述は以下の通りである。「全世界に影響を及ぼし、恐ろしい不安をもたらす、ウクライナにおける新たな状況を受けて、ザグレブ・フィルハーモニック管弦楽団は、ウクライナの人びととの連帯を表明し、本日の演奏会のプログラムを変更しました」。しかしこれだけでは背景はわかりにくい。楽団長ミルコ・ボツホの説明は納得がいくものではないだろうか。「私たちは昨日、気分を害しながらリハーサルを行いました。私たちに、ウクライナ出身の同僚がおり、彼らはとてもショックを受けていました。私たちは皆、気が滅入っていました。それで私たちはコンサートのプログラムを変更したのです。私たちは芸術家であって、音楽以外の手段で戦うことはできません」²³¹。ちなみに指揮者のダヴィド・ルンツはポーランド出身の指揮者である。

《一八二二年》から《フィンランディア》、《トレパック》へ——中部フィル

こうした状況を受けてか、日本のオーケストラにもプログラム変更の動きが波及した。特に注目を集めたのは、中部フィルハーモニー交響楽団の事例である。第二部の終曲に予定されていたチャイコフスキーの祝典序曲《一八二二年》がシベリウスの《フィンランディア》に差し替えられ、チャイコフスキーの《トレパック》が新たに

追加されたのである。加藤隆久理事長はこの変更の意図を以下のように説明している。「政治や経済界、さらにスポーツ界などでもロシア非難、ウクライナ支援が表明されているが、そのような中で、私たち音楽に携わる者に何ができるかと考えたひとつの答えが、今回の曲目変更です。ロシアの戦勝曲である大序曲『一八二二年』にかえてシベリウスの『フィンランディア』を演奏することにしました。しかしながら、音楽そのものやチャイコフスキーに罪はなく、リスペクトの気持ちは変わらないので、くるみ割り人形の『トレパック』を追加曲として演奏します」²⁴⁾。ここでは同じチャイコフスキーの《トレパック》が追加されることで、チャイコフスキーの国籍が問題なのではないことが明示されていることに留意しておきたい。

五、反戦を訴える音楽家たちとその余波

ロシアにとどまった音楽家たちは、自由な発言ができない状態にあるが、国外に本拠地を持っている音楽家たちからは、開戦直後から反戦を訴えるメッセージが発せられている。例えば、ロシア出身の指揮者キリル・ペトレンコ（一九七二）は、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団の音楽監督として、二月二五日に公式ホームページに以下のような声明を出している。

プーチンのウクライナに対する悪賢い攻撃は、国際法に違反するものであり、平和な世界全体の背後に突きつけられた刃です。それは、国境を越えて人びとを結びつける芸術に対する攻撃でもあります。私は、ウクライナの仲間全員と完全に連帯し、すべての芸術家が自由と尊厳、そして侵略に抗するためにともに立ち上がることをただ願っています。²⁵⁾

また同様に、チェコ・フィルハーモニー管弦楽団の音楽監督を務めるセミヨン・ビシコフ（一九五二）は、三月一日、チャリテイ・コンサートに出演し、以下のように演説した。

私は一九六八年の記憶（チエコスロヴァキアの民主化運動がソ連が主導するワルシャワ機構軍によって弾圧された事件）を記念するためにプラハのこの聖なる地にやってきました。今日、五四年経って、歴史は繰り返されています。今度はウクライナです。私はプーチン氏と呼びかけるに値しないウラジーミル・プーチンに言いたいのです。あなたが殺しているウクライナ人の姿を見なさい「……」。あなたはウクライナを破壊するのをやめるべきだ。あなたはロシアを破壊するのをやめるべきだ。歴史に場所を占めようとするあなたの夢はもう達成された。あなたは人類に対する罪において記憶されるだろう²⁶¹。

また国内にとどまっている文化人たちの中にも反戦アピールに署名した人々がいる。二月二六日、ロシアの舞台芸術界を代表する黄金のマスク賞の委員長を務めるマリヤ・レヴァーキナの Facebook に掲載された以下の声明には、ヴァイオリニストのスピヴァコフや、ポリシヨイ劇場総裁のウーリンらも署名している。

「……」私たちの中には、大祖国戦争を戦った人、それを目撃し、参加した人びとの子供や孫がいます。私たちの一人ひとりにあの戦争についての遺伝的な記憶が息づいています。私たちは新たな戦争を欲しませんし、人びとが死んでいくことを望みません。

過ぎ去った二〇世紀は、あまりにも多くの悲しみや苦しみを人類にもたらしました。私たちは、二一世紀が期待と開放、対話の世紀になることを、人と人との会話の世紀になることを、愛と同情と慈悲深さの世紀になることを願っています。

私たちは、このことに関わるすべての人々に、争いのすべての当事者に対し、軍事行動を止め、話し合いのテーブルにつくよう呼びかけます。私たちは、最も尊いもの、すなわち、人の命を守るよう呼びかけます。

ここでは従来プーチン派のように見られてきたウーリンやスピヴァコフが署名していること、そしてまた今日のロシア連邦の国民統合の礎の一つである大祖国戦争について言及されていることも注目に値しよう。

モスクワとサンクト・ペテルブルグ、コンクールと劇場管理

ポリシヨイ劇場総裁のウーリンに対する信頼が薄れたこともあつてか、三月二五日、プーチン大統領は芸術界の表彰者との懇談の席でゲルギエフに対して、新たな提言を行っている²⁷⁾。マリインスキー劇場とポリシヨイ劇場を統括する新しい劇場指導部の設置である。当然その理事長ないし監督にはゲルギエフが想定されたことだろう。西側の求めに応じてプーチンとの関係を断絶しなかったことへの評価、そして西側の多くのポストを失った世界的指揮者に対する、新たな名譽あるポストの提示でもある。ゲルギエフはこの提案に肯定的に応じている。プーチン大統領が引き合いに出したのは、帝政時代に一七八六年から一九一七年まで存在した帝室劇場管理委員会だった。確かに帝政時代、劇場が帝室の独占事業であつたところに設立された劇場管理官にはフセヴォロジスキールら著名な人物が少なくないが、ポリシヨイとマリインスキーとが同じ指揮者によって統合的に指導されるのであれば、それは全く新たな事態と考えなければならぬ。各都市を代表する劇場がそれぞれの個性を持って競い合う状況が失われれば、経営上の効率は高まるかもしれないが、ロシアの音楽文化全体の活力が減退する事態が生じかねないのではないだろうか。

この問題とも緩やかに結びついているのが国際チャイコフスキー・コンクールの行方である。音楽コンクール

への影響も当初から懸念されていた。国際チャイコフスキー・コンクールの第一回の優勝者の名前を関したヴァン・クライバーン・コンクールは三月三日、ロシア人音楽家を排除しないことを声明した²⁸⁾。一方、国際シベリウス・コンクールはロシア人二名の除外を決定した。ただし、コンクールの運営委員会は「戦争の恐怖と残虐行為」について言及しながらも、なぜその責任をロシア人二名が追わなければならないのかについては納得の行く説明を与えていない²⁹⁾。他方で衝撃を与えたのは、四月一九日に公表された国際コンクール連盟による国際チャイコフスキー・コンクールの除名である³⁰⁾。音楽家や機関に対する文化的制裁が広がる中で、コンクールそのものが予定通り開催されるのか、参加者が民族や国籍によって選別されないのか、という懸念は当然としても、コンクールの存在そのものに対する制裁は、意表をついたものだったからである。「ロシアに対する包括的な制裁や国籍を理由にした個人の排除」に反対しつつ、「ロシア政府が資金提供を行い、ロシア政府の宣伝の道具として用いられるコンクール」を支持できない、としたこの決定は、「圧倒的多数」の同意に基づくと述べられていることから、異論が一部にあったことがうかがえる。

ただし、ここ最近の国際チャイコフスキー・コンクールを見守ってきた人々であれば、その背景にあるものを想定することは容易ではなからうか。一九五八年に第一回を迎えたその伝統を一定程度は引き継ぎつつ、様々な新しい試みを取り入れ、言ってみれば拡大路線に向かっており、その中心を担っていたのが二〇一一年の第一四回から組織委員長を務めるゲルギエフだったからである。同コンクールの「地盤沈下」、権威の低下傾向がその背景にあった。長年コンクールの会場だったモスクワ音楽院大ホールの改修にあたって、モスクワだけでなくサンクト・ペテルブルグをも会場にしたあたりから、新たな「伝統」の創設の動きが始まっていたと言えるだろう。審査部門も拡大傾向にある。ピアノ、ヴァイオリンにチェロと声楽を加えた四部門で続いてきたが、第一六回(二〇一九)からは新たに管楽器部門が加えられ、次回(第一七回、二〇二三)からはハープ部門の新設も提案されている。これを声明したのは先程の三月二五日の会合の席でのことであった。

六. シリヴェストロフとリュビーモフ

このようにロシアに対する文化的制裁が広がる一方で、ウクライナ文化への関心はかつてなく高まっている。現代ウクライナの作曲家として現在注目を集めているのが、ヴァレンティン・シリヴェストロフ（一九三七）である。雪どけ期に学生時代を送ったシユニトケ（シニートケ、一九三四―一九八）、デニーソフ（一九二九―一九六）、アルヴォ・ペルト（一九三五）、グバイドゥーリナ（一九三一）らと同世代に当たる。彼らはいずれも、伝統的な教育を受けた後、急速に流入してきた十二音技法やセリエリズムのようなモダンな技法の洗礼を受け、モダニズムの旗手として台頭しながらも、その後技法をそれぞれに見直し、独自の様式に向かった点で概ね共通の道を辿っている。シリヴェストロフはキイウ生まれで、キイウ音楽院でリヤトシンスキーに師事した。戦争勃発時もキイウ在住で、疎開を望まなかったが、娘や孫の将来のため、キイウ脱出を決意、三日間に渡る逃避行の末、ベルリンに落ち着いて、現在も創作活動を続けている。

そのシリヴェストロフの作品を取り上げた演奏会（四月一三日）で話題を呼んだのがピアニスト、アレクセイ・リュビーモフ（一九四四）だった。モスクワ出身で、モスクワ音楽院でネイガウスらに学んだリュビーモフは幅広いレパートリーと多面的な活動で知られ、古楽器演奏や現代音楽の積極的な紹介者として顕著な存在感を持つ音楽家として日本でも知られている。事件が起こったのは、シリヴェストロフとシユーベルトを取り上げた、モスクワの文化センター「ラスヴェート（夜明け）」でのコンサートだった。警官二名が踏み込んできて、演奏中止を通告したのである。ちょうど二時半頃、リュビーモフがシユーベルトを演奏しているさなかのことであった。爆破予告があったことを口実として演奏会を中止し、ホールから出るよう命じたのだが、リュビーモフは意に介さず、最後まで演奏し続け、万雷の拍手を浴びたのだった³¹。爆破予告の真偽は不明だが、警官の闖入はウクライ

ナの作曲家の作品がプログラムに含まれていることが関係しているとみなされ、演奏後の拍手にも特別な意味が与えられることとなった。ヤナ・イヴァニロヴナを独唱に迎えたシリヴェストロフの作品、チュッチェフ、プーシキン、ブローク、マンデリシタム、バラトウインスキーの詩による《ステツプ（シユトーフエン）》の演奏がプログラムの前半だったことを警官たちは知らなかったのだろうか。あるいはあえてシュールベルトの演奏の時間帯に闖入したのだろうか。僅かな言葉と身振り、ジェスチャーを手がかりとして、演奏家たちと聴衆とは独自のコミュニケーションを図り、それがいわば反戦の集会の役割すら果たしたのではなかったか。私にはそれはあたかも、一九三七年一月、シヨスタコーヴィチの交響曲第五番の初演時、人々が次々に立ち上がり、「長く続く拍手」を送って作曲者をたたえた、そのときのような自然発生的な示威行動のように思われてしまう。

七. ウクライナの音楽家とロシア語

そのシリヴェストロフは疎開先のベルリンでNHKの取材を受け、インタヴューに答え、自作を演奏さえしている（NHK Eテレ《クラシック音楽館 今こそ平和の響きを〜ウクライナ侵攻 芸術家たちの闘い〜》五月一日放送）。疎開の途上での思いを表現した作品や、日本のために新たに描き下ろした作品もある。彼はロシア語でインタヴューに答えているが、それはこのときに限ったことではなかった。ドイツのメディア、ドイチェ・ヴェレのロシア語版のインタヴューもロシア語で応じている（三月一六日掲載）。記者が次のように話を振る。「今私たちは、私とあなたの母語であるロシア語で話しています。しかも、あなたはキイウ生まれで、私はモスクワ生まれです。というのも、戦争を公的に正当化する要因の一つは、ロシア語の擁護でしたので……」。記者を遮って彼は次のように答えている。

それは恥知らずの嘘です。帝国が瓦解するとき、それは言語を残していきます。ローマ帝国はラテン語を残しました。イギリス帝国は英語を残しました。ロシア語は、ポスト・ソヴィエト空間におけるラテン語なのです。しかし帝国の言語は、民族の言語であるだけでなく、文化のもとになった言語でもありません。ロシア語でカザフ人も、ユダヤ人も、ウクライナ人も書きました。例えば、シエフチェンコの『ゴブザール』にはロシア語で書かれた『盲人』があります。世界的に名声を得た偉大なロシア文化があります。それは絵画であり、音楽であり、文学であります。しかしそれらの人々の運命を見てみると、帝政においても、ソ連においても、彼らは常に迫害を受けてきたのです。³²¹

今回の戦争はウクライナ人のウクライナ化を促進させていると理解されている。その中にはロシア語話者のウクライナ語への移行も含まれている(例えば、五月一四日放送のNHKの《ウクライナ語で叫びたい》はこの問題に関する興味深いドキュメンタリーである)。ゼレンスキー大統領自身、ロシア語が母語であって、ウクライナ語をあとから学んでいる事実がある。こうした観点から興味深いのは、現在は活動休止中である、オデーサ生まれのソプラノ歌手グレギーナのメッセージである。四月二四日、Facebookに以下の投稿を行って、モスクワでの二六日のコンサート中止を報告した。「私はとても苦しく、心を痛めており、たとえこれまで私が全身全霊で仕えてきた、私が最も愛する身近な聴衆のためであったとしても、私の故郷、ウクライナで戦争が行われている間は歌うことはできません。昨日は私のオデーサが爆撃されました。声とは人間の魂であり、魂は傷んでおり、このように心に痛みと傷を負っては歌うことはできないのです」³³¹

一層興味深いのは、三月一三日の彼女の投稿である。そこでは全くロシアの血が流れていない自分がロシア語を母語とし、そのロシア語が様々な人々を結びつけていたことを述べている。これはシリヴェストロフの主張に極めて近く、特に彼女の出身地であるオデーサの言語環境について考える上でも有意義と思われる。長文になるが、その引用をもって本稿を閉じることとしたい。

私は父がアルメニア人、母がウクライナ人で、先祖にはユダヤ人、ベラルーシ人、ポーランド人がいます。ロシアの血は入っていませんが、母語はロシア語です。アルメニア人の父はアルメニア語、ジョージア語、ギリシャ語と、強い訛りでロシア語を話します。ママは、アルメニア語やギリシャ語、ジョージア語を話しません。ウクライナ語とロシア語を話し、イディッシュ語を知っていて、ドイツ語はよく知っています。祖母はロシア語で話しますが、成句や諺はウクライナ語です。父方の祖母は本当にわずかにしか、ロシア語を話せませんが、特に重要な局面では私に伝わるように、話すよう努めています。私は幼い頃ロシア語とウクライナ語、それから少しアルメニア語とジョージア語（とても下手ですが、でもわかりました）を話していて、私の友人たちにはギリシャ人、ユダヤ人、アルメニア人、ジョージア人、ウクライナ人がいましたが、私達全員を結びつけていたのはロシア語でした！ 今私達を政治が分断させているとはいかないまでも、分断させようとしていることは恐ろしいことです。私はベラルーシに住んでいた際、その言葉を学ぼうと努めました（私が読み書きしていたウクライナ語のあとで、純粋に訛なしにベラルーシ語を話すのは困難です。言葉がしばしば置き換わってしまうからです）。いずれにせよ、私達は互いに理解し合おうとしました。ウクライナ語を今も私は忘れていません。憂鬱なときは民謡を歌います。ニューヨークにウクライナ人の友人がいますし、三〇年前当時は、私には英語よりもウクライナ語のほうが話すのが楽だったので！

私はロシア文学やウクライナ文学、そしてアルメニアについての本で育ちました。家では、ウクライナ語やアルメニア語、ロシア語の歌が響いていました。ママは他にイディッシュ語も話しました。三つの国家語があるリユクサンブルーに住んでいる人たちは、皆が互いに理解しようとし、もし難しければ、英語やイタリア語、ポルトガル語を話します。災いは言葉にあるものではありません！ 災いは政治家たちにあります。言語とは、地球上の私たち皆を結びつけるものです！ 言葉はあちこちにありますが、人の目を見て理解することができません。戦争とは大統領たちの、政治の専門家としての敗北です。私達が言っていたように、「言葉はキエフまで通じる」のです！ いつでも話し合

えまずし、話し合わなければなりません！ 死んだ兵士たちがカーゴ二〇〇〔死んだ兵士の遺体を指す軍隊用語。バラバーノフ監督に同名作品あり〕と呼ばれるとき、息が止まるような痛みを覚えます！ 政治家にとってはカーゴ二〇〇であっても、一人ひとりの母親にとっては血を分けた子供なのです！ 母親のこの世のすべてなのです！ もし政治家たちが自分たちの息子を戦場の最前線に送らなければならなくなったなら、彼らは戦争を起こすべきなのかを一〇〇回は考えるでしょう。私は母としてひたすら平和のために祈ります。歌手としては、自分の家を失った人々の手助けになるように歌うのが義務だと考えます。しかし大事なのは、人々への信頼、平和な生活への期待、そして身近な人々への愛を失わないことです！

彼らが述べるように、音楽が、そしてロシア語が、新たな鉄のカーテンのごとく人々を分断するのではなく、結びつけるものであり続けることを願ってやまない。

- 1 なお、本稿は三月六日にオンラインで実施されたSRC緊急セミナー「ウクライナ情勢…文化面での反応」における筆者の発言をもとにし、その後になじたいいくつかの事件を加えて執筆されている。緊急セミナーを組織した北海道大学スラブ・ユーラシア研究センターの安達大輔准教授を始めとした関係者に改めて感謝したい。
- 2 PRESS RELEASE 1ST MARCH 2022. Mutschner Philharmoniker, <https://www.mphil.de/en/pressmaterial/translate-to-english-pp-1-maerz-2022>
- 3 広報部長「Д: отказ Валерия Гергиева осудить военную операцию на Украине — пример гражданской ответственности, <http://dipma.gov.ru/news/53595/>
- 4 Telegram: [vv_volodin](http://t.me/vv_volodin/333), «Определитель до понедельника», https://t.me/vv_volodin/333
- 5 アードマン『ゲルギエフとサンクトペテルブルグの奇蹟』亀山郁夫訳、音楽之友社、二〇〇六年、三六四—三六五頁。
- 6 Валерий Гергиев и оркестр Мариинки триумфально выступили в Пальмире – РИА Новости, 26.05.2021, <https://ria.ru/20160505/1427237594.html>
- 7 Открытие концертного зала «Зарядье», Президент России, <http://kremlin.ru/events/president/news/58494>
- 8 「ロシアへの文化的制裁を呼びかけ。ウクライナ国内外の有志が請願書を公開」、『美術手帖』 <https://bijutsutecho.com/magazine/news/headline/25278>
- 9 「A・ネーベック 親露派勢力介介し露付」『SankeiBiz (サンケイビズ)』 <https://www.sankeibiz.jp/express/news/141210/ekt14121012250002-n1.htm>
- 10 Anna Netrebko withdraws from Met performances this spring, https://www.metopera.org/about/press-releases/anna-netrebko-withdraws-from-met-performances-this-spring/?utm_source=NetrebkoAnnounce&utm_medium=social&utm_campaign=21122_ss
- 11 [https://www.facebook.com/annanetrebko/posts/pfbid09zRvqo6M4eFХoхG6bNt2CSNqRj3QyYjKc8yUzU7GwR59tS3g5u19RTpRe8ANaCY?__cft__\[0\]=AZV5ZEW5Ud4MmkQ3azb5y7XFEGTcZQV_u9o155inSCeXa6iFNECh8jPW4u8NubPzEиKz3BuyTVUEj8jO8oKx6x4eDKn54D4e9aю1FvhtMsJMwTХeWx7cBjft8](https://www.facebook.com/annanetrebko/posts/pfbid09zRvqo6M4eFХoхG6bNt2CSNqRj3QyYjKc8yUzU7GwR59tS3g5u19RTpRe8ANaCY?__cft__[0]=AZV5ZEW5Ud4MmkQ3azb5y7XFEGTcZQV_u9o155inSCeXa6iFNECh8jPW4u8NubPzEиKz3BuyTVUEj8jO8oKx6x4eDKn54D4e9aю1FvhtMsJMwTХeWx7cBjft8)
- 12 Telegram: [vv_volodin](http://t.me/vv_volodin/380), «Голос есть, а совести нет», https://t.me/vv_volodin/380
- 13 Царёв набросился на певцу Нетребко из-за позиции по спецоперации, <https://ukraina.ru/>

- news/20220331/1033659343.html
- 14 НОВАТ отменяет выступление Анны Нетребко, https://novat.nsk.ru/news/events/novat_otmenyaet_vystuplenie_anna_netrebko/
- 15 Anna Netrebko, Shunned In Much of the West, to Sing in Monte Carlo - The New York Times, <https://www.nytimes.com/2022/04/14/arts/music/anna-netrebko-monte-carlo.html>
- 16 Schedule, Anna Netrebko, <https://annanetrebko.com/schedule/>
- 17 3/6, Туран Сохиев сделал заявление в связи с ситуацией в мире, <https://www.classicalmusicnews.ru/news/tugan-sokhiev-statement/>
- 18 Stop the war against Ukraine and stop the blanket boycott against Russian and Belarusian artists, <https://www.change.org/p/open-letter-5b919998-83bc-4745-948c-36c70c28394f>
- 19 「レヴィル 第四九回定期演奏会（井上道義 シニョスタトーヴァイナ #8）」指揮者 井上道義 オフショールイベント https://www.michiyoshi-inoue.com/2022/03/_499_8_1.html
- 20 Rundfunk-Sinfonieorchester Berlin, Vladimir Jurowski mit Alban Gerhardt, <https://www.konzerthaus.de/en/programm/rundfunk-sinfonieorchester-berlin-vladimir-jurowski/7466>
- 21 ロシア記事「シニョスタトーヴァイナ」に賛意。Rundfunk-Sinfonieorchester Berlin Cancels All-Russian Program in Support of Ukraine, <https://theviolinchannel.com/rundfunk-sinfonieorchester-berlin-cancels-all-russian-program-in-support-of-ukraine/>
- 22 Norman Lebrecht, This maestro is trapped between Russia and Ukraine, Slipped Disc, <https://slippedisc.com/2022/02/his-maestro-is-trapped-between-russia-and-ukraine/>
- 23 Zagreb orchestra cuts Tchaikovsky pieces over Ukraine, Macau Business, <https://www.macaubusiness.com/zagreb-orchestra-cuts-tchaikovsky-pieces-over-ukraine/>
- 24 「ロシアの戦勝曲」曲目を変更 中部レヴィルの演奏会 朝田新聞「シニョスタトーヴァイナ」 <https://www.asahi.com/articles/ASQ335CLXQ3301PE00N.html>
- 25 Statement by the Berliner Philharmoniker and their chief conductor Kirill Petrenko on the Russian invasion of Ukraine, <https://www.berliner-philharmoniker.de/en/news/detail/statement-on-russian-invasion-of-ukraine/>
- 26 Semyon Bychkov, Ukraine benefit concert in Prague, <https://www.semyonbychkov.com/news/ukraine-benefit-concert-in-prague/>

ロシア音楽に罪はあるか？

山本明尚

ふと、初めてロシアを訪れたときのことか思い出される。二〇二五年の夏、私は大学院の修士一年生で、年末から修士論文執筆用の資料収集、語学、ロシア音楽史の実地学習を兼ねて、モスクワ音楽院への短期留学をする予定だった。その下見にと、当時集中的にロシア語を習っていた音楽学の師匠と、その先生の兄弟弟子で同じく音楽院への留学を控えていた友人のピアニストと一緒に、モスクワへと赴いたのである。今でも忘れることはできない。初めてモスクワに着陸した飛行機のことを（私にとっては初めての海外旅行でもあった）。シエレメーチエヴォ空港からのアエロエクスプレスで食べたアイスクリームのことを。パヴェレツカヤ駅のホームから望んだ、駅舎の巨大な「МОСКВА」の文字のことを。ホテルの近くの小さな食料品店で買ったキエフ風カツレツのことを。滞在時期がちょうどチャイコフスキー・コンクールの真つ最中で（むしろそのあたりをめぐって訪露した部分もあった）、モスクワ音楽院の周りはとりわけ祝祭感にあふれていた。コンクールで聴いた素晴らしいピアニストたちのことを（特に二次審査のルカ・デュバルグが弾いたラヴェルの《夜のガスパール》は身震いするほど素晴らしかった）。初めてのモスクワに戸惑いつついろいろな場所をめぐりながら眺めた美しい景色の数々……。それからというもの、モスクワという街に住まいながら音楽史を学びたいという気持ちは強まるばかりだった。それがようやく叶ったのは、それから四年が経った二〇一九年のこと。それから今まで、私は音楽学者としてモスク

ワの国立芸術学研究所に留学し、コロナ禍での一年間の中断はありつつも、二〇二二―二三年度にロシアで博士候補論文を提出する予定である——思えば本当に大変な時期に留学してしまったものだ。

ロシアに現在暮らし、その音楽・文化を愛し研究するものとして、つまりロシアの何かしらが自分という一人の人間の一部をなしているものとして、現状の悲惨さをまっすぐに受け止めることはとてもできない。本稿執筆時点で事の発端から二カ月も経つというのに、恥ずかしながら気持ちの整理がまだついていないほどだ。日本のニュースもロシアのニュースも、しばらくはチェックしていたのだが、今では自分にとつての（そして皆様方にとつての）「ロシア」や「ロシアの〇〇」が実情から切り離されていき、ろくでもないイメージがどんどん世の中で幅を利かせていくのが悲しくて、あまり見聞きすることができていない。ロシア人が今回のことについて内輪で話す場に立ち会ったこともあり、それぞれの意見に絶望を覚えたり安心したりする。しかし、いざ自分の意見を伝える段になると「どうやって接していいかわからない」と述べるほかない。それが言い逃れなどではなく、本心なのだから。

世界の音楽界でも、あれから実に感情を揺さぶられる様々な出来事が相次いだ。ゲルギエフやソヒエフやネットレプコなどの演奏会関係の人事についてはもはやここで語るまでもないと思う。ここでは、私自身が経験した具体的なもの、ロシアの芸術音楽関係のことに関係して、ロシア音楽の現状について語ることができたらと思う。思えばあれからいろいろな音楽体験をして、そのたび色々と考えさせられた。例えば——三月のある演奏会の曲目が、ナチス政権と折り合いをつけながら活動したりヒャルト・シュトラウス（一八六四―一九四九）によつて第二次世界大戦末期に書かれ、戦争による破壊を明らかに示唆している《メタモルフォーゼン》（一九四五）と、やはりどうしても死を連想させながら終結するチャイコフスキー（一八四〇―一八九三）の交響曲第六番（一八九三）だった。後者の第四楽章の最後の一音が弱まり消えてから、指揮者は一分近く腕を下ろさなかつたように感じた。しばらくすると会場はスタンディングオベーション、拍手喝采に包まれた。あのとき、帰り道に抱いたあの感情は

何だったのだろうか。オペラやバレエの舞台上では、すべてが日常のあれこれから隔離された別世界が動いている。モスクワにいたのでニュースなどで間接的にしか見聞きできないことだが、日本国内の演奏会ではかねてから予定されていたチャイコフスキーの序曲《一八二二年》や、ラフマニノフの小品集の演奏がキャンセルされたという。特に前者に関しては頭の半分では仕方ないことかとも思いはしたが、やがてやり場のない憤りのようなものがどんどん倍加していったのはなぜなのだろう。

このような音楽に関わる個人的な体験を背景として改めて、「音楽を排除すべきではない」ということを訴えた。この主張は月並みに言えば「音楽に罪はない」とまとめられるようなものだろうが、そう一筋縄で行く問題ではない。正直を言うと、必ずしも「音楽に罪はない」とも言えないからである。なお、音楽の営みにはありとあらゆるアクターが関係しており、その全てに目をやりながら話を進めると一本の学位論文が書けるほど複雑長大になってしまうため、この場ではあえて音楽家、楽壇の話を排除して、演奏会で演奏される音楽作品に焦点を絞って話を進めたいと思う。

音楽は、歴史的事象や文化的な文脈と豊かな関係を育み、ゆえにある音楽作品が特定の歴史・文化・場所と結びついて、人間の精神状態・情動・記憶を喚起したり連想させたりすることは避けがたい芸術分野である。これが、人々が音楽に罪があるとは言わないまでも、ある音楽作品の演奏を避ける理由になりがちである。じつさい、《一八二二年》のキャンセルのニュースのときに私が頭の半分で感じた「仕方ないかも」という考えは、おそらくここからきている。よく知られているように、また題名からもある程度伺えるように、この序曲はロシア帝国がナポレオンの軍勢に果敢に立ち向かい勝利した、という筋書きに沿って書かれているからである。実際この筋に沿って作品の中では様々な楽曲が引用されている。聖歌《主よ、汝の民を救い給え》にはじまり、《ラ・マルセイエーズ》とロシア民謡へと続き、最終的に《ラ・マルセイエーズ》を切り裂くかのように高らかに帝政ロシア国歌が演奏される——このようなプロットが、今現在の情勢における「ロシアの勝利」へと結び付けられてしまうの

はある意味自然なこと、よく理解できる。

二つ目の理由は、ロシアの音楽家・作曲家たちの創作にみられる戦略と深く関係していると思われる。一九世紀の中盤以降、ロシアの芸術音楽はその担い手を「お雇い外国人」からロシア人へと徐々に転じながら急速に発達し、西欧音楽史の「周縁」から中心へと立場を高めようとしていた。その際に様々な場で利用されたのは、西欧諸国と比較してロシアの独自性を謳い上げた種々のイデーであった。音楽においては、フォークロアへの関心が高まるに連れ、独特の拍節・旋律構造をもつ民謡(特に「延べ歌」とくくられたジャンル)が「ロシア性」を發揮するものとして特に好まれた。一九世紀のロシア音楽で種々の民謡の旋律がそのまま引用されている例は枚挙にいとまがない。さらに言うならば、民謡が用いられていない音楽であっても彼らの多くは意識的に／無意識的に自身とその仲間たちが作る音楽を何らかの基準をもつてして「ロシア性をもつ／ゆえにすぐれた」音楽であると宣伝してきた。このようにして強調され続けたロシア音楽のナショナルイティは、それがどのような意味を持つのかを検討する余地もなく、今日に至るまで人々の心に深く印象付けられることになったと言えるだろう。このように形成された、ロシア音楽と国家ロシアとの緊密な結びつきという印象は、紛れもなく現在の種々のロシア音楽「キャンセル」に影響を与えていると思われる。ロシアという国家がそのうちに喧伝されている(と理解されてきた)音楽を大つぴらに演奏することはけしからん、というわけだ。

これまで述べてきたようなことから、あるいはやはり「音楽には罪がある」と思われるかもしれない。でも、これらの二つの「罪」の理由がそのまま、ロシア音楽を排除する根拠にはならないと私は考えている。第一に、今日の情勢に関する悲しさに結びつく情動を喚起したり風景を想起させたりする音楽に関しては、それらが喚起・想起されたからといってその音楽が邪悪なものではないと思う。我々が悲しい音楽や凄惨な絵画やバッドエンドに終わるスリラー映画を見聴きしても、それらを邪悪だと感じないのと同じである。音楽はなぜかしばしば「癒し」と結びつけて語られることが多いが、音楽に限らず芸術は必ずしも癒しの手段ではない。ロシア音楽に限らず、

現実・現状の不都合さや凄惨さに真正面から対峙している作品は少なくない。それらは我々の精神や思考に対して、他の何物にも代えがたい形式でアプローチしてくれる刺激や学びとなるのではあるまいか。また、音楽は様々な解釈を許す芸術だということも忘れてはならない。かつてファシズムへの勝利を高らかに歌い上げるものだと作曲家自身が語り、その点においてソ連国内で称揚されたシヨスタコーヴィチの交響曲第七番（一九四二）を聴いて、今日の我々はソ連政権に向けての万歳三唱をもはや聴き取ることはできないだろう。

第二に、音楽の中に見られるロシア性を現代のロシアと同一視するのは素朴にすぎるのではないだろうかと思われる。一五〇年余に渡って形成され続けてきた「ロシア性」神話は、近年の優れた研究によってその人工性、場当たりぶりが露呈し、徐々に解体されつつある。そのような学問上の進展を目にしている我々も、ロシアにおけるロシア性、その中にある「ナシヨナリズム」の何たるかを含めた理解をできる限り深めていく必要があると思う。長年培われてきたゆえに強固なロシア音楽と国家ロシアの結びつきを薄めることはほとんど無理な話だろうが、文化史・音楽史・思想史に照らしてその相関を反省し、そこに新しい意味を与えることが、そしてその新しい意味が、歴史と社会の写し鏡となり、音楽界にとつてロシア音楽を欠かざるものにしてくれると思っている。

どうしようもない暴力の時代にあつて、人間の文化的営みはあまりにももろく、様々な場でそれまでに培われてきた文化が崩れ去つてしまいつつある。ここでは詳しく語らないが、日本におけるロシア音楽の受容や日露音楽家の交流には、他の西洋諸国と我が国の関係にも勝るとも劣らない、明治維新以来の深く長い歴史がある。それを愚かな政治的営みによって無に帰してしまうのはあまりにも惜しい。ロシア音楽愛好家の拘泥だと嗤われるだろうかもしれないが、それでも構わない。私がこの国の音楽と文化を愛しているということ、それは飾り気のない、本心なのだ。ちっぽけな一人の人間として、世界と人々の精神に平和が、そして「罪」について語ることなくロシア音楽を語れる時代が一刻も早く訪れることを心より望んでいる。

沈黙に耳を傾ける

守山真利恵

「危険な状態になってきましたので、至急帰国手配をします。四日後にはそちらを出発してください」

二〇二一年九月に文化庁から派遣され、サンクトペテルブルクの劇場でプロダクションマネージャーとして二年間の予定だった研修を始めてからわずか半年後の二〇二二年三月七日、派遣元から電話がかかってきた。コロナの影響による一年の延期を経て、念願かなってやっとの渡航だったこともあり、わかつてはいたものの、やはりとてつもない落胆だった。先方曰く「前例のない」ことなので今後、残りの研修に対してどのような補償が行われるのか、再開できるのか等いまだに不透明な中、目下日本で平和な生活を享受している状態だ。帰国から約二ヶ月半が経った今でも、あの不気味な緊張感というか絶望感が張り詰めた街の様子が頻繁に思い出され、まだどのような心持ちで日本の平和な生活に、仕事に戻ればいいのか全くわからないままこの文章を書いている。

侵攻開始以降、多くの友人たちから「ペテルブルクは危なくないのか？」と連絡をもらっていたが、そもそもロシアは侵略をおこなっている側だったので戦火が及ぶ危険はまず無かった。経済制裁の影響により外資系企業は続々と撤退していたが、日用品の不足などは起こっておらず、日常生活の混乱にも至っていなかった。しかし、平常運転に見えた街の中で私が恐怖を覚えたのは、声を発することに伴う危険だ。特に侵攻開始からの数日は大き

な反戦運動が各地で相次ぎ、多くの人が拘束された。のみならず、SNSでの個人の発言なども検閲対象になり、三月四日には「フェイク禁止法」という新たな法律が成立、今回のウクライナ侵攻を「戦争」と表すことを禁止され、違反者には罰金や禁錮が課されるようになった。

声を上げることへの制限は舞台芸術の分野においても課された。かねてより政府による検閲がしばしば行われていたロシアだが、文化芸術予算自体は日本とは比べものにならないほど潤沢で、多くのロシアの劇場は規模を問わず国公立予算で運営している。しかしそれ故に、体制に反する態度を取れば運営予算の削減・取り消しや活動停止、解雇に直結しかねず、この状況下では一層締め付けは厳しくなっている。我々には全く想像のつかない緊張感の最中で、現に危険を顧みずに様々な形で反戦を訴え、活動停止に追い込まれた文化人も数多くいる。もちろん彼らの勇気と覚悟を心から尊敬するが、それと同時に生活や家族、組織を人質にされて声を上げることができない人々の重圧のことも想像したい。

二月二四日以降、いつこの地を離れることになるか分からないため、なるべく劇場に行き、作り手たちの様子も、客席の様子も目に焼き付けておこうと思ったのだが、劇場に行けば行くほど「黙って戦う」ことを選ばざるを得ない人の多さに文字通り胸が押しつぶされた。私は日本でも舞台監督などの劇場スタッフとして働いており、舞台作品を創り、上演することに従事しているわけだが、今までこの仕事（意思を持って表現をすることや、発信をすること）がこんなに重いものだと思ったことはなかった。彼らの背負うもの全てが、なんの障害も恐れもなくぬくぬくと日本で演劇に携わってきた私にとってあまりにも未知のものであり、（不適切な言い方かもしれないが）大きすぎる学びであった。

私がロシアを出たのは三月一日で、今や三ヶ月を迎えようとしているこの戦争が始まってからまだ二週間時点のことだった。情報遮断や言論統制もあり、いま現在ロシアの演劇界・文化界でどのような動きが起こっているのか、私が何か述べることはできない。だが、ペテルブルクを出るまでの間に劇場で当時目にしたことを、いく

つかの観劇を思い返しながらしお伝えできればと思う。また、ロシア国内での厳しい検閲や統制を鑑みたときに、具体的な作品名や組織名を出すことが、今もまだ現地で活動している当地人たちの危険につながる恐れがあるため、必要に応じて固有名詞は伏せて記す。

私が滞在していた時点では、時勢を受けての上演作品の変更や作品アレンジを行っていた劇場はまだ少なかったが、無反応ということではなく、自国の行いに対してのささやかな、慎重な抗議の意思表示を劇場内で目にすることはあった。例えば、侵略が始まった翌日の二月二五日に観劇した作品では、一羽のオウムが自由な生活を求めて飼い主に抗議する、というシーンでオウム役の俳優がポケットから取り出して振りかざした二枚のハンカチが青と黄色の組み合わせだった。侵略前の上演を知らないのも偶然なのかもしれないが、観客たちは必然的に今起こっていることを思い出しざわめいていた(後ろに座っていた女性二人からは「あんなことして大丈夫なの?」という囁きも聞こえた)。また、別日に行った小さな劇場のロビーにはひっそりと黄色と青の特設照明が設けられていた。それに気づいた来場者が照明に対して示す控えめな(むしろ目を逸らすような)反応を見たとき、自由な意思表示がすでに奪われ始めていることを悟った。

現在では状況はさらに悪化し、反戦を訴えた人やロシアを離れた人が関わる作品はレパートリーから外されたり、変更を余儀なくされたりしており、都合の悪い声をかき消す動きは残念ながら確実に加速している。体制を支持する劇場は堂々とZの横断幕を掲げている中、今あげたような小さなプロテストですらいつ政府に目をつけられてもおかしくない状況だ。余談だが、ロビーに特設照明を出していた劇場の所属俳優は私が観劇した数日後にペテルブルクの最大のデモ拠点、ゴスチーヌイ・ドゥヴォール反戦デモで拘束された(現在は釈放されている)。

【図版1】



図版1：劇場ロビーの特設照明

別の日には、私の知り合いの俳優がスターリン役で出演する舞台があった。この作品はスターリンの若年期を描いた作品で、何が彼を青年ジュガシヴィリから世間にイメーじされる独裁者スターリンに変えてしまったのかを史実をベースに戯曲化したものだ。現大統領の暴挙により文化人が次々と拘束され、さながら大粛清を想起させつつあったあのタイミングで上演されるにはあまりにも皮肉な作品である。先にも述べたように、時勢を受けての演目変更はまだほとんどなかった時期なので、この日の上演は数ヶ月前から決まっていたものであり、この状況に応じて劇場側がスケジュールしたものではない。彼が演じた老齡期のスターリンは、青年の未来を予言するように幻影として僅かな時間立ち現れるのみで、言葉数も決して多くはない役だが、それでも本人を細部まで再現したメイクや衣装、佇まいで登場した彼の姿に客席は大きくざわつき、中には席を立った観客もいた。平素であれば人気作品でこの劇場の代表作の一つでもあった作品だが、あまりに直球なタイトル(『スターリンの誕生』)もあってか客席は六割程度しか埋まっていなかった。ロシアに君臨し続けている現指導者が、今後、世界の負の歴史の教科書にその名を連ねることが現実味を帯びてきている今、独裁者のシンボルとして舞台に出ていかなければならなかった彼は、ウクライナ出身と言うバックグラウンドを持ちながら今もロシアに残り、スターリン役を背負って日々舞台に立っている。

その俳優は開演前に、とても苦しそうに笑いながら「僕はこんな時にスターリンを演じなきゃいけないんだよ」



図版 2: アレクサンドリンスキー劇場『スターリンの誕生』本番前のピョートル・シマーク（スターリン役）の様子（アレクサンドリンスキー劇場公式テレグラム（3月28日配信）より）

と呟いた。【図版2】

もう一作品、沈黙に耐えることの悔しさを目の当たりにした作品があった。タイトルは伏せるが、戦争中の架空の中東二国（それぞれのバックには米露がついている）が核使用を辞さない一触即発の緊張状態まで追い込まれ、仲介組織立ち合いのものと最終和平交渉に臨む、と言う内容の作品だ。この上演も皮肉なことながら侵略開始の二日後、二月二十六日であった。誰も犠牲を望んでいないわけではなく、守りたいものを守ろうとし、相手の言葉を少しづつ取りこぼし続けた結果、取り返しのつかないところまで肥大化してしまった憎しみの連鎖の様子は、否が応でも目下繰り広げられている惨状を想起させた。もう言葉では通じ合えないかもしれないと言う絶望の中、平和と対話を掲げる仲介組織の理事長を演じた俳優が、肩を震わせながら最後の暗転に飲まれていく姿は、彼らが対峙している「沈黙」という現実を象徴していた様でありにも残酷だった。内容的にもあのタイミングで見るとは相当辛いものがあつたが、最も辛かったのは表現者でありながら心にある葛藤を無防備に発せない作り手たちの姿である。デモの影響もあり、たつた半分しか埋まっていなかった客席から延々と送られた力強い拍手は、その辛さに共鳴しているようだった。何回繰り返したかわからないカーテンコールの間、俳優らは溢れ出そうになる叫びを抑えるように終始唇を噛み締め、涙を流していた。

作り手たちへの見えない負担とともに、制裁や国同士の関係悪化により、劇場の業務自体にも具体的な影響が

出た。ルーブル暴落による予算の見直し、海外公演や招聘の全面キャンセル、機材や資材の調達ストップ等、そのダメージは計り知れず、今後彼らが一体どんな苦境の中で創作活動が続けていかなければならないか、その苦難の道は想像を絶する。自身の生活すら先が見えない中、それでも劇場が劇場であるために、人が集まれる場所であるために涙を堪えながら電卓を叩き、真っ白な顔で今年度以降の経営方針について会議を重ね、拳を震わせながら稽古に臨む同僚たちの姿は、文化従事者たちが守り抜くべきものがいかに大きいかを平和ボケした私に叩きつけた。

「政治と文化は別物」という言葉が侵略開始以降多く見られているが、私個人としては表裏一体であると思っている。その文化自体が形成される過程に政治、経済などによって形作られたそれぞれの生活や思いが土台としてあるからだ。何かを感じ、考えながら生きることと切っても切り離せない関係にあるからこそ、文化芸術はときにプロパガンダとして攻撃の為に用いられ、ときに政治や言葉では解決できない壁を易々と超えていく。文化芸術大国ロシアに育った人は、私たちよりよっぽどその威力を知っているだろう。しかしそんな彼らですら、生きるために口をつぐむという選択をせざるを得ない恐怖が、今のロシアにはたしかにある。これは部外者が「文化と政治は別物」という乱暴な二元論で語ってはいけないものである。せめてその沈黙に歩み寄ろうとする想像力を持つてほしい。彼らの勇気と苦痛を少しでも汲み、再生への困難を共に歩んでいく、という連帯感を少しでも持つてほしい。

また、今回の件で特に公費を使ったロシア関連の文化事業は少なくとも来年度くらいまでは中断が決定しているだろう。日本だけではなく、世界中でいわゆるキャンセルカルチャーやそれにつながりかねない動きが相次いでいる。上述したように政治と文化（とそれをめぐる資金）が完全に別物ではない以上、残念ながらある程度は不可避なムーヴメントなのかもしれない。しかし、それに対して「国交が正常化するまで」待つしかない、という姿

勢はあまりにも、情けない。人が破壊したものは人が責任をもって取り戻すしかないのだから、その意思があるのならば（特に文化芸術に関わる人間は）政治や経済とは違うアプローチで対話を試みるべきであるし、それこそ「前例のない」分断状態で模索すべきことであると思う。

開戦直後に各種メディアに溢れかえっていたキャッチーな見出しやセンセーショナルな写真・映像、短絡的なフレーズに違和感を覚えていたが、今やウクライナ情報はヘッドラインにもあまり上がらなくなってきた。扇情的な情報に群がり、大きなコンテキストに身を任せ、考えることを放棄してしまうのは簡単だ。遠い国のことだからこそ、グレーであるはずのものを白か黒かに勝手に分類してしまうことも、安易にできてしまうだろう。しかし、いかに見えないものを、聞こえないものを取りこぼさない努力が必要とされているかはいま一度考えていきたい。今や現実にもヴァーチアルにも溢れかえっている大声の、大文字の主張の中、対話すらできずに音もなく崩れていつているロシア演劇のような事実もあるのだから。

アレクサンドル・ポノマリョフとアートの未来

鴻野わか菜

二〇二二年四月二十九日、「越後妻有 大地の芸術祭 二〇二二」が始まり、アレクサンドル・ポノマリョフらが奴奈



図版 2 : Fram 2 2018. 大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ 2018

川キャンパスに二〇一八年に設置した《Fram 2》が、芸術祭閉幕の一二月一三日まで再公開されている。《Fram 2》は、ポノマリョフが二〇一七年三月に実施した世界初の南極での芸術祭「南極ビエンナーレ」の過去、現在、未来を表したインスタレーションである。一三ヶ国の百余名のアーティスト、研究者、ジャーナリスト、乗組員らが一艘の研究船に乗り、南極や船上で作品を展示する「南極ビエンナーレ」の目的は、どの国家にも属していない公共の空間である南極で、世界の人々が平等な立場で創作や研究に取り組み、対話を重ねることだ。人類共通の問題を考えるための国際的な共同体の基盤を作ることだった。「南極ビエンナーレ」の理念は、戦争によって世界が分断されつつあるこの時代にこそ新たな意味を持ち、《Fram 2》は、「南極ビエンナーレ」の意義やアートの役割について考えるための場となっている。【図版 1】

ポノマリョフは、一九五七年、旧ソ連（現ウクライナ）のドニエプロペトロフスク（現ドニプロ）に生まれ、オリョール美術学校で学んだ後、大洋を旅することを夢みて、オデッサ工科大学海洋大学に入学。一九七九年の卒業後は航海士となって海で働いたが、一九八二年、健康上の理由で陸へ戻り、アーティストとなった。現在はモスクワに住み、船、海、自然と人間の関わりを主題に制作を続けている¹⁾。

二〇二二年四月二五日に開催された「大地の芸術祭」と「瀬戸内国際芸術祭」の合同プレゼンテーションでのポノマリョフの講演に先立ち、ポノマリョフに、彼が近年日本で制作した作品について取材を行った。ロシアがウクライナに侵攻している状況での作家の言葉を記録しておきたい。

筆者：「大地の芸術祭」で二〇一八年に設置した《Fram 2》はどのような作品でしたか？

ポノマリョフ：《Fram 2》は、「南極ビエンナーレ」の歴史と思想の原理を表したものです。《Fram 2》の展示では、私が長い間とりくんできた「古典元素の芸術」という哲学的、美的な論拠について語っています。古典元素の芸術は、国を越え、様々な方法論が出会う共同体を作るための活動の基盤となります。公共の空間である南極、北極、海、宇宙を開拓するための基盤でもあります。元素は、古代ギリシャではある種のアルファベットを意味していました。そして私はこの惑星全体の人々が対話するための新しいアルファベットを作り出したいと夢んでいます。

そして、南極から北極まで様々な場所に設置される私の古典元素の芸術センターのシステムについて夢想し、計画しています。それは、博物館、アトリエ、実験室などから成る建物の集合体で可動式です。創造的な活動のた

めの場所です。

《Fram 2》の展示の中央に置かれた可動式の建築のモデルは、まさに、未来の古典元素の芸術センターのモデルでもあります。フラムというのは、偉大な極地探検家であるフリチョフ・ナンセンとロアル・アムンセンが南極を旅した船の名前ですが、美術界の伝説的な活動家である北川フラム氏の名前とも結びついています。北川氏はアートに明るい光をもたらし、あらゆる国のアーティストたちと友情を育みました。南極を旅したフラム号も私たちの《Fram 2》も丸みを帯びた形をしていて、氷の海でも水面に浮かび上がる構造になっています。私は私たちの友情と協働が続き、日本で古典元素の芸術を作ればと望んでいます。

筆者：二〇二一年に「房総里山芸術祭 いちはらアート×ミックス2020+」に参加されましたが、この二つの作品のコンセプトはどのようなものですか。

ポノマリョフ：私たちは皆、昨年、パンデミックの深刻な試練を経験しました。しかし、私と日本の友人たちはズームやメールを使ってインスタレーションを制作するという方法を試しました。日本の秀逸なチームのおかげで技術的に難しい二つのインスタレーションを制作し、小湊鉄道の駅に設置することができました。この二作品を結ぶのは、道をめぐる私の思想です。様々な意味における道です。ひとつは古くからある鉄道という道であり、もうひとつは人間の道、人生の軸としての道です。人間はつねに動き続けていますが、駅のようにとどまるための場所もあるのです。それはハイデガーが述べる時間と空間が圧縮されたようなトポスであり、私にとって日本での活動はまさに重要な駅となりました。

最初のインスタレーション《Questions of Evolution 進化の問題》は、技術の進化を示すことで、人間の進化をメタファーとして表しています、すなわち線路の一番手前に単純な車輪が、そして荷馬車が置かれ、その後ろに



図版 2 : Questions of Evolution 進化の問題 房総 里山芸術祭 いちはらアート×ミックス 2020+ 2021

自転車が、さらにオートバイが、最後に機関車が置かれることで技術の進化が示され、それらを蜘蛛の巣や血管のようなロープが結びつけています。これは平面的な奥行きによって動きを表した作品です。【図版2】

それに対して二番目のインスタレーション《永久機関》は、垂直の動きを象徴的に示しています。これは想像的、精神的な空間における動きを表していますが、それはあらゆる芸術の重要な特徴でもあります。仏教の教えでは、人間の心臓は魂の入れ物だと考えられています。ですから私の作品では二つの心臓が上下に永久に動き続けているのです。私たちの世界の血液であり重要な元素である水をかきわけながら、心臓が動き続けています。

私たちは今、とても複雑で危険な道を通っています。多くの人々の血が流されています。私は、私たちの多文化的な原理、人間の公共の空間、進流され、ふたたび平和の基盤となることを願っています。皆さんを愛しています。

言論統制が続き、政治や戦争について直接的な表現をすることが難しい状況であるにも関わらず、このインタビューにおいて作家が様々な表現を用いて、対話と交流の必要性、平和の基盤としての美術、国を越えた共同体の形成について語っていることに留意したい。

思えばポノマリヨフは、二〇〇九年にヴェネチア・ビエンナーレで発表した《SUB TIZIANO》においても、本



図版3：マヤ、失われた島 2000

来、軍事目的で使われる潜水艦に彩色しアート作品に変えることによって、「アートによる非武装化」という主題を追求していた。ロシアの艦隊の協力によって小さな島を煙で覆い、島が消失したかのような光景を演出した《マヤ、失われた島》も、軍事力をアートによって解除する試みにほかならなかった。【図版3】

そして、ヴェネツィア・ビエンナーレ、ヴェネツィア建築ビエンナーレでは、ウクライナ・パビリオンとロシア・パビリオンの両方の代表を務め、両国を文化的に結ぶ活動が続けてきた。（「南極ビエンナーレ」でも、公式プログラムとしてウクライナ基地とロシア基地の両方を訪問している。）

また、ポノマリョフは、世界各地で、アートを通じた人々との交流を展開してきた。「南極ビエンナーレ」実施前の最後のプロジェクトとなった「瀬戸内国際芸術祭二〇一六」の《水の下空》制作時にも、作家は香川県丸亀市の本島に長く滞在し、住民と生活を共にし、住民との協働のうちに作品を制作している（本作は、今年も「瀬戸内国際芸術祭二〇二二」秋会期で再公開される）。ポノマリョフは、「私にとって本島の漁師や住民の方との協働、すなわち、人生の一部を彼らと共に生き、海に出かけ、作品のために漁の道具を集めたことは、とても大切な意味を持ちました」と述べている。「人生の一部を共に生きる」という表現は、ポノマリョフの考えや生き方を端的に表していると感じる。筆者も本島、市原、モスクワ、南極などでポノマリョフの創作を二〇余年身近に見てきたが、彼にとつて、アートの目的は作品の完成だけにあるのではなく、そこに至る過程において、いかに人々と理解し合い、友情を育み、交流によって新たな文化を共に作り出していくかが重要であることを実感してきた。【図版4】



図版4：水の下空 瀬戸内国際芸術祭 2016

多文化の共生や越境性を理念とする「南極ビエンナーレ」について、ポノマリヨフは、「それらの中心にるのが芸術家です。芸術家は世界の全体像を俯瞰することができるからです」と述べている。アートは政治やジャーナリズムが語れないことについて語り、作品を共に作る過程で人々を結びつけていく。アートは、作ることも見ることも、この困難な時代であるからこそ続けていく必要がある、アートの使命もまた、文化が時に無力に思えることすらある戦時下においても追求されていくべきだということを、ポノマリヨフの作品は語っている。

1

ポノマリヨフの創作の軌跡、南極ビエンナーレの詳細については、以下の文献を参照。鴻野わか菜「空と海の間——アレクサンドル・ポノマリヨフ」『翻訳・翻案・伝承——文化接触と交流の総合研究』人文社会科学研究所 科研究プロジェクト報告書No.299、石井正人編（千葉大学大学院人文社会科学研究所）三七一五頁、二〇一六年。

https://opac.lib.chiba-u.jp/da/curator/100345/BA31027730_299_p037_KON.pdf

鴻野わか菜「舞台は南極。第1回南極ビエンナーレで問い直す人類と芸術の関わり」『ウェブ版美術手帖』（二〇一七年四月二六日）<https://bijutsutecho.com/magazine/insight/3551>

鴻野わか菜「つながりロシア（3）南極ビエンナーレの旅」『ゲンロンβ31』二〇一八年。

https://www.genron-alpha.com/gb031_03/

闘争と逃走 ソヴィエト時代の反体制的な芸術をふりかえる

河村 彩

ポリシヨイ劇場のプリマ・バレリーナ、オリガ・スミルノワがロシアによるウクライナ侵攻に反対し、一ヶ月も経たないうちにオランダ国立バレエ団に移籍した。「全身全霊をかけて戦争に反対する」「ロシアを恥じる」といったメッセージをSNSで発した彼女の毅然とした態度と、逆境に屈しないスターの華麗な転身のニュースは、日本でもエールとともに受け止められた。

スミルノワ以外にも、ロシアを去る芸術家、作家、文化人は後をたたない。だが忘れてはいけないのは、一握りのスターを支えているのは何百人もの無名のスタッフであるという事実である。彼らの中には、ウクライナにルーツを持つ者、親戚や親しい友人がいる者、プーチン政権に批判的な意見を持つ者も当然いるだろう。今のロシアでは戦争反対のデモンストレーションは禁じられ、SNSで反体制的な意見を表明することすら危険が伴う。今のところそのような無名の良心ある人々は沈黙するしかないように見える。

歴史を振り返ってみれば、ロシアの芸術は常に政権との緊張関係にあった。革命期のアヴァンギャルドは、ボリシェヴィキと結託し、共産主義のプロパガンダや新しいプロレタリアの生活建設に貢献したものの、一九二〇年後半になると難解なエリート主義として批判された。スターリン時代以降は社会主義リアリズムが公的な芸術様式とされ、それにそぐわない芸術家は排除され、ときには精神病院に収容されることもあった。だがとうぜ



図1：オスカル・ラビン《月のあるバラック》1959、ツハノフ
家族財団蔵

ん、公式芸術の様式に従って制作することに飽き足らず、創作の自由を希求する芸術家たちが常に存在していた。彼らは地下で密かに前衛的な芸術活動を展開し、一九六〇年代から八〇年代にかけては実験的なソヴィエト版「現代美術」である非公式芸術が開花した。ロシアはその時代の体制によって芸術を抑圧してきた一方で、豊かな反体制芸術をも生み出してきたのである。そのような二〇世紀後半の非公式芸術の中に、現代の抑圧的な体制に抵抗するあり方のヒントとなるような動向を探ってみたい。

*

戦後ソヴィエトの反体制派として有名なのは作家のソルジェニーツインだろう。彼は友人宛の手紙にスターリンを批判する内容を書いたとして逮捕され、収容所へと送られて八年の刑期を過ごしたのち、釈放後も「永久追放」を言い渡されてカザフスタンの僻地に追いやられた。一九五七年に名譽回復されると収容所での生活を描いた『イワン・デニーソヴィチの一日』を発表して国際的に注目されるが、国外での『収容所群島』の刊行が始まった七四年には逮捕され、西欧に追放される。現代でもソヴィエトの反体制派として「西側」のわれわれがイメージするのは、ソルジェニーツインのような、繰り返し迫害されても体制批判の筆を緩めない、不屈の意志を持った芸術家である。

ソヴィエト美術界のソルジェニーツインとも言える役割を果たしたのが、画家のオスカル・ラビンである。ラビンは仲間の画家や詩人たちと一緒にモスクワ郊外のリアノゾヴォ駅近くのバラック小屋に住みつき、アトリエを構えていた。暗い色調の画面に自分の住む村の風景や、酒瓶や新聞、食べ物といった日常品をカラーージュするラビンの画風【図

」は、社会主義社会における理想的な生活を描き出す明るい社会主義リアリズムの様式とは異質なものであった。一九六〇年代から七〇年代初頭のラビンのアトリエは開かれたサロンの様相を呈していた。バラックには電話がないため、ラビンは月曜日に「面会日」を設けた。面会日にはモスクワの非公式芸術家たちは誘い合ってリアノゾヴォを訪れ、詩の朗読に聞き入り、飲み食いしながら芸術論を闘わせた。リアノゾヴォの芸術家たちはソヴィエトのアウトサイダーであり、ヒッピーだった。彼らの独創的な画風にはファンが付き、画家たちと親しいコレクターが顧客となっていた。ラビンはソ連邦崩壊まで続く地下の芸術家の先駆者だった。

ソヴィエトの芸術家たちは芸術家同盟に加入することが義務付けられ、作品の注文や画材の支給、展示会場の確保は芸術家同盟を通して行われていた。一九七四年、ラビンは、このような不自由な芸術の状況を打破すべく、数名の芸術家たちとともにモスクワ郊外のベリャエヴォの空き地で検閲抜き絵画展を強行した。それを聞き付けた当局は、ブルドーザーを投入して展覧会を阻止した。このときラビンたちは周到にも外国の報道陣を呼び寄せていたため、「ブルドーザー展」は国外にも報道され、芸術家に対する当局の仕打ちは強い批判を受けることになった。結局ラビンはソルジェニーツィンと同じ道をたどり、一九七七年には「徒食者」であることを理由に逮捕され、国外へと追放される。

だが、ラビンのように表立って体制を批判し、戦う芸術家たちはむしろ少数派だった。多くの非公式芸術家たちは地上で闘争するよりも、むしろ地下に「逃走」する方を好んだ。そのひとりが二〇二二年現在開催中の「越後妻有 大地の芸術祭」にも出品し、世界的な美術家として活躍するイリヤ・カバコフである¹⁾。ラビンと親しかったカバコフは、「ブルドーザー展」を決行したラビンの行動を回想し、「本物の人間の真に社会的な行動」「偉業」と褒め称えている。だがラビンから展覧会の計画を事前に聞かされた時には「戦慄的な恐怖」をおぼえ、参加しなかったという¹⁾。

カバコフはソヴィエトの非公式芸術を回想し、六〇年代の芸術家たちを三つのグループに分けている。一つは

ラビンを中心とするリアノゾヴォの画家たちのように、自分の絵画の買い手を持って芸術で生活を立て、公式芸術に対して明確に抵抗の意思表示をする人々である。二番目のグループは、「心穏やかに無関心」を決め込み、「地上」での出来事から離れて自分の哲学と創作に没頭する芸術家たちである³⁾。そして三番目のグループは、ソヴィエトの体制に恐怖を覚えて「殴られないように身を隠し、気づかれないように」していた人々だとする。カバコフは自分自身を三番目のグループに位置付け「私はこの最後の〈目立たないでいるやり方の人々〉に属していた」⁴⁾と告白している。カバコフの証言からは、抑圧的な体制に立ち向かい、正面から闘争する芸術家たちはほんの一部であったことが判る。実際のところ、多くの非公式芸術家たちは、「地上」からは切り離された自分の世界へと閉じこもるか、あるいは体制を恐れてなるべく目立たないように生活し、「地下」で密かに制作活動を行うという二重生活をしていたのである。

美術研究者のエカテリーナ・ポプリンスカヤはヨーロッパのモダニズム芸術に現れる「拒絶性」を考察し、一九五〇年代から六〇年代のソヴィエト非公式芸術においては、ソヴィエト文化の拒否と地下への逃避という形で「拒絶性」が現れていることを指摘している。非公式芸術家たちの多くは公的なソヴィエト文化に対する抵抗者となるのではなく、「異質な者」「他者」「内部観察者」という立場を選び取った。彼らはソヴィエト文化から距離をとり、批判的な立場に立つことで、独自の美学や哲学を深め、自分自身のアイデンティティを形成したのである⁵⁾。「地下へと逃避することは何よりも個人的な『救済』の手段、社会的、集団的なものからは分離した個人の道的手段なのである」⁶⁾とポプリンスカヤは指摘している。ソヴィエト非公式芸術に見られる「拒絶性」は、芸術制作において体制に正面から抵抗する「闘争」とは別の手段の「逃走」を選ぶためのストラテジーであり、芸術家が体制から距離をとり、精神上の個人の自由を確保する徴しである。

カバコフ自身も作品の中で、ソヴィエトの社会からはみ出た人物を描き出している。《十の人物》(一九七〇―七四)は複数のイラストが連なる紙芝居形式の「アルバム」によってソヴィエトに生きる十人の主人公を描いた

シリーズ作品である。その中の一つ「クローゼットのプリマコフ」では、幼い頃からクローゼットの中に閉じこもって過ごす人物が語られる。プリマコフはクローゼットの中で聞き耳を立てて外の世界の様子をうかがっている。プリマコフにとつてのクローゼットは外部の世界から「逃走」して身を隠し、自分自身を守る「地下」の世界である。彼はクローゼットの中であれこれと想像を巡らせ、ついにクローゼットの外に飛び出し、地上から遠く離れてどんどん高く空へと舞い上がる。そしてアルバムの最後に広がるのは白い空白である。プリマコフはソヴィエト社会という現実の「地上」を飛び越えて、「地下」であるクローゼットから形而上学的な高みに到達してしまつたのである。

カバコフのアルバムは友人たちを招待し、「ホーム・パフォーマンス」のような形で上演された。「クローゼットのプリマコフ」の最後のように、アルバムにはしばしば白いページが挿入され、鑑賞者に対して解釈の余地を与えるものになつていた。パフォーマンスを見た客たちは、作品をめぐる、白い光や空無の意義を論じ合つたという。カバコフはこのような仲間内の雰囲気そのものがとても重要だつたと回想している⁷¹。

ラビンやカバコフのアトリエに集つた芸術家たちは、地下で独特の「芸術界」を形成した。カバコフは一九六〇年代の雰囲気に関して次のように記述している。

六〇年代においてもっとも興味深いものは、ボヘミアンの芸術家たちがたむろしていた地下のアトリエや貧弱な住まいに濃いエキスのように存在していた地下の芸術生活の独特の雰囲気である。「……」その世界の下では、お互いに緊密に関係をもちながら、愛し合い、敬い合つて、へ人生の床の下でのように、それ（地上、つまり公式の場所にいる人間）とは別の仲間たち、独特の人間の種族が暮らしている。まさにこの仲間意識的な雰囲気こそが、当時、いわば幸運な偶然によって、モスクワの同じ社会的な階層の中で出会うことになつたこれらの画家、詩人、ジャズマン、作家たちの生活にとってひじょうに特徴的なものだつた。⁸¹

地下の芸術家たちは、お互いのアトリエや住居を行き来し、芸術論を交わした。カバコフがしばしば語っているように、非公式芸術においては、作品をめぐる批評の言説やコメントリーが作品そのものと同じくらい重要視されていた。非公式芸術においては、事物としての作品のみならず、作品をめぐる交わされるコミュニケーションそのものが一種の作品であり、制作活動の一部だった。そのような仲間同士の信頼や、美術、文学、音楽というジャンルを超えた濃密な人間関係の共通の土台にあったのは、「地上」の公式な芸術には満足できず、真の芸術は地下にあるという感覚であった。

このようなソヴィエトの体制に対する恐れ、公的な芸術に対する拒絶、地下の芸術家たちの濃密な人間関係によって、ソヴィエトの非公式芸術は開花する。カバコフは六〇年代から七〇年代にかけて、絶望、憂愁、出口なし、恐怖などのなんともいえない気分が〈芸術界〉の生活を包んでいたとする。だがその一方で、このような気分に含まれていたからこそ、「信じられないほど激しく、爆発のように、解き放たれたバネのような力をともなつて、巨大量の絵画、詩、テキストが噴出してきたのであり、実に多様な画家、詩人、作家たちが次々と作品を作っていき、異常なまでに緊張し、白熱した創造的な雰囲気が存在することになった。」と振り返る。

*

一九七〇年代に入ると、非公式芸術は公的な文化を「拒絶」するだけでなく、自分を取り巻くソヴィエト文化の分析へと向かう。物質的な素材による制作を超え、作品にパフォーマンスや言葉を取り入れたモスクワ・コンセプチュアリズムや、社会主義社会にありふれたモチーフを取り入れたソツツ・アートと呼ばれる作品が興隆したのがこの頃である。これらの作品の特徴は、作家自身が身を置くソヴィエトの環境を分析し、社会主義のモチーフを取り入れながらも、そのシステムを批判的に考察する点にある。

モスクワ・コンセプチュアリズムのグループ「集団行為」のメンバーであったアンドレイ・モナストイルスキー



図2：エリク・プラートフ《危険》1972-73、ラトガー
ス大学附属ジンメルリコレクション

は、当時のモスクワ・コンセプチュアリズムの芸術家の「文化的状況と世界感覚の自己定義」を「アフリカのリヴィングストン」に例えている。モスクワ・コンセプチュアリズムを中心とする一九七〇年代の非公式芸術家たちは、アフリカ大陸を探検したデイヴィッド・リヴィングストンのように、自分の住む社会を外国人のように外部の視点から眺め、ソヴィエトの社会やそこで暮らす人々の行動に対してある種の参与観察を行い、その観察の記録や考察を作品に反映させるという意識を持っていた。

そのような内部からのソヴィエト社会の分析を行ったのがエリク・プラートフである。プラートフの絵画の中には空や田園風景が広がり、その前面に道路標識のような文字が書き込まれている。《危険》（一九七二―七三）では、森を流れる小川と、そのそばでピクニックを楽しむ人々のどかな風景が広がる中、「危険」という赤い文字が四方に書き込まれる【図2】。「危険」という文字が斜めに傾いて田園風景の奥へと鑑賞者の視線を誘導し、絵画に入り込むのを促す一方で、鑑賞者に注意を与え現実へと引き戻す。あるいは《ソ連共産党に栄光あれ》（一九七五）【図3】では、雲が浮かぶ吸い込まれそうな青い空が描かれているが、「ソ連共産党に栄光あれ」という赤い大きな文字が、空の画面へと没入するのを妨げる。ここではソヴィエトの社会でよく見られる標語が空への飛翔を邪魔する障害物として描かれている。

プラートフは絵画の中の言葉を「社会空間のイメージ」、言葉を超えて広がる空間を「社会の境界の向こう側」とする。つまり、プラートフの作品においては、言葉はソヴィエトの公的な領域に、空間は非公式の領域に属している。プラートフは述べている。「人間の思考一般は社会の境界の向こう側にある」¹⁰⁾。プラートフは絵



図3：エリック・ブラートフ《ソ連共産党に栄光あれ》
1975

画の遠近法を利用して、画面の奥に「社会の境界の向こう側」の世界を切り開いた。そしてソヴィエト社会のクリシエが、無限に広がる個人の肉体的精神的自由を妨害する状況を、作品上に表象したのである。

ブラートフの作品を考察する上で、空間という概念は「精神的な生活、解放と結びついて」おり、特別な意味を持っている。ブラートフ自身「空間の欠如は牢獄である」とさえ述べているように¹⁾、ブラートフにとって絵画内に広がる空間は、窮屈なソヴィエトの公的生活からの逃避の場であり、自由な精神の活動を展開する領域であった。ブラートフの絵画の多くは、遠近法によって広々とした奥行きを感じさせる。これはブラートフ自身が「地下」

での制作において感じていた自由を反映しており、絵画内の空間において開放的な感覚を鑑賞者と共有しようとしたことを示している。

*

ソヴィエト時代の非公式芸術をふりかえると、そこには政府への反対を表明する闘争のみならず、公的な文化には背を向けて個人の哲学を追求し、あるいは自分を取り巻くソヴィエト文化のあり方を内部から考察する「逃走」の美学も確実に存在していたことがわかる。ロシアの権力は芸術家たちをしばしば抑圧してきたが、その一方でロシアは芸術による多様な抵抗の形をも生み出してきた。非公式芸術家たちが互いに濃密な人間関係を築きあげ、地下という自己開示可能な場を守ったように、現在沈黙しているかに見える多くの政権に反対する人々も、何らかの形で密かに抵抗を続けているのではないだろうか。そして、ロシアの非公式芸術が数十年後に世界から

注目され、現在その膨大な記録の公開が進行しているように、政権に対する抵抗の記録もまた、未来において明らかになるだろう。

「西側」のわれわれがなすべきことは、政権に対して明確な抵抗の意思を表明する、「闘争」するヒーローを求めることではない。もちろん、戦争反対や反プーチンを主張するロシア国内外の文化人の勇氣ある行為は尊敬に値する。だが、歌手のアンナ・ネトレプコに対してヨーロッパの劇場が態度表明を迫ったように、ロシア国外の芸術機関がロシア人芸術家に対して活動継続の条件として反プーチン政権や戦争反対の意思表明を求めることは決して望ましいことではない。ソヴィエト時代には、亡命したり、逮捕された文化人の身内や同僚、親しい友人たちにまで取り調べが及んだこと、祖国に帰還すればどんな目に遭うかをロシア人たちは覚えている。それを考えれば、今反体制の声をあげることは、たとえロシア国外にいたとしても、われわれの想像を超える覚悟を必要とする振舞いなのだ。「西側」の芸術および学術機関には、反体制の「闘争」のヒーローを求めるがゆえに、ロシア人個人にヒーローになることを強要する権利はないはずだ。

むしろわれわれのなすべきことは、現在は「逃走」し、沈黙している人々と何らかの繋がりを保ち、彼らの安全に配慮しながらその声を届けることではないだろうか。カバコフは非公式芸術家たちの活動を次のように述べている。

地下に住む芸術家のひとりひとりとは、彼らを包囲する抑圧的な、出口なしのあの世界の存在や息づかいを不断に感じているのだが、孤立状態や地下にありながらも、自分の活動、自分の意識において、その世界の境界の向こう側に存在している力強く、生き生きとした、そして重要な意味をもつ水準や波とつながろうとする試みなのである。これはどん底に横たわっているものたちが管を突き出し、新鮮な空気を吸い込もうとする試みである。¹²¹

現在沈黙している反体制的な人々は、非公式芸術家たちと同じく、抑圧的な状況でも自分自身を守りながら、現在の状況を冷静に分析し考察しているに違いはない。ロシア国外にいるわれわれがなすべきことは、「境界の向こう側」とつながれるよう、彼らが空気を吸えるよう、ささやかな「管」を探ることだろう。

- 1 カバコフは一九三三年ウクライナのドニエプロペトロフスク生まれである。モスクワ芸術大学を卒業し、八〇年代からベルリンを拠点としながらインスタレーションを得意とする世界的な芸術家として活躍した。展覧会においては、彼の作品にはしばしばソ連邦出身、アメリカ在住の芸術家というクレジットが付されている。今後おそらく、美術館での展示の際には、ロシアの芸術家がウクライナの芸術家を厳密に区別しなければならなくなるだろうが、このようなカバコフのケースを考えると、芸術家の国籍や出身地を特定の国にあてはめることがいかに困難かは想像にかたくない。
- 2 イリヤ・カバコフ『イリヤ・カバコフ自伝』鴻英良訳、みすず書房、二〇〇七年、八六―八七頁。
- 3 同書、二四頁。
- 4 同書、六三頁。
- 5 *Бобринская Е. А. Чужие? Неофициальное искусство: мифы, стратегии, концепции.* М.: Ш. П. Брейс, 2012. С. 13.
- 6 Там же. С. 82.
- 7 『イリヤ・カバコフの芸術』沼野充義編著、五柳書院、一九九九年、一四一―一四二頁。
- 8 イリヤ・カバコフ、二二―二四頁。
- 9 同書、六〇頁。
- 10 *Бобринская, С.* 472.
- 11 *Эрик Булатов // А-я.* 1979. №1. С. 29.
- 12 イリヤ・カバコフ、六三頁。

セルゲイ・パラジャーノフの「ウクライナ時代」とソ連のコンテクスト

梶山祐治

世界映画史にその名を燦然と輝かせるジョージアのトビリシに生まれたアルメニア人映画監督セルゲイ・ヨシフォヴィチ・パラジャーノフ（アルメニア語名：サルキス・オフセピ・パラジャニャン、一九二四―一九九〇）は、抜きん出た個性ゆえに不当な理由で三度の投獄を経験し、たびたび創作の機会を奪われながらも独自の様式美へと到達した。カメラを手にすることが叶わない時期が長かったこともあって膨大な量のスケッチやカラージュ作品も残しており、映画作品とともに高く評価されている。その美学的達成は言うまでもなく、多くの民族文化の境界や宗教の垣根を越えて制作を行なった芸術家という点でも秀でた存在である。彼のキャリアの前半はウクライナを拠点とし、その作品はこの国に関連したものが多かった。この駆け出しの時代はあまり注目されることはないが、ソ連映画に雪解けが訪れる以前の社会主義リアリズムの痕跡を濃くとどめた時代から、独自の芸術様式を獲得していった成熟期間とみなすことが可能である。同時にパラジャーノフが映画制作を開始したのは、現在まで続く独ソ戦（大祖国戦争）勝利の神話形成が始まった時期でもあった。本稿ではこの「ウクライナ時代」について、ウクライナがロシアとソ連というひとつの国家を形成していたことに注意して整理する。

はじめトビリシで音楽を学んでいたパラジャーノフは、彼の演出家としての才能を見出した教師の勧めに従ってモスクワへ行き、一九四六年、全ソ国立映画大学（VGIK）に入学する。戦争による荒廃とスターリンによる



パラジャーノフ『コサック・ママーイ』（1965年制作）アルメニア・エレヴァンのパラジャーノフ博物館にて著者撮影

中央集権下が進むなか、ソ連映画史においてもっとも製作本数が落ち込んだ時期に映画の道を選択したパラジャーノフは、映画大学でイーゴリ・サフチェンコ（一九〇六一―一九五〇）に師事した。ウクライナ生まれのサフチェンコは同国を舞台にした作品を数多く撮った、スターリン政権下で活躍した監督だった。ポーランド・リトアニア共和国の支配下にあったウクライナでの武装蜂起を描いた『ボグダン・フメリツキー』（一九四一）、戦火が迫るなかでキエフスタジオが疎開した先のトルクメニスタンで完成した戦意高揚映画『ウクライナの草原のバルチザンたち』（一九四二）などを残しているサフチェンコの作品は、ソ連の公式宣伝の役割を担っていたため、現在、母国で顧みられることはほとんどなくなっている。パラジャーノフの在学中、サフチェンコはクリミアでの独ソ戦を描いた『第三の突撃』（一九四八）とウクライナの国民詩人についての伝記映画『タラス・シェフチェンコ』（一九五一）を制作し、両作品でパラジャーノフはスタッフとして関わっている。前者は、全体主義芸術下における戦後ソ連映画界において求められた、ファシストを打倒した事実をスクリーンに定着させるという課題に応えた作品である。サフチェンコは後者の作品を撮影中に急逝し、パラジャーノフの指導を引き継いだドヴジェンコは、民族的な関心の強い教え子にウクライナ行きを勧めたのだった。

ウクライナを拠点にしてパラジャーノフが撮った最初の監督作品は、モルドバの作家エミリアン・ブーコフの同名の小説を原作にした長編第一作『アンドリエーシ』（一九五四）である（映画大学の卒業制作でもパラジャーノフは同名の中編映画を撮っているが、フィルムは現存していない）。映画界に雪解けが訪れる以前のこの作品に

おいて、その映像は従来のソ連映画によく見られた範疇に留まっている。魔法の笛を持った羊飼いの少年と邪悪な魔法使いの対決は、後期のパラジャーノフであれば、特撮を用いずに極端に演劇化された物語によって語ったに違いないからである。その後は、フレスコ画をはじめ、陶芸やガラス工芸品、水彩画や刺繍など現代ウクライナの「名匠たち」の作品を紹介した『黄金の腕』（一九五七）、ウクライナの合唱団「ドウムカ」のスタジオ録音された歌に合わせてイメージ映像を制作したテレビ作品『ドウムカ』（一九五七）、ウクライナの女優ナタリヤ・ウジヴィー（一八九八―一九八六）を愛国芸術家として讃える『ナタリヤ・ウジヴィー』（一九五九）など、ソ連の良き面を伝える短編ドキュメンタリーの制作に励んだ。以上の作品は、ウクライナの民族愛を打ち出していると同時に、ソ連という名のもとに両国を同一のイデオロギーに包摂しようとする力が働いている。『ドウムカ』に収められた歌曲「ドニプロで」は、ウクライナ・ソヴィエト社会主義共和国の国歌を作詞したことも知られる詩人パウロ・テイチナ（一八九一―一九六七）による作詞で、その仕組みがよく分かる一例である。歌詞を訳出すると以下のようになる。

風が絹のような草を撫で

夜の帷が降りる…

ご覧 いとしい人 ドニプロの上に

星が出た

鼓動がこんなに高まっている 幸せが僕たちと一緒に

ついでにいるから

星が明るく輝く道を

歩いて行こう

遠く庭の向こうで街が眠りにつく

街灯はすべて点いている：

僕たちの頭上を低く 鳥が飛んで

鳴いた

牧草が匂う 干草の上に座ろう

もう夜更けだから

僕はウクライナ人で きみはロシア人

僕たちは仲良し

星が僕たちの遠くで煌めく

東の方をご覧 いとしい人

星の明かりが僕たちの道を照らしている

夜明けがもう始まったんだ

青春 青春 それは果たしてない幸福！

愛する人 かわいい人 きみ以上の人を知らない

一緒に進もう いとしい人

明るい僕たちの未来へ

風が絹のような草を撫で

夜の帷が降りる：

ご覧 いとしい人 ドニプロの上に

星が出た

鼓動がこんなに高まっている 幸せが僕たちと一緒に

ついでいるから

星が明るく輝く道を

歩いて行こう

遠く庭の向こうで街灯が消える

辺りで夜が明ける

そろそろ街へ帰る時間

大切な人

僕たちは戦争で街を

守った

今はきみと一緒に街をつくる

日々

幸せが訪れる　輝く夜に
やって来た

ご覧　かわいい人　空がバラ色に
咲いた

牧草が匂う　干草の上に座ろう
もう朝だから

僕はウクライナ人で　きみはロシア人
僕たちは仲良し

星はもう輝きたくないみたい
東の方をご覧　いとしい人
星の光が一斉に消え始めたらう
朝日がすでに昇ったんだ

青春　青春　それは果たしてない幸福！
愛する人　かわいい人　きみ以上の人を知らない
一緒に進もう　いとしい人
明るい僕たちの未来へ

幸せが訪れる 輝く夜に

やって来た

ご覧 かわいい人 空がバラ色に

咲いた

早朝の風に向かって歩く

気持ちのよいこと

僕はウクライナ人で きみはロシア人

僕たちは仲良し

一見すると、この詩はウクライナ人とロシア人の美しい友情を歌ったものである。歌の背景では、ロシアのヴァルダイ丘陵に源を発し、ウクライナの首都キーウを南北に貫いて同国南部の都市ヘルソン郊外で黒海へと注ぐ、全長二二〇〇キロメートルに及ぶドニプロ（ドニエプル）川が流れる。文字通りロシアとウクライナを結ぶ大河が、肩を並べるウクライナ人とロシア人と同じひとつの画を構成することによって調和を強調する。五〇年代のソ連映画は、独ソ戦争勝利の余韻が濃厚に残っていた。ここで歌われている「美しき友情」が共産主義イデオロギーによる結びつきにしか過ぎないものだったとしたら、二人はやがて別れることが運命づけられていたのだから。ともに戦ってナチスドイツを撃退したウクライナとロシアがソ連解体後に別々の国になり、前者の国で一緒だった頃の思い出が忌避されるとき、ソヴェエトの詩人テイチナの人気は失墜し、両者を束ねる原理はすでに効果を失ってしまっているのだ。

パラジャーノフの二本目の長編映画は、社会主義の発展と男女の恋の成就を関連させて描いた、ソ連農村ミュージカル映画の系譜に連なる『一番の若者』（一九五八）である。演出の意図は不明だが、冒頭の雪だるまが融解する象徴的なシーンが興味深い。緑の多い季節が到来すると、皆がスポーツに興じるコルホーズを舞台にして、コムソモールのリーダーであるオダルカの心を射止めるため、サッカー選手を目指す若者ユーチカの恋愛の奮闘を描いている。逃げ出す子豚と追いかけるオダルカというドタバタ劇もあり、農村ミュージカルコメディの典型的な枠組みを使用しているが、無言のシークエンスが突然挿入されるなど、のちのパラジャーノフらしさの片鱗も伺える娯楽作品である。続く長編第三作『ウクライナ・ラブソデイ』（一九六一）もまたミュージカル要素を取り込んだ作品で、村の合唱団出身でパリのコンクールで認められたことで世界的に著名になっていくオクサナを主人公にした、戦後メロドラマとなっている。彼女には戦争で離ればなれになった恋人アントンがいた。捕虜となったアントンは終戦しても消息不明で帰って来ず、オクサナの表情は晴れない。しかし偶然の力によって二人は邂逅を果たすと、『ドウムカ』でウクライナ人とロシア人を結びつけていたドニプロ川が登場し、太陽が輝く景色が愛し合う者たちの前途を示してフィルムは幕を閉じる。

そして、一九六五年、パラジャーノフはその名を一躍世界的に高めることになる『忘れられた祖先の影』（邦題はヨーロッパでの公開タイトルに基づく『火の馬』）を完成させる。ロシア帝国下でウクライナ文学復興に努めたムイハイロ・コツユビンスキー（一八六四―一九一三）の代表作を、生誕一〇〇周年を記念して映画化したものである。ウクライナ西部の山間に住むグツール族の半目し合う二つの家族にあって、思いを寄せ合いながら死によって分かれたるイヴァンとマリーチカの悲恋を描いた物語は、カルパチア山脈のロミオとジュリエットとも形容される。それ以前の作品は、オフスクリーンの音の演出や室内場面での装飾のこだわりなど、後のパラジャーノフの独創的な作品を連想させる点は散見されるものの、総じて当時のソ連映画の規範を逸脱するものではなかった。それゆえ、色彩と造型が豊かな融合を示し、カメラに絵の具を吹きつけるなどいくつもの実験的な試み

が行われた『忘れられた祖先の影』は、彼のフィルムモグラフィにおいて突然変異のように語られることもある作品である。特に、この映画の前に撮っているのがパラジャーノフ最大の失敗作ともいわれる『石の上の花』（一九六二）であることが、フィルムモグラフィ上での変化を際立たせている（『石の上の花』は撮影時に主演女優が死亡するという悲劇的な事故があり、降板した監督の跡を引き継いでパラジャーノフが完成させたのだった）。『忘れられた祖先の影』でカメラマンを務めたユーリイ・イリエンコ（一九三六―二〇一〇）のダイミナツクな撮影が、パラジャーノフのスタイルの変化に大きな功績を果たしたことは疑いない。その後イリエンコは監督業に力を入れるようになり、同じくグツール族を描いた『黒い斑のある白鳥』（一九七一）などの傑作を多く残した。パラジャーノフの作品と並べて見ると、筏の川下りのシーンなど類似した映像を多く発見することができる。『忘れられた祖先の影』の撮影中、自分の演出の意図を説明しようとしないうちに監督とはかなり対立を深めたイリエンコは打ち明けているが、作品の完成によって両者は信頼を築き、のちに彼は釈放されて間もないパラジャーノフから脚本を提供され『白鳥の湖ゾーン』（一九八九）を撮っている。

『忘れられた祖先の影』は、ウクライナの国立映画機関であるオレクサンドル・ドヴジエンコ国立センターが二〇二一年に発表した同国のオールタイムベスト一〇〇において、ドヴジエンコの『大地』（一九三〇）を抑えて一位を獲得したウクライナ映画史の公式の頂点を成す作品でもある（ちなみに、イリエンコの『黒い斑のある白鳥』は同八位）。映画史やオールタイムベストといったランキングの類が、何らかのイデオロギーから自由であることは難しいものである。二〇一九年に発表されたウクライナの同ランキングの場合、二〇一三年一月のデモ活動を端緒とするユーロマイダン革命に続き、クリミアが併合されドンバス紛争の始まった二〇一四年以降の国内事情が強い影響を与えている。当時、対ロシア関係を重んじていたヤヌコーヴィチ政権は倒され、国内ではソ連・ロシア的なものの排除が進んだ。映画界の動きで言えば、同国ではウクライナを侮蔑した場面のあるロシア映画の上映・テレビ放映が禁止され、ロシア語の会話場面がある場合はウクライナ語の字幕が吹き替えをつける



『忘れられた祖先の影』のイヴァン 写真提供：パンドラ

ことが義務とされた。こうした背景があるため、パラジャーノフの最初の師であり戦前のウクライナを代表する映画監督でありながら、スターリン期の広告塔的な立場にあったサフチェンコの作品は同センターのランキングにひとつも入っておらず、ウクライナを舞台にした作品を多く撮っているパラジャーノフもまた、『忘れられた祖先の影』以外の作品は除外されている。パラジャーノフといえども、ソ連の記憶と結びついた作品は忌避されてしまうのだ。

パラジャーノフとウクライナの良い関係はその後も続かずだった。『忘れられた祖先の影』完成から間もなく、当時のウクライナ共和国大統領の後押しによって『キエフのフレスコ画』の製作が開始されたが、その庇護者である権力者が失脚したため、映画も未完のままスタジオから放擲されることになってしまった。現存する一五分ほどの断片は、手持ちカメラ中心だった『忘れられた祖先の影』から一転した固定ショットに基づく映像で、それ以前にはなかった意図的なカメラ目線が登場するなど、『ざくろの色』（一九六八）から『スラム砦の伝説』（一九八四）や『アシク・ケリブ』（一九八八）へと至る、後期パラジャーノフの様式美の開花を予告する作品である。その後、パラジャーノフはアルメニアに活動の場を求めて制作の拠点を移していく。一九六〇年代後半からはソ連国内におけるパラジャーノフに対する批判が本格化し、その芸術が花開くことと反比例して、制作の機会は奪われていった。『忘れられた祖先の影』の国際的な成功は、かえってソ連指導部におけるパラジャーノフへの警戒心が強まる結果を招き、自由に制作することのできない本格的な苦難の時代の始まりとなったのだ。

一八世紀ロシアの文学的想像力と戦争

鳥山祐介

ロシアによるウクライナ侵攻以降、ロシアの文化（ここでは文学、芸術といった狭義の「文化」を念頭に置く）にも様々な角度から関心が向けられている。ロシアの厳しい言論統制の下で侵略戦争に異を唱える文化人の言動に注目が集まる一方で、積極的に侵略を支持する文化人のことも報じられている。また、ロシア文化を排除する欧米などの風潮に対しては、文化に罪はないとする声や、政治による文化の利用を選び分けて批判すべきとの声がある。さらに、今回の侵攻の思想的、文化的背景についても様々な指摘がある。

こうした論点については既に多くの論評がなされているので、この短文では今の事態をより立体的に見るための一視点として、一八世紀、特にその後半のロシアで、文学が国家および戦争と関係を築いた局面を素描してみたい。これは、近代ロシア文化の基礎が築かれた時代であるとともに、クリミア併合など現代と似た状況を経験した時代でもあり、比較により現代の事象の中の時代を超えた部分が照らし出されることもあるだろう。

クリミア併合（一七八三）と「復帰」のナラティブ

一八世紀のロシア文学に顕著なのは国家や君主を称える頌詩ジャンルの隆盛だが、そこで特に頻繁に扱われた

主題が戦争であった¹⁾。もとよりヨーロッパの一八世紀は戦争の世紀であり、その中で詩人たちは華麗な修辞や神話的アレゴリーを用いてロシアの戦勝を称えた。文化と政治の対立はここには存在しない。近代ロシア語詩の詩法を確立したワシーリー・トレジャコフスキーやミハイル・ロモノーソフの初期の実作も、後者の「ホチーン占領に寄せた頌詩」(一七三九)などロシア帝国の勝利を言祝ぐ詩に代表される。近代ロシア文学の誕生を促したのは戦争であったと言っても誇張ではない。

エカテリーナ二世の時代にロシアの言論、出版は活況を呈したが、これも度重なる戦争の時代であった。そのうち二度にわたるオスマン帝国との戦争(一七六八―七四、八七―九一)では、クリミア半島や黒海沿岸部といった現在のウクライナ南部の多くの地域がロシア領となった。

ジョチ・ウルスの後継国家であったクリミア・ハン国は、一五世紀後半にオスマン帝国の従属国となるが、宗主国の退潮とともにロシア帝国の影響力を被ることになる。ロシアとオスマン帝国の戦争の結果として一七七四年に結ばれたキュチュク・カイナルジ条約により、ロシアはクリミア・ハン国(クリミア半島だけでなくドニエプル沿岸からアゾフ海沿岸、クバン地方にまで広がる黒海北岸のステップ地帯を広く支配していた)をいったんオスマン帝国の影響下から切り離すが、一七八三年にはロシアに併合する。

一八世紀ロシアを代表する詩人ガヴリーラ・デルジャールヴィンは、これを受けて頌詩「クリミア獲得に寄せて」を発表した²⁾。この作品を貫くのは「クリミア併合が戦火を交えることなく平和裏に行われた」というロシア側のナラティブ(実際には武力を背景とした圧力があつた)と、それを可能としたとされるエカテリーナ二世の美德と英知に対する称賛である。

「どんな神様が、どんな天使が、
／どんなお方が人間に味方して、
／血を流さずにあなたたちに桂冠を、
／戦なしに戦利品と勝利を／与えたのでしょうか？」
「それはエカテリーナ、
／あの帝冠を戴いた美德、
／この世に現れた神、
／幸を

雨と降らせるお方」……」

それを見た軍神マルスは眉を顰め、／怒り心頭で齒軋りして叫ぶ。／「何だと？平和だと？私の力を借りずに勝利だと？……」

一方、ロシアの南方進出の背景に、エカテリーナや寵臣ポチヨムキンが温めた「ギリシア計画」という構想があった可能性も指摘される。これは、オスマン帝国領のヨーロッパ地域を征服し、コンスタンティノーブルを首都、エカテリーナの孫コンスタンチン（一七七九年生）を皇帝とするキリスト教国家の建設、ロシア帝国の「兄弟国」としての東ローマ（ビザンツ）帝国の復興という気宇壮大な構想であった。これを支えたのは、ギリシア由来のキリスト教（正教）を奉じるロシアが、ヨーロッパ文明の源とされる古代ギリシアやローマ帝国と他のどの国よりも深い関係を持つという理念である。「ヨーロッパの源流」との独自のつながりが、ロシアの優位性の根拠となっていた。

この時期の文芸作品でも、ロシアのイメージはしばしばギリシアと結びつけられた。さらに、ギリシア神話の舞台ともなり、古代にギリシア人の植民が行われたクリミアがロシアに併合されたことは、本来の帰属先への「復帰」ととらえられた。「シンフェローポリ」をはじめ、この前後に南部の多くの町にギリシア語起源の名称がつけられたこと、併合後に古代ギリシア時代の呼称タウリカに基づく「タヴリダー州」が設置されたことも、この背景による。クリミア半島のケルソネソス（ケルソン）がキエフ大公ウラジーミルの受洗の地であったこともしばしば想起された。ヘルソン市の名称もこの地名に因んだものである³⁰。

デルジャーヴィン「クリミア獲得に寄せて」の、ピタゴラスの魂の転生論を念頭に置いた以下の神話的イメージにも、この「復帰」というナラティブが反映している。『オデュッセイア』で豚に変えられたギリシア（アカイア）人を元の姿に戻すのはキルケードだが、ここでは知恵と戦争の女神ミネルウアになぞらえられたエカテリーナ

である。

キルケーは悔しさのあまり呻き／その魔法も今や役に立たない／獣に変えられていたアカイア人を／ミネルウアは再び人間となす／ピタゴラスは自説が現実となり／魂が移転するのを見て驚嘆し／満面の笑みを浮かべる／何しろホメロスが蜻蛉から生じ／朗々たる甘い調べによって／作り事ではなく真実を歌うのだ

侵略戦争への批判

一八世紀のロシアにおいて国家は西欧化、啓蒙を牽引する存在であり、その価値観を共有する文化エリートにとって国家を積極的に批判する動機は弱かったといえる。とはいえ、当時の知識人が、戦争が個人にもたらす災厄に全く無関心であったわけではない。ロシアの読者はフェヌロンやヴォルテールなどの戦争批判に接していたし、自らそうした見解を表明する知識人も少数ながらいた⁴⁾。

その中でもよく知られるのはアレクサンドル・ラジューシチエフである。主著『ペテルブルクからモスクワへの旅』(二七九〇)の「スパスカヤ・ポールスチ」の章では、夢の中で君主となった語り手の前に一人の放浪女が現れ、厳しい専制批判を行う。そこで専制の悪の体現の一つとして糾弾されるのが「戦争という名で呼ばれる殺人」である。「お前は自分が社会で一番の人殺し、一番の強盗、一番の裏切者、公共の平和の一番の破壊者になり得ること、おのれの悪意を弱い者の内に向ける残忍極まりない敵となり得ることを知らねばならないからだ。母親が戦場で殺された息子のことを泣き、妻が夫のことを泣くとすれば、それはお前のせいなのだ」。これを聞いた語り手は自らの罪に思いを至らせる。「あれほど輝いていた私の衣服は、血にまみれ涙で濡れているように思われた。私には、自分の指先に人間の脳の切れ端がこびりついているのが見えた」⁵⁾。

また「ホチロフ」の章には、ノヴォロシアへの侵出を念頭に侵略戦争を批判した箇所がある。「荒れ狂う猪よ、その勝利で大地を荒らしていくなら、征服地にお前を喜ばすものなど何もないことがわからないのか。」「……」もし人の住む国を手に入れたのなら、おのれの殺戮の数を数え、おののくがよい。「……」勇敢な市民を滅ぼした後に残るのは、お前に従い奴隷のくびきを受け入れる臆病な連中だ。とはいえ、お前の圧倒的な勝利への憎しみは彼らに深く根を張っている。期待するな、お前の征服の成果は殺戮と憎しみだ。圧制者は子孫の記憶に残る。新たな奴隷たちがお前を忌み嫌い、お前の死を願っていることを知り、悔恨に苛まれる日が来よう」⁶¹。

この作品が発表されたのは、折しもエカテリーナがフランス革命とヨーロッパの政情不安の影響を警戒し始める時期であった。結果としてラジーシチエフは逮捕され、シベリア流刑となる。

想像力と現実の橋渡し

現代では、文化と政治権力は対極にあるものと考えられることも多いが、文化それ自体が本来的に反権力的、反体制的であるとは言えない。人間の想像力の賜物である文学や芸術は、現実が課す様々な制約を超えることが可能であり、そのことは政治的抑圧の下で大きな力となる。一方、そのような自由は諸刃の剣でもあり、現実離れた空想が権力者の野心を育むこともある。またそれは、現実に生きる個々の人間の生命よりも何か大切なものがあるかのような想念を養ったりすることもある。

文化の大きな役割が想像力と現実を橋渡しすることにあるとすれば、詩的イメージによって権力を後押しすることも、空想を通して現実の中の問題点への注意を促すことも、文化が持ちうる機能である。ここに記した一八世紀ロシアのごくわずかな事例も、文化のそうした両義性を浮き彫りにしている。

- 1 上の問題に関わる論点は文下で簡潔に整理されている。⁹⁰ *Клейн И.* При Екатерине. Труды по русской литературе XVIII века. М.: Издательский Дом ЯСК, 2021. С. 303–338.
- 2 *Державин Г. Р.* Сочинения. СПб.: Гуманитарное агентство «Академический проект», 2002. С. 84–85.
- 3 クレチクの表像については *Зорин А. Д.* Кормя двухглавого орла... Литература и государственная идеология в России в последней трети XVIII – первой трети XIX века. М.: Новое литературное обозрение, 2001. С. 31–122; *Schötle, Andreas* *The Ruler in the Garden: Politics and Landscape Design in Imperial Russia* (Вена: Peter Lang, 2007), pp. 75–111; *Ulrike Jekutsch*, “The Annexation of Crimea in Russian Literature of the 18th and 21st Centuries.” *Russnik Komparatystyczny* 6 (2015), pp. 251–269 などを参照。
- 4 Robert E. Jones, “Opposition to War and Expansion in Late Eighteenth Century Russia.” *Jahrbücher für Geschichte Osteuropas* 32, N. 1 (1984), pp. 34–51.
- 5 *Радищев А. Н.* Путешествие из Петербурга в Москву: Вольность. СПб.: «Наука», 1992. С. 25–26. なお日本語訳にあたっては A. H. フォジミシチェフ (渋谷一郎訳) 『ホテルブルグからモスクワへの旅』東洋経済新報社、一九五八年を参考にした。
- 6 Там же. С. 70–71.

罪とヒューマニズム

アルテミー・マグリーン(訳・解題 乗松亨平)

われわれに何の罪があるのか？ 戦争による憤怒には非難も含まれる。肉体的にだけでなく道徳的にも、だれかを屈服させたいという欲望である。われわれロシア市民は、野蛮な戦争とそれにもなう国内の弾圧に驚きショックを受けているのみならず、集団的非難の標的にもなっている。われわれが領域上、形式的に帰属している国家の軍隊が犯した残虐行為をまえにして、この非難を退けることは難しい。われわれの代表ではない！とわれわれは言う。しかしナシヨナリストのプロパガンダもまた、われわれに「ロシア人」と呼びかける。ロシア社会が完全に分断されていることは、その社会を知るすべての人にとって明らかである。ロシアの都市部の教養階級は、数十年にわたり体制に反対してきた。とりわけその反欧米、反ウクライナの傾向に反対してきた。だが彼らは一〇〜一五%の少数派にとどまり、民主的な政治生活の回路はすべて固く閉ざされていた。われわれはみな国を去るべきだったのか、あるいは暴力に頼るべきだったのか。この問いにはさまざまな答えがありうるだろうが、どちらの選択肢もその道徳性・合理性は疑わしい。

ドイツ人が類似の状況におかれた第二次世界大戦後、カール・ヤスパースは、罪を刑法上のもの、政治的なもの、道徳的なもの、形而上的なものに区別した。戦争に反対しながら国内にとどまったドイツ人として、彼は集団的な道徳上の罪(ロマン主義的な迷妄と、服従の習慣をもつドイツ文化の一員である点で)と、悪の力をまえにし

て行動しなかつた形而上的な罪を、部分的に認める。

しかしこの議論は危うさを孕んでいる。罪責感には心にとつて善なるものと、ヤスパースは考えていた。そうかもしれない。だがじつは逆が正しいのではないか。罪の言説にもとづき罪責感を普遍化することで、ひとは悪を自分自身にとりこんでしまうのだ。そのような悪はひとの心に入り込み、サディスティックな道徳的良心を弁証法的に生み出す。罪責感をまだもっていない他人にも罪責感を押しつけたという誘惑にひとは駆られる。そして新たな過激な悪の行為を、たとえばそうした道徳化に抵抗する者たちによる悪の行為を、誘発することになる。第二次世界大戦から現在の戦争にいたる長い期間を一望すれば、この弁証法が展開してきたことがわかる。ナチ・ドイツの災厄の余波を受け、欧米が内向きに進めた道徳化は、徐々に道徳的な外交政策へと変わり、やがてブーチンの右翼的憤怒を生み出すこととなった。自分自身と他者に対する不寛容が、罪責感の延長として現れるのだ。そして、ますます多くの兵士とテレビ視聴者を殺戮に巻き込んでいる現在の戦争は、すべての人をこの流血の共犯者とすることを、目的のひとつとしているのかもしれない。それは「ロシア人」に対するもつともではあるがナイーヴな現在の感情と、同じ効果をもつものである。

おそらく、別のアプローチ——ヒューマニズム的なものと呼んでおこう——のほうがいのではないか。自分や他者のなかには善の火種があり、悪に抵抗する内面の力があるのだと信じ、この抵抗が最後には勝つのだと信じるようなアプローチである。だがこのアプローチをまっとうするためには、卑劣な行動原理をもつ者と関係をもつてはならない。善人たるわれわれはみな、悪人を過小評価してきた。そうした寛容さにおいてわれわれには罪がある。しかし、貧しい人々の保守的でナシヨナリステイックな態度に対して不寛容な者たちもまた、それらの人々を疎外し、極右イデオロギーのほうへと押しやった責任があるのではないか？ この倫理的難題を解くためには、寛容さの新しい理論が必要である。

善は盲目であつてはならない。これに関連するものとして、分裂した主体という形象にもとづく、精神分析に

おける罪の理論がある。われわれの隠れた欲望や恐怖が自身や他者において現実化することでわれわれに知られることになる、そんな罪の理論である。オイディプスは理屈のうえでは罪がなくとも、この意味では罪がある。自分が殺しているのは父親だということに、彼は気づかなかった。だがなぜ気づかなかったのだろうか。彼が自分のことを、堅固な家族的価値観をもつ善人だと考えていたからだ。

われわれのケースはこれに似ている。第二次世界大戦の勝利の正当化・顕彰と、スターリンの抑圧に対する喪は、ともに、同じ隠れたメッセージをもっている。「やつてやれ!」「悪者にされた側からやりかえしてやれ!」罪責感と欲望が伴走し、たがいに入れ替わるのだ。しかし責任があるのは、こうした邪悪な欲望をもち、他人にもそれを吹き込む者ではない。道徳化という衝立の背後にこの欲望を隠しつづけたあげく、それが突如として現実化してしまふ、そのような者にこそ責任がある。それゆえ道徳的課題は困難なものになる。自分自身のなかにも他者のなかにも、死の願望を認めたくえで抑制すること。

ここから私の結論が導かれる。われわれがほんとうに責任があるのはなにに對してなのか?

- ・ 知的な意味では、歴史の邪悪な潜在力を過小評価していたことに對して。
- ・ 道徳的な意味では、知識人と民衆の分裂に對して。この分裂においてわれわれは、道徳的に優れているがゆえに罪を負う側にある。

現代の自由民主主義は、本質的に教養国家(Bildungsstaat)のイデオロギー、啓蒙教育国家のイデオロギーである。民衆は教育を受けて、民主主義と市民的公共圏へと組み込まねばならない。そうでなければ議會制は無意味なものになる。この教義はもともと植民地主義を包含しており、大規模な暴力をともなった。そのためこの教義はいくぶん忘れ去られ、自分の利害にのみ関心をもつ消費者による、シュンペーター的な「民主主義」に取って代わられた。しかしこれは優れた代替案ではなく、この数十年のあいだに「ポピュリズム」の問題が次々と生じている。「民主主義者」は狼狽し、「ポピュリスト」をみずからの認められざる影として、民主主義から教養

(Bildung)を差し引いたものとしてみなしている。

よって、われわれの集団的責任は構造的なものだ。それはロシアの戦争支持者との同化から生じるのではなく、逆に、自分を彼らと分離することから生じる。われわれ自身の罪は、プーチンの罪と同じタイプのものではない。それは欧米の文明化された市民の位置づけに似たものであり、非民主的な傾向をもつ一般民衆と、内側からと外側からいかに接するのが唯一の問題となる。保守的な多数派と一五%のリベラルな少数派の価値観の分裂は、マスメディアにおけるロシア・プロパガンダによって増幅され、すでに二〇一三―一四年には、自由民主主義勢力はロシアの公共圏から締め出されていた。知識人を除いた「民衆」は、プロパガンダによって徐々に、ロシアとNATOの戦争が不可避だと信じ込まされていった。

この分裂はわれわれの罪だろうか？ イエスでもノーでもある。それは構造的なものだが、この構造の幾何学的頂点にわれわれは位置している。この分裂が克服すべき課題であることは明白だ。国際的・国内的システムのいずれでもこの克服が失敗しているひとつの原因は、絶望的状况にあるさまざまなグループが、それぞれの富や生き方を共有しようとしていないことにある。アメリカがドイツで行ったマーシャル・プランは、ドイツがみずからの罪を認め、道徳的「再教育」を受け入れるための重要な条件となった。ソ連ではそうはならなかったことが、文明化しようとする政治勢力とポピュリスト勢力との激しい衝突を一九九〇年代に引き起こし、現在のものをはじめとするさまざまな戦争でくりかえされた。これらの衝突する勢力を架橋することがわれわれの責任であり、階級を超えた団結をつくりだすことがわれわれの義務である。

前回の大量国外脱出からちょうど一〇〇年後のいま、新たな脱出に臨むロシアの知識人は、このことを忘れてないでいよう。自分とは何の関わりもないことで非難されたら抵抗しよう。しかしあなたの矜持を守ってきた分裂と排除に対する集団的責任は覚えておこう。あなたは自分の卑劣さではなく、自分の善に対して責めを負わねばならない。

【解題】

アルテミー・マグーンは一九七四年生まれのロシアの政治哲学者、サンクトペテルブルグ・ヨーロッパ大学教授。著書に『否定的革命』（二〇〇八）など。邦訳に「コミュニズムにおける否定性」（八木君人訳、『ゲンロン6』所収）。この文章はウェブサイト「The Philosophical Salon」に三月二一日付で英語で発表されたものである。ウクライナ侵攻に関してロシアの知識人が著したもののなかで、最も複雑で内省的な文章のひとつだと思う。と同時に、変革の主体としての「民衆（人民）」の重要性を強調してきた、著者の従来の主張の片鱗も窺われる。知識人による民衆の切り離しという論旨については、非リベラルな知識人の存在や、リベラル派インターネット・メディアの奮闘など、看過されているように思えるものもあるかもしれない。だが、みずからの罪を問うことそれ自体が新たな悪を呼び起こしうるというところまで展望したうえで、なおみずからの罪を問うこの文章の内省の深さは、ロシアの知識人がいま経験している苦しみをすぐれて伝えていく。

ロシア人アンケート

今回のウクライナ侵攻を受けて『チェマダン』編集部は、大学、劇場、美術館、出版社等、人文学関連の職業に従事するロシア人たちの考えをうかがうためアンケートを実施した。アンケートの配布にあたっては、編集部の人である演劇学者のヴァレリー・ゾロトウヒン氏に協力をあおいだ。ゾロトウヒン氏には「前書き」の寄稿も依頼した。アンケートの質問項目は、『チェマダン』編集部で設定した。

『チェマダン』アンケートについて

ヴァレリー・ゾロトウヒン

ここに掲載されたアンケートは、ウクライナに対するロシアの侵略戦争について、より正確にいうと、ロシアにおける社会生活、学問、文化にもたらした避け難く恐ろしい結果についてのものである。アンケートはロシア人の人文学系研究者に配布された。回答者には、芸術学者、文学者、演劇学者のほか、作家、批評家、編集者などがある。編集部はそれぞれの回答者に、本名かペンネームを選択するように依頼した。その結果、多くが匿名（あるいはイニシャルや姓を明示せず名前だけなど）の形を選んだ。この背景には、我々がこの二ヶ月で目にしてき

た軍事作戦に対するあらゆる批判が、ロシア国内において急激に犯罪として扱われるようになっていったことがある。これはつまり、二〇二二年三月に承認された「ロシア軍の活動に関する虚偽情報を流布」した場合の罰則に関する新法案（それはしばしば「フェイク法」と呼ばれる）を指している。この法案は厳しい罰則——高額の罰金から一五年の禁固刑まで——を定めている。ロシア国籍を持つ人々が公に戦争を批判するということは、今日では、自ら危険に身を晒すということである。

抗議や戦争に対する態度を表明できないことから、多くの人々は戦争が始まってからロシアを離れることを余儀なくされた。すでに国外にいた人々も帰国を保留する必要に迫られた。これが示すのは、現在アンケートの回答者たちが居住している場所——セルビアやフィンランドからアルメニアやエジプトまで——の雑多な配置である。いま現在、移民の規模に関して確信を持つて語れる人は誰もいない。もともと控えめな推計では五月上旬の出国者は一五万人で¹⁾、そのうちのごく一部が政治的移住者である。いわゆるデジタル・ノマドやロシアのIT業界の経営者らが、制裁のために仕事を続けられなくなり、しばしば会社ごと他国に移住するケースが多いようだ。しかし、知識人を含む多くの人々、また多くの出国者たちの状態は依然として不確定のままである。戦争の継続が、時が経つにつれ、九〇年代前半に匹敵する規模の移民の波を生み出す条件となつていることは明らかだ。

アンケートの回答者たちは、戦争に対する自身の態度を語り、世論調査においてロシア国民の間で戦争が広く支持されていること²⁾について考えを述べている。回答者たちは戦争に関してきわめて否定的な態度で一致している。この一致は何を意味するのだろうか？ 世論調査、とりわけ検閲とプロパガンダの条件下での世論調査は信頼性に乏しく、反証可能だということだろうか？ 回答者たちは全員、比較的狭い一つのサークルに属しているということだろうか？ そのどちらも部分的には正しい。アンケート回答者の大部分は年齢が三〇歳から五〇歳の間であり、そのほとんどがモスクワかペテルブルグに住んでいた、あるいはいま現在も住んでいる。アンケートの結果を疑うこともできるだろう³⁾。しかし回答者の多くは、悔しさを滲ませながら、個人的に遭遇した（体制

への」賛同の事例についても語っている。それぞれの家族の場合も例外ではなく。私見では、回答者のほとんどが学术界に属しているというのも大きな意味を持っている。戦争が始まった最初の数週間にはさまざまな反戦のオープンレターが噴出したが、学术界で権威のある新聞「トロイツキー・ヴァリアント」に掲載されたロシアの学者や学術系ジャーナリストたちのオープンレターは広く反響を呼んだ⁴⁾。このレターには八〇〇〇人以上の学者の署名が集まった。ここ数十年、ロシア国内の学問を世界的なそれと統合するために多大な努力を払ってきた学術界は、ロシアと国外の研究機関の学術的関係にとって、戦争が壊滅的な影響をもたらすことを即座に認識した。しかし、しかしである、この学者たちの要求への返答となったのは、ロシア国内の各大学の学長たちが署名し、「ウクライナの非軍事化と非ナチ化」を支持する言葉を書き連ねた別のレターだった⁵⁾。そのレターによって、多くの学者や教員たちは、自分たちの雇用主と協力し続けるかどうか、という難しい問題に直面した。多くの学生たちには深い失望を呼び起こした。一方、国外の学術的なパートナーたちは、このレターによって、事実上ロシアの研究機関との仕事を継続することが不可能となった。

このアンケートは四月の終わりに配布され、回答の多くは五月初頭に寄せられた。最後の回答を受け取ったのは、五月九日の戦勝記念日だった。二〇二二年、ロシアではかつてないほど不安な一日が過ぎていった。この日に先立って、ロシアが新たな戦争（いまに至るまでウクライナでの軍事行動は「特別軍事作戦」と位置付けられ、「戦争」という言葉自体は検閲下のロシアメディアでは使用が禁止されている）に突入するという噂や公式発表の予想があった。さらに、この祝日やそれに至るまでの準備は、歴史的記憶を政治目的としてきわめて粗雑に利用する例となっていた。ロシア国内外の多くの人々が二〇二二年五月九日を鬱屈した状態で迎えることとなり、そうした状態はこの日が、ウクライナにおけるロシアの戦争を受け止める段階を二つに分けする一種の象徴的な句切れとなったことと結びついている。それは、まったく正当化しえない大規模な暴力へのシヨックと結びついた初期段階、そして戦争への慣れやその「正常化」と結びついた第二段階である。編集部に寄せられた回答は、戦

争を非難するロシア人が置かれた抑圧的な不確実性を鮮明に物語っている。これらの回答では、ウクライナの人々との連帯が語られている。検閲の抑圧が急激に高まったことが語られている。回答者の多くが、いまウクライナで生じていることをソヴィエト連邦の崩壊、検証されないトラウマ、結論の欠如という観点から見ている。そしてその多くが、アンケート項目では触れられていないものの、明らかに回答者たちを動揺させているテーマについて考察している。それは、回答者各々も例外とはならない、ウクライナで生じていることに対する責任の問題である。

- 1 CM.: URL: <https://meduza.io/feature/2022/05/07/skolko-ljudey-nehalo-iz-grossii-iz-za-voyny-oni-uzhe-nikogda-ne-vernutsya-mozhno-li-eto-schitat-ocherednoy-voynoy-emiigratsi>
- 2 Опрос «Левада-центра», проведенный в конце марта, показал, что войну поддерживают около 80% россиян (см.: <https://www.lewada.ru/2022/03/31/konflikt-s-ukrainoi/>). Цифры других опросов отличаются, но во всех случаях свидетельствуют о поддержке большинства.
- 3 CM., напр.: URL: <https://blogs.isc.ac.uk/europrblog/2022/04/06/do-russians-tell-the-truth-when-they-say-they-support-the-war-in-ukraine-evidence-from-a-list-experiment/> О том же эксперименте на русском см.: <https://holod.media/2022/04/09/russians-against-war/>
- 4 CM.: URL: <https://t-invariant.org/2022/02/we-are-against-war/>
- 5 CM.: URL: <https://www.rsf-online.ru/news/2022-god/obvashchenie-grossijskogo-soyuza-rectorov/>

— アンケート質問項目 —

電子媒体雑誌『チェマダン』の編集部によるアンケート調査へのご協力をお願いします。この雑誌は日本の読者にロシア文化を紹介するものです。現在、われわれ編集部は、次号に向けて、現在の状況、すなわち、ロシアとウクライナの戦争、社会生活や学問、文化にもたらすその影響等々に関する、文学者や人文学者たちのことばを集めています。アンケートの文章は翻訳し、記名あるいは無記名のかたちで（いずれにすべきかはお知らせください）、日本語でのみ刊行します。あなたにとって不適切な質問事項があれば飛ばしてご回答ください。

① 氏名（本名あるいは匿名）

② 年齢

③ 職業／職種

④ 現在いる場所。ロシアを離れているとしたら、その理由／目的を教えてください。

⑤ 外国語はできますか？ もしそうであるならば、何語ができますか？

⑥ ウクライナでのロシアの軍事行動に対するあなたの態度は？

⑦ あなたの周りの人たち（身近な人、友人、職場の同僚）は今の状況をどのように受け止めていますか？ ウクラ

イナでのロシアの軍事行動に対する支持率が高いことについてどのように考えていますか？

⑧ ロシアとウクライナの戦争によって引き起こされるかもしれない、ロシアと／あるいはロシア人に対する他の

国々の態度の変化についてどう考えていますか？ 職場や／あるいはプライベートにおいてそうした態度の変化に遭遇することがありましたか？

⑨ 二〇二二年二月二四日以降、仕事やあなたのいる環境のなかで、どのような目立った変化が起きましたか？

⑩あなたの見方では、現在の状況は、将来のあなたの仕事や職業的なキャリアへどのような影響を及ぼしうると
思いますか？

⑪ここ数ヶ月の出来事によって生じた、(このアンケートで触れられなかったことで)あなたが心配している問題
について記してください。

【1】

①リュボフイ

②四八歳

③芸術学者

④モスクワ、ロシア

⑤英語

⑥否定的です。

⑦私の周囲の人々は私と同じように受け止めています。けれども全員がそのようなわけではありません。虚偽の
「事実」を解き明かすことができないせいで、「ロシアによるウクライナ侵攻の」支持率は高くなっています。そ
れはすでに何年もの間、主要な中央のマスコミすべてから流れています。主要な論拠は「彼らはそこでロシア
人を侮辱し、ジェノサイドを招いた」というものです。

⑧もちろん、今となつては皆がロシアにとっても警戒するようになるでしょう。私個人に関しては今のところ、仕
事の上でも個人的にも以前と違う態度を取られたということはありません。恵まれていると思えます(笑)。お
そらく、たんに物事を自由に考える環境なのだと思います。けれども、近いうちにはしばらくの間モスクワを離

れるつもりです。

⑨ 仕事に関しては、美術館で開催されているいくつかの展覧会が閉鎖になりました。近年行われる大きな国際プロジェクトが計画からなくなりました。他の西側やヨーロッパの国の美術館と協力する可能性はわれわれにはありません。すでに刊行が準備されていた国際的な出版計画もどうなるかわかりません。

生活に関しては、友人たちはワインの代わりに強いスピリッツを飲むようになり、ニュースを話題にしている。そう口汚く文句をいうようになりました。ロシアを去ることも含めて、政府に依存しないためにはどうやって仕事を探るかよく考えるようになりました。多くの音楽家や芸術家たちの雰囲気はひたすら最悪です。海外での講演や展覧会は全てキャンセルされました。事業に携わる友人たちはこれから先ここでどうするべきか分かりません。

⑩ みなそれぞれ違うと思います。私の計画に関しては、このことは二〇二四年の展覧会に影響します。なくなるかもしれません。けれども、何かが変わることを期待しています。その他のこと（パンフレット本を書くこと、講演を行うこと）はいつでもできますし、ただ聴衆を見つげるだけのことです。

⑪ 何よりも心配なのは、おそらく子どもたちの将来についてです。息子たちは芸術に親しんでいるのですが、芸術はここではまだすぐに自由にはなりません。息子の一人は一七歳で留学に行きます。もう一人はまだ小さいのですが、このような状況では望む通りに彼を教育することは難しいでしょう。一年生から歴史の授業が始まります。でもどんな歴史だというのでしょうか。誰がそれを書いているのでしょうか？

(二) われわれの古典的な文化の、世界における受容がどうなるかです。わたしたちの国で現在「われらのもの」と「われらでないもの」にその文化を分断することになります。これは恐ろしいことです。

(三) 芸術、美、歴史というものが、誰に対しても、いかなる意味もないということが明らかになりました。人口の七〇%はまさにその通りです。だから、ロシアで今何かをしようとする機運はほとんどありません。

【II】

① アンナ

② 四六歳

③ 研究、教育、出版

④ モスクワ

⑤ 英語、ドイツ語、フランス語

⑥ きわめて否定的です。

⑦ 私の周りの人々は落ち込み、きわめてひどい抑圧や危機を感じています。ウクライナにおけるロシアの軍事行動に賛同する割合が高いことに関しては、これはプロパガンダの一部であり、心理的な攻撃であると思います。実際には割合は高くありません。

⑧ 他の国のロシアに対する態度の変化はすでに進行していて、それは決定的なものになるでしょう。ロシア国民に対する態度の変化によって、ステレオタイプな印象と、「ロシアという」ナショナリティに対する敵意が強まっています。ロシア人をいつそう差別し、搾取することをもたらしています。

⑨ 国際的なプロジェクトの中止です。ロシア語での人文科学研究の領域の発展の見通しの崩壊。数十年にわたって作り上げられた仕事上の結びつきの瓦解。

⑩ 答えるのは難しいです。ロシアの社会全体が陥った状況が一体どのようなものなのか、私たちはまだ理解できていません。ロシアの研究者にとっては国際舞台での成功が正しいものとされてきたキャリアパスのモデルは、激しい変化を受けることは明らかです。ヨーロッパそして他の国々とロシアの学者の間で考えをかわすということは、完全になくなるかもしれない。

① ウクライナの社会の人道的な災厄に関する人類全体のシニシズム。ヒューマニズムの崩壊。(個人、組織、権威を持つ人々などの)調停者がいないこと。人類の分断。核兵器の製造・西欧の社会に対する信用の崩壊。

【三】

① アンナ(仮名)

② 四〇歳

③ 大学講師、キュレーター、演劇批評家

④ サント・ペテルブルク

⑤ 英語、イタリア語、ウクライナ語

⑥ きわめて否定的です。

⑦ 友人と仕事仲間は軍事行動に激しく反対しています。家族は戦争を非難していますが、とはいえ、何人かはプロパガンダ、つまり西側とウクライナの脅威を信じています。概して、賛成する人はいますが、そのような人々は世論調査が示すほど多くはないと思います。

⑧ 私の国外の仕事仲間たちは大いに私を励ましてくれます。「関係が変わったということは」私はありません。けれども、もちろん普通の人の反応はもっと複雑かもしれません。

⑨ ウクライナにおけるロシアの行為への支持を表明する劇場と関係を持つことはできません。何も計画することができません(検閲、政治的・経済的な不安定さ)。多くの仕事仲間は国外に去り、一連のフェスティバルや共同制作はなくなりました。もちろん重要なのは、代表的人物(プーチン)によって、全体主義の怪物じみた攻撃＋雰囲気を作りだされ、抑圧の恐怖を撒き散らしているのだという、その感覚に対する恐怖です。いずれにせ

よ、演劇の分野においては、思考する作品を不可能にします。

⑩学問と文化においてはおそらく、西側の文化との関係の断絶や抑圧によって凄まじい反動が生じるでしょうが、その抑圧は、政府によって植え付けられたいわゆる伝統的な精神価値に関する考え方に基づいて行われるのです。

【Ⅳ】

① ニキータ・スنگトフ

② 二九歳

③ 詩人、キュレーター、編集者、独立研究者

④ エジプト。今日、ファシストで犯罪的な政府であり、その機構の一部であり続けることは不可能に思われたので、ロシアを去りました。

⑤ 英語

⑥ これは恐ろしく、残虐で、非人道的な犯罪です。決して正当化することはできません。

⑦ 幸い、身近な周囲の人たちはほとんど皆、私と同じように「状況」を受け止めています。そうでなければ、おそらく彼らは私の周りからとうの昔にいなくなっていたでしょう。しかし一方では、遠くの方では、多くの人々が実際にロシア連邦の軍事行動を支持したり、あたかも起ったことは彼らとは何の関係もないかのように、自分のキャリアを築き続け、普段通りの仕事を行いながら、政治的無関心というマスクをかぶっていることを知っていますし、それを目にしました。二月二四日に最もショックだったことの一つは、サンクト・ペテルブルクの通りを、まるで何事も起こらなかつたかのように、群衆が歩いていました。あたかも、災厄は起こら

ず、その日の朝、キエフ、オデッサ、そして他の街に爆弾を投下したのは、自分の国ではないかのように、人々は笑いながら、どこかへと急ぎ、レストランやバーに座っていました。にもかかわらず、私は実際の戦争に対する支持は、調査に示されうるほどには大きくないことを確信しています。権威主義体制と全体主義体制の間くらいにある国で世論調査を行うことは、大体ナンセンスです。ロシアのSNSでは(国の「フコンタクト」でさえ)、国内のあらゆる地方のかなり多くの人々が、反戦的な、あるいは少なくとも、懐疑的なコメントを残し、それらに「いいね」を押しています。しかし、それらはお金をもらって政府を支持するコメントや投稿を書くユーザー、「プリゴジンのトロール」「エフゲニー・プリゴジンが設立した「インタネット研究エージェント」で働いている政府支持者たちのこと」で溢れているので、SNSで全体像を見ることはできません。

⑧ 何らかの国際的な組織に完全に属していないせいか、あるいはまた他の理由かもしれませんが、私は態度の変化には遭遇していません。こうした変化には理由があり当然だと思います。戦争が終わった後、私たちが生き延び、ロシア連邦の体制が没落するとして、それは避けがたい苦い薬になるでしょうが、自分たちに対する誇大妄想に憑かれて理性を失ったロシア国民はその苦い薬を飲まなければならないのです。とはいえ今は、ウクライナにおける一つの大きな悲劇と、何百万もの個人の悲劇とを背景にして、「ロシア人」に対する態度が何か複雑なものになることを、問題であるかのごとく語ったり考えたりすることは、控えめにいつて取るに足らないことであって、総じて非倫理的のです。

⑨ 二〇二二年二月二四日以前にあったような「仕事」はもはや何もありません。環境もそうです。

⑩ 「二〇二二年二月二四日」以前に何らかのキャリアを保障してくれた機構はもはや存在しません。ロシア連邦における機構の構築に関与しているわらわれは皆、多かれ少なかれ、ロシア連邦の残忍でファシスト的な体制を覆う、(ハンナ・アレントのいうところの)「ファサード組織」を作り上げたという点で、責任を負っています。だから、もし将来があるならば、すべてをゼロから始めることになるでしょう。けれどもそれまでまだ待つ

必要があります。私たち（ロシア国民）の未来は今はいは多くの点でウクライナ軍の成功あるいは失敗次第なのです。何から何までです。

① 実際には重要な問題は、ロシア国内での抗議活動や抵抗活動の見通しの問題であるかもしれませんが、今日、それらはほぼ全て地下へと追い込まれています。ロシアに留まっている人々、そして国外へと移動しなければならなかった人々によって、それらは止むことなく続いているということが他の国々では知られてほしいと思います。質問をありがとうございます。

【V】

① OS

② 三七歳

③ 研究員

④ セルビア。ロシア政府の政治に対する態度に反対しています。私が表明したように（公開書簡に署名したり、SNSに投稿したり、デモに出かけたりしました）公に戦争反対を表現することによって、ロシアに留まることは危険になってしまいました。自分の意見や戦争反対を表明することで、ロシア人は国家レベルで迫害され、罰金を課され、行政上の罰、あるいは刑事上の罰さえ問われることになりました。さらにもう一つ理由があります。それは戦争状態が設定され総動員が実施される脅威です。その上、戦争に言及しないように心がけ、戦争を支持することすらしている多くのロシア人の立場が容認できない、という倫理的な理由もあります。多くの意見はプロパガンダの影響で形成されていることは理解していても、そのような人々の間で暮らすことは倫理的に辛いです。

⑤ 英語、イタリア語、ドイツ語

⑥ 戦争には絶対反対です。二〇〇八年にジョージアで始まり、その後二〇一四年にクリミア、さらにドンバスで行われた、近隣諸国に対するロシアの侵略的な態度に私は常に反対してきましたし、自分の意見を表明し、デモに通っていました。残念ながら、偽りのデモクラシーの元で全体主義的で専制的な体制が広がり、独裁者が全てを支配する国においては、国民には政治状況に影響を与える可能性はありません。私はウクライナでの戦争を、政治的な悲劇であり、道徳的・倫理的破局だとみなします。ウクライナは独裁者の野心の犠牲になってしまいました。しかしこれは、全世界に対する、民主主義的な価値に対する、そして結局はロシア国民に対する戦争でもあります。

⑦ 基本的に、周囲の人々、つまり同僚、友人、遠い親戚はこの戦争に言及しないようにしています。彼らは公に戦争を支持はしませんが、「全ては複雑だ」「全世界がロシアに反対している」「われわれは常に侮辱されてきた」という、あるプロパガンダのコンセプトでごまかしています。自分の意見を持つてはいるはずの全ての同僚が、実際にはそれを表明することを恐れ、皆怯えているということは最初から明らかでした。プーチン体制は二〇年にわたって人々を脅かしてきました。この間、同意しない者は投獄され、銃殺され、毒を盛られ、殺されました。(最も明白な例は、ホドルコフスキー、ネムツォフ、ナヴァリヌイです。)自分の意見を率直に表明する勇氣を持つ人々は勇敢だと思われ、感謝されます。表には出てこず、個人的なやりとりのなかですが。

いわゆる「デイープ・ナロード」である大半の人々に関しては、彼らは実際にプロパガンダによってゾンビにされています。これはファシズムに九九%の支持があった一九四五年直前と比較することができます。しかし歴史の教えに従えば、プロパガンダが終わったとき、「ラシスト」(戦争を支持するロシア人を意味する新しい単語)も、ファシストのように酔いがさめると信じていたです。

⑧ 変化せざるを得ません。ロシア人が起こっていることのあらゆる酷さを自覚するためには、制裁も、最悪なほ

うへの態度の変化も不可欠です。戦争のもたらすものが個人それぞれに関係してはじめて、この自覚は生じるのかもしれない。しかも、これら全てのネガティブな変化は、ウクライナで起こっていることは決して比較になりません。公平さが勝利しなければなりません。

私自身に関しては、私は国外の仕事仲間たちと交流を続けています。今ヨーロッパとアメリカでは、ロシアの公的な組織との結びつきは拒否するけれども、戦争に対して抗議を表明する個々の学者たちの結びつきは支持するという立場が形成されました。私はこれは正しいと思います。人間的なつながりはこの災厄を耐えようと信じたいです。国家とは異なります。世界は、侵略国家とのあらゆる関係を断絶しなくてはなりません。

⑨私の場合、学術と仕事では変化は今のところ大きくはありません。いくつかのアプリケーションやプログラムは停止されたり、もしくは禁止されたりしました(SOBYなど)。しかし、全体としては大学においてはより大きな変化が見られます。大学ではきわめて厳しい検閲が始まったため、私の同僚たちの多くは辞職し、ロシアから出てゆきました。

⑩何かを予測することは、今はとても難しいです。最悪の場合、もしこの体制が存続するならば(これに関しては多くの分析家が疑いを持っています)、二度目の「鉄のカーテン」とスターリン的な大粛清が起こるでしょう。一九三〇年代にそうだったように、反対意見を表明したことで摘発されたり、逮捕されたり、処刑されたりするでしょう。

- ① 匿名
- ② 四二歳
- ③ 言語学者、研究員
- ④ セルビアのベオグラード。セルビア語とセルビア詩を研究するため、また、セルビア、ボスニア、モンテネグロの同僚たちと学問面あるいは創作面でのつながりをつくるために一時的にロシアを出ています。
- ⑤ ロシア語、英語、フランス語、ドイツ語、セルビア語
- ⑥ この戦争はクソだと思っている。
- ⑦ 親しい人たちや友人たちは分断されています。この状況を容認できない自分と同意見の人もいれば、口に出したり出さなかったりはありますが、支持している人もいます。同僚たちは基本的に私と意見は一致しています。高い支持率はフェイクです。われわれは、すべての意見を知っているわけではないし、戦争状況下では知ることができない。けれども、もし実際に支持されているのならば、国は、政権や戦争への支持率が一〇〇％へと向かうファシズムに陥るでしょう。
- ⑧ ロシアという国や国家への態度は、間違いなく、私の外国の同僚たちの間では絶対的に否定的なものとなりました。とりわけ私が今いるヨーロッパではそうです。セルビアではつねにロシアを支持する傾向があるので、一般の人は、実際に何が起こっているのか理解していないだけです。しかし、それでもやはり、セルビア人の同僚でさえもロシアを非難しています。
- ⑨ リモートで仕事をしているため、実際のな面ではいかなる変化もありません。セルビアで私がいる環境では、みな、私を支持してくれています。

⑩学問においては最悪な方に影響するでしょう。けれども、まだ学者に対する体系的な迫害はなく、学問に携わっていきける可能性があればいいのですが。

【VII】

- ① パーヴェル・アルセーニエフ
- ② 三六歳
- ③ 文学者
- ④ 学位論文執筆のためジュネーブにいる。
- ⑤ フランス語、英語
- ⑥ ネガティブ。
- ⑦ すべてがネガティブ。支持率は工場的に大量生産されている。
- ⑧ まだない、が、
後遺症は避けがたいものとなる。
- ⑨ 仕事はもうない。
- ⑩ 惨めだ。
- ⑪ http://chemodan.jp/blog/sp_nomer_1/

*編集部より：⑪には本人のフェイスブックのポストのURLが数点記されていた。右に記したチェマダンブログにてその翻訳を公開するかたちをとる。

① エレーナ・ゴルディエンコ

② 三四歳

③ 演劇研究者

④ フランスのバリ。目的は、アカデミックな／演劇に関係する仕事を続ける可能性を求めること、恐怖がすべてを包括してしまう感覚でない場所に滞在すること。

⑤ フランス語、英語。リトアニア語とウクライナ語は初級レベル。

⑥ この残酷で無意味な戦争による恐怖のなかにいます。幾千もの生が破壊され、幾百万の人々が、自身の家や周りの人を失って難民にならざるをえず、占領された場所ではあらゆる種類の暴力に関する膨大な数の証拠・証言があります——こうしたことは、いかにしても正当化することはできません。クレムリンの体制は、これによつてウクライナのみならず、ロシアをも破壊しているのです。

⑦ 国家というレベルでは、権威主義体制から全体主義体制へ移行しつつあるロシアという国内で行われるアンケートは、現在、人々が本当のところ何を考えているのかを示すことはありません。実際に当局の行動に対する支持を口にする人たちがさえ、語っているのは、原則として、戦争についてではなく、テレビによつて吹き込まれた「特別作戦」に関する知識のことです。間違いをしでかすことがないよう、総じて当局を支持する原則について語るわけです。そして、このことを具体的に分析することはすでに可能です。そのときわれわれが直面するのが、馴染みのあるソヴィエト的な原則であつて、それは「目立つことなかれ」、「何も起こらないように」ということです。人々はまず自分のことを考え、当局に抗うことを恐れて、自分をプライベートな生活という枠のなかに限定して、国家を妨げないことでプライベートな生活を国家から守っているのです。自分のところ

に国家がやってこないことと引き換えに。歴史的な記憶はそのとき逆説的に、こうしたムードを補給するように機能します。スターリンの弾圧に対する全面的な弾劾や罪人に対する審判は、結局、実質的には行われていないし、体制へ抗議している自分たちの子どもを支持するかわりに、ソ連で成長したその親たちはしばしば、どこであろうと一切なにも書かないように子どもたちを説得し、ただそのプライベートルな世界を壊さないようにいいます。体制が正しいか正しくないか——この問いは意味を持たないから、そもそも立てられないことがないのです。政治体制における何かを実際に変えるという可能性を人々は見ていないし、あらゆる政治家を信用しておらず、最大限、自分の頭のなかで自分の生活を政治的な領域から切り離して、つまりは、国家に起こっていることに対して自分の責任を認めようとしません。

私の周りには、ごく近い人を含めてプロパガンダに害されてしまっている人もいれば、ロシア国内でも国外でも反戦運動を行っている活動家もいます。自分の基盤となっている同僚や友人たちの輪は、すでに長い間、ブーチン体制のロシアによって繰り返し広げられているその抑圧的な機構に対して、ロシア国内で、また現在では流れ出ていった国外において反対していますが、そのせいで多くの人がずっと恐怖のなかにあり、その罪と無力さを痛感しています。

私もまた一時的に国外に出ています。それは、プロパガンダに損なわれている身近な年上の人間の考えを変えさせるには国内のリソースが枯渇してしまっているからで、また、そうした人たちと共に生活したり、あるいはつねに関わりをもったりするなかで、起こっていることについてただ黙っていることが私にはできなかつたからです。

⑧ ヨーロッパのあるカンファレンスで、私がロシアの機関を代表しているということで参加を拒否されましたが、現在、発表を準備するのは精神的に難しかったかもしれないので、休止はむしろ有益だったかもしれません。その代わりこれによって、ロシアの外からは見えないことについて、カンファレンスのコーディネーター

と話す機会が得られました。もし万が一、ロシア人の不参加が戦争の終結を実際に早めるようなことがあるとするならば、それはまったく素晴らしいことだろうと思うのですが。とはいえ、総じて何かネガティブな態度を感じることはありませんでした。反対に、われわれは同情されているし、概して、われわれ自身が考えているよりも、ずっと甚大な体制の犠牲者と考えられています。

⑨ 演劇界では危険人物に対する独特なパージが起こっています。ウクライナでの軍事行動に反対を表明する人物は解雇されたり、その演目がレパートリーから外されたり、より簡単に管理できるように劇場が統合されたり、きわめて激しく意見を表明した演劇人たちに対しては訴訟が行われたりしています。

大学生活においては、首脳陣との会合が行われ、そこで今次の出来事に対する公式の見解について説明され、それに反対する教員たちについては報告するよう仄めかされたりしましたし、また、にもかかわらず、私たちの大学のプログラムが検察によって憲法に反した歪曲した事例とみなされていることがいわれましたが、その後、学生たちは自分たちや教師たちを当局に差し出すことを恐れるあまり目に見えて慎重になっていき、話し方も遠回しになっていきました。それにもかかわらず学生たちが心からの感謝を示すのは、たとえば歴史上の同じようなケースや理論的テキストについて議論することを通じて、こうしたトラウマ的なテーマについて話す機会があるときです。

⑩ 体制が維持されるならば、学問や創作の自由はますます一層少なくなっていくでしょう。生活が完全に止まることはないし、何かをすることは可能なのでしょうか、しかしおそらく、活気のある何かが生まれるのは国の予算がつくような公共機関ではなくて、むしろ少人数に向けた私的な空間においてとなるでしょう。諸々の機構が一瞬で崩壊するとは思わないし、おそらく多くのものは維持されるのでしょうか、問題は、それがどんな代償を払うのか、ということです。

私はそこを離れたのですが、厳格にプログラムに従うように、そして、何かを呼びかけたり、コメントしたりし

ないように私にいつてきたのは一箇所だけではあるものの、今後、規定を遵守せよという要求はますます強くなつていくと思います。当局への賛同を示すような呼びかけは、幸いにも、職場ではまだなかったですが。

何よりも確実なのは、外国でポストを得られれば、アカデミックな仕事を続けていけるだろうということです。というのは、検閲や自己検閲のもとで思考をかたちにしたたり、自分自身でいるということとはすごく難しいことであつて、絶え間ない恐怖——親類の死の恐怖、友人が逮捕される恐怖——のなかで、実直に考えるのは難しいからです。もつとも、実際のところ、外国へ移つたとしてもこの問題が消えるわけではないのですが。

けれども結局は、アカデミックなステータスを保てるかどうかということについては、親類や親しい人たちの生活やその自由が保たれるか否かということに比べれば、まったく心配はしていなくて、もし職をかえざるを得なくなるとしても、その点で怖いことはありません。さらに、ロシア出身の親類と同様にウクライナ出身の親類たちもまた、自由の身であることがいづれにせよより有益なだからということ、逮捕されないように私にいつてくるのですが、私は、そうした条件下でいかにして何か意味のあることをなし、職業人として、また人間としていかに自己を保つべきかを考えるでしょう。

⑪プロバガンダに毒された人たちの目をいかに開かせるべきか？ 互いに対する気違いじみた非難の応酬に陥ることなく、周りの人たちを非人間化することなく、そうではなくて反対に、人間化するようなかたちで物事をなすにはどうすべきか？

戦争が終わつたときに何をすべきか？ 絶対に必要だと思われるのは、ロシア内にある外国人嫌悪に関わる仕事であつたり、ポスト植民地主義的な研究やプロジェクトであつたりですが、それらは、「偉大なロシア文化」を確認することではなく、国内における多様で異なる文化や、その中心部にある諸民族の諸文化や諸言語の存在、ロシアの諸民族の歴史について、その差別やトラウマ的な経験を含めた議論の存在へと向けられるものです。もちろん、さらにその前途に控えているのは、トラウマ的過去にかかわる膨大な仕事であり、ソヴェエトのプロ

プロジェクトに関する、そして、そのソヴィエトのプロジェクトの残したものについての膨大な議論ですが、その議論は、狭い範囲においてのみならず、公的で、大規模な範囲で行われる必要があります。このきわめて難しい問題は、われわれの願いのみならず、国家の立ち位置にも拠っているからです。今後、帝国主義的な立場をとる市民たちとの共通の場所を探すこともしなければなりません。われわれもまた市民であり、「気に入らないなら立ち去ってください」という立場を受け入れ難いものと考えているのですから、いかにしてわれわれが共にあり続け、再び戦争に陥らぬようにすべきかを理解するために、そうした市民の立場もよく検討して、そうした市民の恐怖やトラウマを深く考えなければならぬ。でもまずはこの状態ができるだけ早く終わりますように！

【IX】

① ヴァルヴァーラ

② 三二歳

③ 研究者、教員

④ イギリスで PhD 論文を執筆中。

⑤ 英語、ドイツ語、フランス語

⑥ 否定的。

⑦ ショック、怒り、憤り、絶望、憂鬱。支持率について思うのは、(一)戦時にこのアンケートは意味をなさない(ロシアの人々は、基本的にアンケートを潜在的な脅しとして受けとっているし、すでに戦時なのだから、多くの人が反対を表明するのを想像するのは難しい)、(二)多くの人は実際にプーチンを支持しているけども、それは、手元に残っている財産や福祉、保障を失うことを恐れているから。(三)自覚的に戦争を支持する人たちもいます

が、ただ、七五%もないとは思いますが。

⑧ ロシアへの態度が変わったというのは当たり前のことだと思います。経済的な圧力が戦争を止める方法だといふはわかります。その方法がおそらくはうまくいっていないというのはまた別の問題です。ロシア人への態度が変わるべきだとは思いません。この戦争に対して責任のある人たちを除いて。もともと、それは他のロシア人に責任がないということではなく、その責任は、(一)均等に分配されているわけではないし、(二)それぞれ個人の問題です。

関係の変化には出くわしていません。私の所属先のひとつであるロシアの大学(国立大学ではなく、政府側から圧力がかかった大学)に関連する質問が二件ありました。

⑨ 英国はまったく静かです。ウクライナ人、ロシア人、ベラルーシ人の研究者たちを支援しようとする個々の同僚たちがいます。ロシアでの私の環境は根本的に変わりました。多くの同僚たちは急いでロシアを離れ、現在、他の国々で仕事をさがしています。多くの人たちがロシアを出たいと思っていますが、様々な理由でできないでいます。残っている人たちは仕事を続けているし、私はその人たちに感嘆しています(が、戦争を支持している人を除いてです。その人たちに感嘆しているわけではありません)。ロシアのアカデミックな世界は後戻りできないほど変わってしまいました。安全な場所にいる私は普段通りに仕事をしようとしています、いつもそれができるわけではありません。終わらない戦争という悪夢、親類や近い人たちを心配すること、ロシアがきわめて急速にどんどん悪くなっていくという感覚、無力感——こうしたことすべてが苦しめます。

⑩ 予測は難しいです。私はまだそうしたことを考えずに、現在の課題に集中したい。

- ① グレープ
- ② 三六歳
- ③ PR 専門家／編集者兼コンテンツプロデューサー
- ④ イスラエルのハイファへ帰還。
- ⑤ 英語
- ⑥ きわめてネガティブ。
- ⑦ 自分の周りの人、友人や同僚たちの大多数は現在の状況を悲劇的なものとして捉えています。軍事行動の支持率を算出することはできないと思います。まず第一に、ロシアでは客観的で独立したかたちでの社会学的研究は困難です。第二に、弾圧を警戒して、多くの人たちが戦争に関する質問に率直に答えることを恐れています。たとえば私にしても、このアンケートの質問に回答することさえ恐れています。
- ⑧ 他国民がロシア人に対してどのように接するかはわかりません。全体として関係は悪化したと思います。私個人や自分に近い人たちに対する態度の変化には出くわしていませんが、とはいえ、そうしたことがあり得るということとはわかります。
- ⑨ あらゆる領域で不確実性が増しました。自分や自分の近い人たちのことを強く心配するようになりました。心理的な圧迫感があり、それがなくならない。ロシアでは独立系マスメディアはほとんどなくなりました。心が、そうしたメディアと働くのが私の仕事でした。私はロシア国外にいますが、戻ったときには仕事を失うかもしれない。まだそれは起こっていませんが、起こりうる。新しい資格を取って転業することを考えています。
- ⑩ きわめてネガティブ。私の家族の生活水準はこれからすぐに落ちていくでしょう。

⑪自分に立てている最も重要な問題は、この数年で私の国に何が起こるかということだ。

【XI】

①クリスチナ・マトヴィエンコ

②四八歳

③演劇学者、キュレーター

④モスクワ

⑤英語

⑥否定的

⑦私の友人たちの大部分は、いまロシアがウクライナに対して行なっている軍事的侵略を認めない点において意見が一致しています。同時に、多くの人が自分や家族の身を案じ、公然とした過激な発言に同意していません。また、社会内部での衝突がエスカレートすることも望んでいません。「世論調査の」高い支持率は、ロシア的メシアニズム（「自国民を助けよう」と、プロパガンダへの怠惰な追従や自分たちが住む前例のない帝國的自己欺瞞とが混在する同国人の頭の中に深い精神的混乱が生じていることを示しています。またこの高い支持率は、貧しさや不安定さの責任が彼ら自身ではなく、国外の誰か別のところにあると人々が確信していることを示してもいいです。そして彼らが政治、経済、歴史、文化にまったく通じていないことも。このことは、二〇〇〇年代（二〇一四年まで）に推進された「西側のリベラルなプロジェクト」の失敗の証拠でもあるでしょう。西側のものに似ていなければ国内の現代文化をここ最近までまったく信じてこなかったキュレーターや文化の担い手たちがとるアプリアリオリな植民地主義的態度、ロシア人への屈辱的な態度という点で、私個人もそうしたプロ

ジェクトを批判してきています。植民地的なもの、それはモスクワのリベラル系知識人の頭の中にある、と私は考えています。しかし、戦争に賛成を投じた八〇％にはおそらく関係がないことで、これはただ私たちの小さなアート業界に関わる話です。

⑧ おそらくこの態度はよくない方向に大きく変わると思います。これは当然でしょう。それは単に、ロシア人が現在、軍事的侵略と結びついているからというだけではなく、芸術関係者は、ゼレンスキー大統領が公正に述べたように、多かれ少なかれ自らの安定したモスクワ的あるいはかつてのモスクワ的な生活において、居心地の悪さを多少なりとも感じる必要があるからです。居心地の悪さとは、自国の地方部、そして他国や他国の文化に対する長年のエリート主義や植民地主義への当然の罰なのです。私には国外の仕事仲間から様々なコメントが寄せられました。彼らは私たちに公正さと抗議活動を求め、それと同時に、——誇りに思います！——支持する言葉を送ってくれ、現在起きていることに関する記事を依頼し、そして彼らの国では、例えば演劇界では、ロシア人はキャンセルされておらず、どうにかして支援するつもりである、と語ってくれます。もちろん、多くの人々は沈黙している。私は、この沈黙に、現在「ロシア人」という言葉を連想させることからくる内なる恐怖を聞いてしまうのです。でも、私はまた常に体制に反対してきた人々、ロシア国外に住みルソフオビア〔ロシア「嫌悪」に立ち向かっている人々に支えられてもいます。個人的には、リトアニアに移住したロシアの劇場の元大物ディレクターが引き金となりました。彼はその場所で劇場を率い、まったく不道徳な詐欺師、虐待者でありながら、現在、ウクライナの自由を称賛する言葉を吐いています。これは、彼の過去の行ないから考えれば、悲惨で欺瞞的な本当に耐えがたいことです。

⑨ 劇場では検閲があり、作品を動かすためにフェイスブックやインスタグラムは使えません。うちの劇場では、二作品が演目から外されました。一つは反体制的な女優が参加していたから。もう一つは、「大政翼賛的」な劇場をリストアップしている演出家の作品だったからです。両者ともに現在の脊髄反射的な保守派から「祖国へ

の裏切り者」とレッテルを貼られ、ヴィルイバエフの戯曲と同様に、その作品はもう上演されていません。職場環境も大きく変わっています。同僚との仲違いから、職業的コミュニケーションでのヒステリーまで、演劇人同盟の代表〔アレクサンドル・カリヤーギン〕の書斎への呼び出しから、「非愛国的な」投稿への「いいね」はすべて記録している、職場や個々人に損害をもたらすこともできるんだぞ」と警告するような電話まで。国を離れた仕事仲間や近しい友人たち。この「演劇という」分野で仕事をする意味の完全な喪失。毎秒ごとに何か起こるんじゃないかという感覚。インターネットでの攻撃、見境のないバカたちからの、その「リベラルなお口」を閉じろ、「リベラルな発言」やリベラルと結びついたすべてを禁止しろという要求。そして、(モスクワは私が生まれた街ではありませんが)もう何年も住んでいる場所が、自分の家、街ではないというような感覚。昨日までは想像もできなかったような会話が聴こえてきます。いまではまるで意識のたがが外れてしまったかのように、すべてが起こり得ることになってしまいました。ただ、戦争に反対している人たちだけが、子供用プールで、ショッピングセンターで、サウナで沈黙しているのです。

⑩ 私個人は自分のキャリアの終わりは見えています。一時的なのか、そうでないかはわかりませんが、動揺もしていません。それはつまり、私はロシアにいて、かつてと同じようには働けないということです。自分が何のためにその仕事をやっているかということに絶対的な信念を持つて働くことはできないということです。なにより倫理的に無理なのは、言語をかつてと同じように使うということです。私たち〔演劇界〕の仕事は言語構造およびそのパフォーマンス的特性と結びついています。発話することは遂行することなのです。現在、語っているのがたんに「侵攻を支持するような」別の輩たちというだけでなく、その語りは耐えがたい犯罪的なものなのです。文化にとってこれは非常^{ストアップクラシ}ブレーキでしょう。この腐敗は長く続きます。人々がこのような自身の本質を示してしまうと、どのような文化であれ、そうした本質とともに機能することはできません。人道的な考えは完全に否認されます。そうした考えが存在しないだけでなく、その存在の可能性さえ失われるのです。別

の輩たちのようなふりをすることはできません。

①私は過去にあった類似の出来事に関するものを注意深く読み始めています。それは、その内側のロジックを理解するため、そうした状況下での行動や生き方を見つけるためです。

日常風景に抗ってすべてを据えおく膨大なニュアンスを見つけ出そうとしています。それはつまり、現実において、この惨状が私たちの生活に入り込んできたとき、すべての人々を「新しい規範」に慣れさせるプロセスが地獄そのものだとわかったからです。恐ろしく、不快であり、気が沈みます。私は一人の人間として自分を救う、いまはつきりといえるのはそれだけです。

【XII】

① ロマン・オリゴヴィチ・モギレヴェツ

② 四二歳

③ 自立系創作労働者

④ サンクト・ペテルブルグ

⑤ 英語（中級）、ウクライナ語（読み書き、会話はリハビリ中）

⑥ きわめて否定的。母親はジトミルスカヤ地方の村の出身です。私は生まれてから一年の大部分をそこで過ごし、幼稚園に通い、洗礼を受けました。

⑦ 実際のところ友人や同僚たちはみなウクライナへのロシアの軍事侵攻を非難しています。しかし私は、自分の職業上の、創作的なサークルはきわめて小さい泡沫メディアだと認識しています。仕事仲間や友人の多くはロシアを離れるか、近い将来離れようとしています。親戚たちはロシアの行動に無関心か、身内で批判していま

すが、公然と話したり、このテーマに言及することを総じて敬遠しています。

⑧ ロシアやロシア国籍の人間に対する諸外国の態度というのは、いまはもっとも重要なテーマではないと考えています。それよりも、被災したウクライナ避難民やロシアに強制移住させられたウクライナの人たちに連帯し支援する倫理や政策のほうがはるかに重要です。もちろん、私も相手の態度が硬直化した状況に直面したり、ウクライナ人の仕事仲間から協働を断られたりしましたが、彼らにはそうする権利が完全にあるのです。そのほか、共同プロジェクトでは、自分から志願してウクライナの仕事仲間にもポストを譲ったりもしました。

⑨ 二月二四日までロシアの機関にはどこにも所属していなかったのですが、実際のところ変化はまったくありません。二〇〇八年以降、私は明確に左翼的な反体制的見解に立ち、この一〇年間の創作活動や教育活動はすべて、ロシア芸術や文化の民主化と脱植民地化や、腐敗した国家的あるいはオリガルヒ的機関に相対するカウンター・パブリックな領域の確立に向けられてきました。

⑩ 現在のロシアにおけるインディペンデントの文化や芸術の領域は事実上死に絶えました。自由な機関、劇場、自主企画組織などはほとんどがその活動を閉鎖するか、停止するか、あるいは検閲のくびきの下にあります。先行きは不透明で、未来の地平線は崩れ落ち、私はその日毎に生きています。

⑪ 妻のアナスタシアとの間には、戦争の一ヶ月前に生まれた三ヶ月の男の子がいます。私たちの生活はいま、すべて彼を中心に回っているため、私たちはどこにも移動することができません。私たちは仕事がなく、国外で求められるような技能もなく、外国語の知識も十分でなく、引越して新しい場所で生活を安定させるような資金もそもそもありません。また、受け入れと保護を必要としているきわめて多くのウクライナ人や政治亡命を考えているロシア人活動家がいるため、私たちが移住するのは現時点では非倫理的だと考えています。そのため、私たちはロシアで、常に明日の不安と恐怖に苛まれ、ロシア国内で状況を変えることができないこととウクライナの人々を十分に助けることができないう罪悪感を感じています。

① ヴァレリー・ゾロトウヒン

② 三九歳

③ 演劇史研究者、文学者

④ エレバン、アルメニア。戦争が始まっておよそ一週間半後に家族と共にエレバンに出国しました。出国の理由は、ウクライナでの軍事行動開始の決定に同意できないことと、国内政治の避けがたい変化（とりわけ、新たな「鉄のカーテン」や弾圧）、戦争によって引き起こされる様々な結果に、国内に残ったら直面してしまうだろうということを確認に理解したためです。この判断は、ロシアで近年承認された法律によって、合法的な抗議活動の可能性は実際的に残されていないことが少なからず関係しています。

⑤ 英語

⑥ きわめてネガティブ。軍事シナリオの可能性が高いとする報道も出てきてはいたものの、こうした急展開は自分にはまったく予期せぬものだったことも付け加えておきます。二月二四日以来、私たち家族は、ロシアにおける私たちの未来が、巨大な権力を分かち合う少数の人々の空想や欲望、恐怖のために消し去られたと感じながら生きています。

戦争のもっとも辛い結果は、私の考えでは、膨大な数の人々が暴力の渦に引き摺り込まれていくことです。その暴力は人々自身が遂行し、また人々に対して遂行されるものです。これは、双方の軍隊だけではなく、様々な形で戦争被害を受けた数百万人もウクライナの一般市民も、間違いなくこの殺戮の主な犠牲者ということです。公然と反戦の抗議を行なっている数千のロシア市民は、現在、脅迫や迫害にさらされています。テレビからは核兵器を使用するという脅しがたえず流れてくるように、ロシア国内では、数百万の人々が心理的な暴力に

さらされています。

⑦友人たちは基本的に私と同じように戦争に対してきわめて否定的です。仕事仲間も同様です。親戚の幾人かは、逆に、戦争に賛同しています。私たちは、それぞれ戦争に対する態度を隠すこともありませんが、とりたてて互いにディスカッションすることもなく接しています。軍事行動への支持率の高さは、こうした出来事の展開に向けて、きわめて長期にわたって一貫して行なわれてきたロシア人々へのプロパガンダ的な根回しと結びついていっているように思われます。プロパガンダを信じる気持ちというのは、ロシアの行動を道徳的に正当化し、同時に自分自身の立場を正当化する主張（たとえそれがきわめて弱々しく、矛盾したものであれ）を信じたいと思うような、人々の単純な心理的欲求に基づいています。戦争初期に蔓延した「八年間どこにいたんだ？」という問いかけを促したのは、まさにこうした道徳的正当化を必要としたためだと私は考えています。ウクライナでの戦争を支持する人々は、反戦派の人々に対してこう問いかけ、二〇一四年に始まり、ドンバスの住民に苦しみをもたらしたウクライナ東部での軍事衝突に目を閉ざしているとはのめかしている。でも、これは、いかなる実用性も持たない純粹に修辭学的な問いかけだと理解する必要があります。実際のところ、これは現在の状況におけるロシアの行動の非道徳性に関する対話を封じ込めるためのものだからです。

⑧態度が変わることは避けがたいし、当然のことでしょう。しかし、現在のところ、戦争はまだ終わっておらず、これについて話すのは尚早です。私の場合は、国外の仕事仲間の論文をロシア語に翻訳して出版する件で話し合っていました。彼は、理由はいろいろともわかるだろう、とほのめかしてそのやりとりを停止しました。これは例外でなく、翻訳を含む国際共同プロジェクトの運命は戦争初期に決定してしまっただけでなく、ロシアの同僚たちの深い失望を思うと、とても辛い気持ちになります。彼らの活動はロシアの人文科学を世界のそれへと有意義に統合しようとするものでした。一方、私たち家族がロシアを離れたことを知った国外の仕事仲間たちの多くは、即座に支援を申し出てくれ、とても感謝しています。エレバンでもアルメニア人の仕事仲間から多大な支援を

受けました。

⑨もっとも大きな変化は私たちの日常生活のあらゆる領域において憂慮すべき不確定性を伴うということですが、私たちが家族は新しい場所で落ち着く必要があるのですが、ウクライナ人家族の立場になれば、こうしたことを嘆くことはできません。私の友人や同僚はすでにながりの数がロシアを離れました。そのほとんどははっきりとした展望を持たずに、実際には、よくて数ヶ月ほど先のことを計画しただけでした。私たちの場合も同じです。

⑩現在私の研究活動は事実上止まっています。その研究をロシア国外に持ち出すことができるとかどうか理解するのはまだ困難です。もし可能だとすると、どのようにそのテーマを続けるべきなのか。おそらく、一定期間はロシアに身体を置かずとも続けられる仕事をやっているとは思いますが。しかし、もちろん、ロシアの雇用主はいつでも関係を断つことができるでしょう。

【XIV】

①アレクサンドラ

②三七歳

③演劇学

④フィンランド、ヘルシンキ。家族と一緒に一年四ヶ月前に移住。出国理由はロシアの全般的な状況、および夫がフィンランドでスタートアップ事業を始め、それを展開させたかったため。

⑤英語。いまフィンランド語を覚えようとしています。ドイツ語は忘れてきています。

⑥きわめて否定的。ロシアが仕掛けた戦争は、恐ろしい犯罪だと考えています。

⑦夫とは戦争に対する態度は一致していません。

ペテルブルグにいる父親は「特別作戦」を支持しています。

多くの親戚はおそらくニュートラルです（「乗り越えられるさ」、「もつとひどい目にあってきた」、「我慢しない」と）。親戚のなかにはプロパガンダに対しても、私や夫がいうプロパガンダへの批判に対しても否定的な人もいます。彼らは、「すべては複雑で、曖昧だ」と考え、罪がある人間はどちらの国にもいる、と考えています。彼らは自分自身に何かをいい聞かせることで、困惑し、無気力になっています。

フィンランドでは、周りの人たちは戦争を重く受け止め、支持することはせず、身体的に不調をきたしています（鬱病、精神疾患）。これは基本的には様々な時代にロシアから亡命してきた文化関係や教育関係の人たちです。

ロシアにいる考えが同じ友人たち、演劇関係者や文化関係者たちは体制に反対の立場です。彼らの今の状況を評価するのは私には難しい。彼らのことをとても心配していて、できる限り力になりたいと考えています。

統計学者ではないため、「戦争行為の支持率」についてコメントするのは難しいです。私はこの数字に疑問を呈する学者たちを完全に信頼しています（例えば、グリゴリー・ユージン、エカテリーナ・シュリマン）。調査の手続き、設問それ自体、そして文脈（戦時中の検閲）は私たちを真実に近づけてはくれません。人々が賛成している現状でいってしまえるのかどうか、私にはわかりません。私の父親が明確に支持しているのは、殺人や性的暴行ではなく、救出作戦です。

⑧フィンランドで生活していて感じるのは、ロシアに対する態度が大きく変わったということです。当然悪い方向に。ロシアは警戒されています。フィンランド人は国防的な見通しと真剣に向き合っています。現在の状況は、フィンランド社会は異常に反応しています。というのも、一九三九年にフィンランド人自身がロシアの侵略を経験しており、この記憶はとても強いのです。ロシア国籍の人々に対する体制の公式の立場は、差別を許

さないというものですが、もちろん、ヒステリックに振舞う人々もいて、そうした例を私は知っています。私自身に対する圧力や攻撃性は感じていません。ただし、私と夫の口座はチェックされ、ロシアの仕事に関する書類を要求されました。ロシア人と仕事をしたくない顧客を失ったり、(会社が制裁対象に入り)仕事それ自体を失ったりしている人々がいることも知っています。ロシア人とフィンランド人の結婚が破談になった例もあります。こうしたことが起きています。

⑨ ロシアに行くことを恐れています(現時点ではまだ〔往來は〕可能ですが)。両親は私たちのところに来ることを、恐れていたり望んでいなかったりします(彼らもまた、そうしたことが可能です)。私たちはユーロ為替の急変動で資産を失いました。とはいえ幸運にも、お金持ちではないので、損失も致命的というわけではありません。

ロシアに向けて仕事をするというのは意味がなくなりました。フィンランドでは口座からお金を引き出すことができないからです。契約は、いまは様々な友人を通して行なわれ、彼らは私の報酬を様々なロシアの非営利団体に送金しています。夫も同様なので、家族の収入はかなり減りました。

ここに来るきっかけとなった夫のスタートアップ事業は、見通しが立たなくなりました。私自身も多くの知人たちも心身の健康を害しています。

演劇学者として私は二〇一〇―二〇年代のロシアにおける「社会的演劇」をテーマとしていましたが、この題材ももう終えました。今後、何をテーマにするかはまだわかりません。

⑩ ネガティブに捉えています。

⑪ 回答が味気なくて申し訳ないです。ここに書いた回答はいうまでもなく不十分なものです。現状と結びつけて考えや感情、自分の状態を言語化するのが難しいのです。たぶん、まだとても強くトラウマを感じています。戦争は継続していて、その内側から何かを語るのとても辛いので。言葉を失ったように感じています。この体

験を通してもう一度語れるようになること、その体験を語ることが今後の私たちの目標の一つだと思えます。いまはまだ続いているそのことを繰り返さないために、そうすべきなのです。いまは、戦争を止めることのできないすべての言葉が無意味なものに思えてしまいます。信頼してくれてありがとう。

【XV】

① コンスタンチン・ドウダコフ＝カシユロ

② 四二歳

③ 文化学者、アヴァンギャルド研究者、モスクワ大学講師、ロシア人文大学講師、国立芸術学研究所上級研究員

④ モスクワ、ロシア

⑤ 英語、ドイツ語

⑥ きわめて否定的。私たちの国は侵略者だと考えています。この行動の結果は、ヨーロッパにとっても、なによりロシア自身にとっても破滅的なものです。言論の自由、選択の自由、個人の自由といった概念がもはや機能しない、それらが綱領として機能しない全体主義国家の復活のための条件がいまここに生み出されました。

⑦ 様々です。私の家族は父（七七歳）、母（七六歳）、兄（五一歳）はむしろ軍事行動を肯定していて、主に三つの理由からそれを正当化しています。

(一) こうした形でロシアは押し迫るNATOの脅威に対して、独立を保っている。

(二) 西側諸国、何よりアメリカの金融市場から経済的に独立するための条件を作り出している。

(三) 場合によっては（彼らにいわせれば、ウクライナのように）ナチズムの復権にも結びつく、リベラリズムの発

展によって引き起こされた精神的価値観の崩壊への抵抗。

同僚たちはむしろこの状況を否定的に捉えています。友人たちは一様に否定的です。問題は、一つのグループ内（家族、職場など）での意見が、あまりに食い違ったり、あまりに強い感情的反応を呼び起こしたりするもので、多くの人々は、少なくとも（二ヶ月あまり経った）いまはこの話題を避けようとしています。同時に、圧倒的多数の人々が立場に関係なく、こうした話題を非常に気に病んでいます。

残念なことは、悲劇は戦争そのものにあるだけでなく、様々な理由からロシア人の大部分がそれを支持していることにもあると私は確信しています（私見では六〇%以上）。

⑧ ほとんどが敵対的になると思うし、そうした態度は当然だと思います。

私は今のところこうしたことには直面していません。というのも私はもう数年間国外に出ていないので。

⑨ 私の近い友人の何人かは移住しました。文化に対する当局の不信と敵対心はますます大きくなっています。展覧会の閉鎖、芸術家たちへのますます大胆な抑圧、芸術的、学術的プロジェクトへのほとんど全体主義的な統制、そして実際的に実現不可能な予算条件の策定などがあげられます。それはまず国際的なプロジェクトに關してですが、それだけではありません。

⑩ ロシアの人文科学や人文学教育は、この二〇年余り、世界の知的空間に統合しようと多大な努力が払われてきたとはいえ、近年までは後進国でした。国際的なつながりから孤立し、民族的な愛国主義の熱狂にあって、二月の出来事は市民社会の形成という観点からのみならず、私たちをさらに遠ざけることになると思います。私たちは、アイコン、ドストエフスキー、チャイコフスキー、ロシア・アヴァンギャルドで自らの貧しさを覆い隠す遠く離れた知的辺境、文化的辺境に長期にわたつてとどまり続けるでしょう。文化的領域、知的領域は、イデオロギーなきイデオロギー、信念なき出世主義者たち、民族主義的な反啓蒙主義者たち、そして、全体としては、非文化的のみならず反文化的な役人やKGB職員たちによって、ますます規制されていくのです。

⑪ ロシアでは、国家規模の大惨事カタストロフイがさらにもう一つ起きたのだと思います。その大惨事が明らかにしたのは、「歴史的良心」とも歴史的意識、世界全体の一員になる能力や希望の欠落（その代わりに、自らに特別な地位をありがたく授ける）、全人類的な権利の価値を共有する能力や希望の欠落、また、自他に対する基本的な政治文化の欠落等々です。私たちの隣人の人生を奪い去り、損なってしまった大惨事の要因はこれらのことであり、そのことが私たちの罪を著しく増大させています。もつとも犯罪的な行為やもつとも低劣な動機を、当局はあけすけな嘘と大仰な言葉とを混ぜ合わせて正当化しています。私たちの大部分も同様です。少数派の人々はそうしたものと遭遇することを恐れ、そして、いうならば衛生的な理由とでもいうべきか、見通しをもつことなく、国外へ、そして国内で移住しました。

エクソダスー22

リノール・ゴラーリク著(訳・解題 伊藤愉)

*文中の○は訳注を意味する。

二〇二二年三月、私は出エジプト記第二章／二〇二二年の脱出(MCOH.22)に関する記録を取ろうと思い、イスラエルトベリシーエレバンイスタンブルーイスラエルのルートを通りはじめました。私と出会い、言葉をお話し、助けてくれた人々に、この上なく感謝しています。この記録に出てくるNという人物はみな別人です。これは、記録のなかの第一部、トベリシ編。明日、私はトベリシからエレバンに発ち、この記録は続いていく。

第一部：トベリシ 二〇二二年三月

トベリシにいく一週間前に、Aibnbでアパートを予約した。二日後、予約がキャンセルされる。家主からメッセージが届き、謝罪とともにアパートをウクライナからの避難民に貸したと綴られていた。彼女がそのようにしてくれたことに「ありがとう」と伝え、別のアパートを予約する。歴史は繰り返す。ホテルを予約する。

Nの父親はソヴェエト時代にロシアの大都市にある高等軍事アカデミーを卒業した。N自身はトビリシにもう六年住んでいて、その六年間、父親は電話で毎回訊ねてくる。「まだトビリシで遊んでいるのか？ もうすぐ地元に戻って助けてくれるんだろ？」二五日、Nは自宅に電話をした。父親は口をつぐみ、それからこういった。「母さんとお前のところに行ってみようかな……」。

Nが、現地の登録すべきテレグラム〔SNS〕・チャットやチャンネルをアドバイスしてくれた。そのすべてに登録する。一つ目を見てみると、誰かがチャットの一つでcuddle partyを企画しようとしていた。みんな大賛成だけど、場所がまだ見つからないようだ。「トビリシに」来たばかりの人たちは誰も街や建物がわからず、誰に相談すればよいのかもわからない。

あるカップルには子どもが生まれるところで、また別のカップルには一歳になる子どもがいる。どちらも子どもにはロシア語を教えず、英語だけで話すつもりだという。Nはとても気落ちして、これは汚された女性を玄関から追い出すようなことだといった。いまや傷ものとなった女よ、お前がどうして我々に必要だというのか、と。

恐ろしく寒い、トビリシでは過去になかったような三月の雪が降り続けている。「ロシア人が雪を運んできた。いまに戦争も連れてくるぞ」。

おそらく、わたしの人生でもっとも恐ろしい会話。三月の一八日、夜更け、わたしはNと自分の部屋にいた。Nは三日間の予定でモスクワから来ていた。Nにはキエフ近郊に住む兄弟がいる。妻と子どもたちをポーランドとの国境まで連れていき、彼自身はロシア軍を待ち構えるために踵を返した。Nは毎日兄と電話で話している。不

意にいわれる。「リノール、兄と話してもらえないでしょうか」。携帯を受け取った。「こっちは大丈夫です。電気もまだあるし、食料もある、犬の餌もある。僕たちはみんな、やつらを皆殺しにできるのを待ちわびている。男性も、女性も、みんながそう考えている」。「あなたたちのために祈ります」とわたしはいう。彼は「ありがとう」と。別れの挨拶をして、Nに電話を戻し、浴室に行く。座り込み、考える。二〇二二年。誰かを殺すつもりだと人からいわれたとき、わたしたちはなにをすべきかわかっていると思っていた。でもいまは違う。

年明けに、どうかこの世界がNにとって生きやすくなれば、なんて私は願っていた。それはつまり、世界と世界に対する彼の見方が互いに近づきますように、ということだ。「君の願いは叶ったね」とNはいった。いま、私たちは二人ともトビリシにいる。「世界のほうが僕の見方にぐっと近づいてきた」。

もう八年トビリシに住んでいるNがいう。「チニコフ〔銀行〕のカードが使えないって途方にくれた人たちがくるんだ。もちろん、私たちはそのことを笑ったりもするけど。それでも彼らがとてもかわいいそうだ」。

Nはアパートを探していて、三回断られた。ロシア人に部屋を貸したくないのだと（共通の、重く、とても辛いテーマ）。四回目、家主が彼女の顔をじっと見つめる。「見たことある気がする。テレビに出ていませんか?」。「ドーシチ〔独立系インターネット報道局〕で働いていました」。「フェイスブックのアカウントを教えてください」。きまり悪さにもじもじしながら、Nはリンクを送る。家主は写真とNの顔を見比べて納得した。Nはアパートを見つけた。

私のホテルに来るとき、Nはシールが貼られているのを目にした。「ロシア国民よ、お前たちは歓迎されていな

い」と。でも、もうほぼ全員ぼったくられているけどね、とN。

Nはロシア語が喉に詰まるという。「どうして市場でお店の人と話するときロシア語じゃダメなの?! 一番素晴らしい、一番好きな言語なのに! トビリシでは上の世代と話すときはいつもロシア語だったのに、どうしてダメなの?!」私は慎重に答える。「たぶんね、いまロシア語は言語ではなく袖章のように見えてしまうの」。

バーテンダーがNの友人に出身地を訊ねる。彼女はロシアだといい、すぐに自分が反プーチンで、トランク一つで出てきたことなどを説明しなければと感じた。「とても同情していますよ」とバーテン。「でも、あんなことをここではしないほしい。ウクライナの次は、彼はこっちに来るんでしょう」。

「ボリシェヴィキは七月までもたない」といったふうを考えている人には出会ってない気がする。

戦争が始まって以降、トビリシのいくつかの銀行では、口座を開くときに書類へのサインが求められていた。ウクライナでの戦争を戦争と認め、ロシアが占領者であり侵略者であると認める書類。今日、いくつかのチャットで、「占領と戦争を認める書類へのサインがもう求められなくなった」という情報が出てきている。

Nの弟が反戦集会にいき、姿を消した。誰も寝られず、五時になっても帰ってこなくて、みんな頭がおかしくなりそうだった。どうやらロシアの国旗を持っていったらしく、それは彼がロシア人だけどウクライナの戦争には反対している、という事実を象徴していた。集会では、すぐにジョージア人たちに囲まれ、冷たい視線を浴びせられた。Nの弟は自分の立場を説明し、その後ジョージア人たちは彼を仲間に迎え、集会のあと朝までご馳走して

くれた。

「倒錯したこの世界で、イラン政権から逃げ出すことのできた人々は難民と呼ばれ、救済される」とNがいう。「北朝鮮政権から逃げ出すことのできた人々は難民と呼ばれ、救済される、そしてロシア政権から逃げ出すことのできた人々は「占領者」と呼ばれ、背中に唾をはかれ、暖房のないワンルームに六〇〇ドルという値札を貼られる」。

「どうしてロシア人だつてことを恥ずかしく思わないといけないんだ？」と苛立つN。「そんなの、腕や足があることを恥ずかしかるようなものじゃないか」。

デイスクール・ジョージア人たちは、もしロシア人たちが押し掛けてきたら、プーチンはここに「ルースキョーミールロシア世界」をつくるんじゃないか、と心配している。だからこそ、「ロシア人に」口座を開いたり、個人事業主を認めたり、部屋を貸すことを望まない。それ以外の理由は二の次だ。

「新しく来た人たちを助けたいんです」とN(トビリシに住んで九年目)はいう。「彼らの振る舞いや受け入れられ方は、私にも影響があるし、子犬や怪我人みたいにただただ可哀想な人たちもいます」。

チャットでの会話：「私はいま風にいえばクリエイティブ・コーダーです。クリエイティブ系なものは(大体)なんでも開発します、ジェネレーター・アート(NFTを含む)も手掛けます、music techのスタートアップで働いていて、モジュラーシンセに目がなく、作曲もします」。その人が探しているのは、同じ志を持つ誰か、そして

仕事。

Nは移住してきたばかりのロシア映画界の有名人たちと会ってみて、驚いたという。「あの人たちはすごく困惑していた。それでこういつていた。俺たちはクソみたいなものを覆い隠すパーティーションだったんだ。クソつてのはあらゆるクソだ。俺たちは、ロシアにもある何か良いものの一部だと考えていた、そして「俺たちがもっと頑張れば、そのクソみたいなものを倒せるんじゃないか……？」と自分にいい聞かせていたんだ。

私の知人はアパートの床に板を張っていることを理由に出国しようとしないうとNに話す。床を板張りして、それから荷物をまとめるんだって、と。「そんなのたいしたことない」とNはいう。「こっちは一人の男にもう二週間うんざりさせられている。チャットのいたるところで、どこに部屋を借りるべきか、トラベルカードをどうするか、どこの両替所のレートがいいか、口座を開設するとき何とすべきか……って延々と続けるんだ。僕たちはついに我慢できなくなり、「なあ、いつ来るんだ？」と訊いたら、そいつは「まだわからない、プールの会員カードの期限がまだ残っているんだよなあ」ってさ。

Nは友人、親族、同僚など一二人を連れだした。大きなアパートを借りて、大人四人と子ども四人の計八人でいま住んでいる。N自身は子ども用ベッドで寝ていて、足を折り曲げるか、首をまるめるかしないといけない。「誰一人いうことを聞かない」苛立たしげにNはいう。「ごく普通の生活ができるはずなのに、誰も私のいうことを聞かない」。

ジョージアに七年住んでいるNは、ジョージアでもっとも人気あるロシア語番組の一つをもっている。「前から

来ている人たちの良い面を伝えたり、あるいは多少なりとも目的があつて新しく来た人たちにジョージアを紹介する必要はあるんです。いまのところ、多くの人はロシアに戻るだろうし、もしくはまた別の場所にいくだろうとジョージアの人たちを安心させています」。

ジョージア人たちはウクライナでの戦争を「自分たちジョージアの戦争」と考えている、とN。「プーチンとの戦争はなんであれ「自分たちジョージアの戦争なんだ」とね」。

デイスクール…ロシア人の罪は、何倍もお金を支払うことができるロシア人たちを入居させるために、ジョージア人がそこに住んでいたジョージア人たちをアパートから追い出していることだ。

ジョージア語が読めるNは、ジョージア政府にもジョージアの反対派の人たちにも、もはや問題がないかのよう
に、ロシア人の来訪についての出版物がすごくたくさんあるという。同じ日、やはりジョージア語を読める別の人物が私に嘆く。ジョージア政府も反対派の人たちも、このことが国にとつてどういう意味があるかまったく理解していないかのように、ロシア人の来訪に関する情報があまりに少ない、と。

Nは各種サービスのお知らせ、国際学会から送られてくる参加拒否のメール、アプリのメッセージなどの断片を集めようとした。それはつまり、ロシア人だからという理由で支払いができない、利用できない、参加できない、あれやこれができないというテキストであり、そこにある「ロシア人」という言葉を「ユダヤ人」に置き換えて既製のテキストを組み立てようとしたのだ。出来あがりは、恐ろしくて典型なものになるに違いなかった。Nを押しとどめたのは、そのテキストが、「愛国的」な奴らによって世界的なルソフオビア〔ロシア嫌悪〕の証拠とし

て用いられることがわかっついて、なにより敵に利するようなことをしたくなかったからだだった。

ジョージアに來たばかりのNの年若い甥がボランティア・センターにいき、ウクライナを助けたい、といった。そこで働いていたジョージア人の一人が彼にいった。「おうちに帰って体制を倒してこい」。グループのリーダーがすぐにそのジョージア人を平手打ちし、青年に謝罪して事態を収めたが、Nはいまでもそのことを苦々しく話している。

カラーリング、ツープロック、ヘアタトゥーなど、モスクワやペテルブルグ風のお金をかけて凝った髪型をした人たちがたくさんいる。Nは、この髪型の人たちは一ヶ月後、二ヶ月後はどうなっているのだろう、と考えずにはいられない、という。お金、お金、お金と。

ジョージアにもう三年住んでいるNが苛立たしげにいう。彼らは自分たちのヒムキ〔モスクワ郊外の都市〕をここに持ち込もうとしている、と。「オゾン〔ロシア版Amazon〕はどこ？ アヴィト〔ロシアのクラシファイド・サイト〕は？ テイクアウトできる悪くないカフェはある？」と。そして自分たちを匿ってくれた偉大な国をバカにし始めるんだ。

デイスクール^{ハードコア}…筋金入りの反対派の人たちは国境を通過させてもらえない、通れた人たちも、いずれにせよここでは普通に働けない。ジョージアはロシアとの関係を損いたくない。

新しく來た人たちのために、ジョージア社会でのエチケットや正しい振る舞いに関する手引書が配られている

〔たとえば「ジョージア人に靴を脱ぐよういわないように」とか、これはある種ナンセンスね」と私のリクエストに応じてNは例を挙げてくれる〕。誰もがこの手引書のことを話し、この存在を知っている、一枚でいいから私に送ってくれないかとお願ひしているのだけど、まだ誰からももらえていない。

何人かのところにジョージアの国家保安局の人間がやってきた。じつくりと話を聞き、パスポートをスキャンしていく。その理由は、「新しく来た人々をより理解したい」ということらしい。この二、三日、人々はこのことを話題にし、当然ながら不安がっている。第一に、ジョージア保安局が何か不満を持っていたり、誰かしらを監視し始めるのではないか、という恐怖。第二に、これがさらに重要で、ジョージアが何らかの情報をF S Bに渡すのではないかという恐怖だ。二日後には、こうした話題は唐突になくなっていく。

Nはトビリシに四年間住んでいる。「僕は、入国時にジョージアの国境が確定しているという書類に署名させる必要があると考えている〔南オセチアやアブハジアが念頭に置かれている〕。そうでなければ、この国に居場所はないよ」。

ディスクール・前からいる人々は、新しくきた人々のことが好きではない。新参者のせいで彼ら自身が愛されなくなるのではないかと恐れている。「それとね」、クリムナーシ〔我らのクリミア〕という意…二〇一四年のクリミア併合の頃からここにいるNがいう。「私たちが移住したのは、ちゃんと理由があったからだけど、いまの私たちは、ただ、ヤバイ！ っと思つたから逃げてきているだけね」。「彼女のいうことは聞かなくていいよ」とNのパートナーがいう。「僕らも単にこれより前に危ない気がしたっていうだけなんだ」。

「誰かが何かやってくれるよ」と確信をもってNはいう。「ほら、わからないけど、シンデエヴァ〔『ドーシチの創立者』〕が座って何もしいないなんてことないだろ……?」

あるタイミングで、モスクワのペットショップで犬用キャリーケースが売り切れた。

Nの父親はとりたてて政治に関心を示してこなかったが、戦争が始まると断固とした態度をとった。国が戦争をしているときは、国だけではなく、その司令官も完全に支持しなくてはならないのだと。Nはいう、「パパ、そんなの無理。私たちはジョージアに行くわ」。父親は聞こえないふりをした。五日後、Nと夫は航空券を手にした。電話で別れを告げる。父親は、土曜日にはお前の姪の結婚式があるんだぞ、という。「パパ、私たちはもう発つ」。父親はプレゼントの話をする。土曜日に父親からSNSが届く。「レストランに直接行く? それともまずこっちに寄るか?」Nは返信する、「パパ、私たちはトビリシにいるの!!!」五分後、叔母のソーニヤが泣きながら電話をかけてきた。「私たちはそれでもあなたを愛しているよ……!」父親は電話をしてこなかった。

前妻はNが息子を連れていくのを許さない。Nはその子のことがとても心配だ。「一八歳になって正義のために戦わなかったら、どんな風に受け止められてしまうんだろう。もし戦ってしまったら、そんな恐ろしいことないわ……」。

「私たちは二月二十五日に来ました」とNはいう。「三月七日、八日、一二日に到着した人たちは、私たちとはもうまったく違います」と。

街にある二つの大きなナイトクラブでは最近パスポートの提示が求められ、ロシア人とベラルーシ人以外は誰でも入ることができるとのこと。

新しくきた人たちがよくいるらしいとても清潔なカフェで、若い女性たちが話している。「ウクライナ語すごく好き！」「わたしも！」「長いことウクライナ語について嬉しそうに話している。「あのさ、ウクライナ語わかるの？」「わかんない」「わたしも」「ホント残念」。

バトウミでは「ロシア人はプーチンとは違う！ベラルーシ人はルカシエンコとは違う！」というアクションが準備されている。

二度、飛びたつことができなかつた、どうにもならなくて、とNは話す。アパートから出て空港に向かうことができなかつた、と。最後には、空港ターミナルから飛行機のタラップに向かうバスの中で出発をやめようとした。降りしてくれ、と説得して、ドアを開けようとしたそうだ。

「とんでもなく恐ろしい選択だった」とNはいう。「二度と国外に出ないか、二度と戻ってこないか」だった、と。

父親が活動家のNにいった。「サフロノフ（一九九〇）、ロシア人ジャーナリスト」は反逆罪で投獄された。お前も投獄されるぞ」。Nは答える。「わたしはね、そのことが信じられなくて、信じられなくて、そしてついにわかったの」。彼女は国外に出た。

ジャーナリストのNは戦争が始まったとき、「兵士の母の会」に次のように書いた。「現地に息子がいる人を探しています。お話を伺いたいです」。一度目も、二度目も誰も返事をくれなかった。三度目に短い文章が届いた。「あなたはスパイですね、FSB（ロシア連邦保安庁）にあなたのことを報告しました」。実際、その翌日にFSBの局員がNに電話をかけてきたが、彼女はすでに飛行機の中だった。

雪は四日間降り続けている。

チャットに希望者向けのジョーシア語講座の初回に関するお知らせが投稿されている。価格は二〇ラリ、授業はカフェで行なわれると。受けにいつてみる。一〇人ほど集まっていた。どうやら企画したのはいかさま師たちだったようだ。二人いた女性はどちらも教師ではなく、一人は「発音をやってみせてくれるネイティヴ・スピーカー」で、もう一人は問題集か何かを印刷したA4の用紙を持ってきていた。「需要があるんだからやってみよう」ということらしい。カフェでは何も聴きとれない。彼女たちの教授法は「ジョーシア語の単語がどんなものか想像して、それを紙に書いてみましょう」というものだった。ミハイル・パヴロヴィチ・ニーリン（ロシア人精神分析者、詩人、脚本家）の言葉を思い出す。「うんざりするような映画や退屈なゲストに遭遇しても、席をたつてはいけない。君がそこにいるのは何か理由があるんだ」。実際その通りだった。「How are you?」という質問を教わることになった。それから一人の少女が手をあげて尋ねる。「返事で「狭い、寒い、とても怖い」ってなんていうんですか……?」

Nが考えながらいう。「ねえどうかな、世界中のロシア人キャンセルは、Googleが「セルゲイ・」ブリンを追い出すところまでいくかな」。

Nは素晴らしい仲間たちと共に新しく来たジャーナリストや活動家たちのためのシェルターを作った。アパートや、あれやこれやを探し始める前に、彼らが正気に戻り、一息つき、方向性が定まるように。墓地の近くにある小さな家だった。雪のなか彼らのところに向かってしていると、敷地を近所のマステイフが二頭歩いていると連絡が入った。「心配しないで、とてもいい子たちで、人に飛びかかったりはしないよ。ただ、噛むかもしれない」。

ディスクール…恐ろしいのは、新しく来た人たちにプーチンがついてきて、ジョージア文化から彼らを解放し、「ロシア世界」を打ちたてようとするのではなく、プーチンがいるロシアには八〇万人のジョージア人の人質がいるということだ。人々はみな「かかれ!」というひと言がどんな結果をもたらすかを目にしたのだから。

「新参者たち」が集まるカフェ「N」には絶対にいったほうがいいという情報。訪れてみると、なぜみながそこに集まっているのかよくわかった。ここは「モスクワの」パトリアルシエ池沿いにあるカフェに似ている。ラフ・コーヒー、グッツがあり、スペシャリティ・コーヒーも一四ラリで味わえる。みんな小さなテーブルでノートパソコンを開いている。不意に金属製の重たいドアがボタンと閉まり、近くのテーブルにいた若い女性がビクッと飛びあがり、恐る恐る周りを見まわして、声をあげて泣き始めた。

隣のテーブルではウクライナ語の慎重な会話。「遺体を集めないといけなかったんだけど、そんなの無理だ。遺体があるころがっていても、誰も回収しない」。

夢の中で私はモスクワのアパートに入るところで、そこは「自宅」のようだけど、部屋の中の電球はすべて消えて

いる。

チャットでの質問。誰かジャグリングができる人はいるのかな、ジャグリング用品はどこで買えばいいのかな。

美容室の窓に黄色から青のラッカーが塗られている。黄色と青の旗は至るところにあり、いくつかの建物は黄色と青の照明で照らされている。Nの二人の夫(前夫と現夫)は黄色と青の同じリボンを襟につけている。

「手引書、一枚あるよ」とジョーシアに七年住んでいるNが私の依頼に応じてくれた。「送ってもいいけど、僕はあるまり納得できていないんだ」「大丈夫」と急いで返事をする。「私も無垢じゃないし、混乱したりしないよ」。Nが答える。「うん、そうじゃなくて、もつと厳しくすべきって意味だ」。

Nがいう。「パパは激動の時代には離れるべきではなく、自分の国に踏みとどまるべきだって考えている。でも国なんてものはないの。生まれ故郷が辛い状態にあっても、そこに残るといつも考えていたけど、故郷っていうのは野花や友人のことだってわかった」。

ロシア大使館前(正確には、ロシア連邦利益代表部があるスイス大使館前)でのデモ集会の日、Nはまったく気乗りのしない様子で、集会には行かない、前回の集会にも行かなかった、今後も行かない、ペテルブルグでも集会に参加することはなかった、と理由を話す。「だって、何かをなしたという感覚が得られないでしょ」と彼女はいう。「参加して、そこに立つのもいいよ。でも私は、ヴォロトナヤの集会の日、自宅の玄関口を掃除していた」。

私の宿泊先のホテルで、アーティストのNが話している。混乱していて持ってきたのはジャージのズボン一枚、ジャケット一着、カーディガン一着で、絵筆はすべて忘れてきた、と。「私は二三キロまで荷物を詰めただけね」と彼女の友人が淡々と答える。「一番良くて、最高級のをそれぞれ選んできたよ」。

ナヴァリヌイ擁護の集会。ひどく寒い。みな「プーチンをハーグに送れ！」と合唱し、誰かが「グリルを持ってこい！ 寒くて力がでない！」と叫ぶ。一瞬、みながポカシとし、全員が笑い出してしまふ。後ろの方では若い男性が別の人に尋ねている。「あのさ、お前んちってソファはある？」「なんだって、バカいなよ」「ちくしょう、どこなら泊まれるかな……」。

《出国援助》というグループをやっている素晴らしい人たちと会う。このプロジェクトはウクライナの戦闘域から人々が抜け出すことを援助している。プロジェクトの参加者のNが不意にいう。「まだ二ヶ月前、僕たちはモスクワのカフェに座って話し合っていた。「ああ、自分たちに何ができるっていうんだ。ああ、これは難しすぎるな……。ああ、さっぱりわからない……」って。でも、いまでは疑問は全部なくなった。思いだすと笑えるな」。

環境活動家のNについての話。彼女は暗号通貨に断固として反対していたが、戦争が始まるとウクライナにビットコインを送金するため、このテーマに飛び込んでいったらしい。

チャットで最初に出てくる質問は、金の受け渡し方法や良い質屋がどこにあるかというもの。心が凍っていく。

Nは休暇の半分をトビリシに移動して休養し、もう半分をニコラエフ〔ウクライナ南部の都市〕近郊の祖母のと

ころに行こうと考えていた。

「手引書がもつと必要だな」とN（トビリシ在住四年）がいう。「そうでもしないと、また人が来て、路上で酔っ払って大声で叫びだす」。

チャットにて。「ところでみなさん！ ロシア人避難者たちに向けられた、ロシアでフィロ（ロシアの罵倒語、現在プーチンと同義で使われている」と戦えよ、という言葉には、こうやって応えるのはどうか。君たちジョージアには四〇〇万人もいて、武器もある。なんでオセチアやアブハジアのために戦わないんだ？ と。僕たち避難者はロシア全体で五〇万人ぼっちで、しかも丸腰だ！ どうやって戦えついうんだよ……」。

二年前にロシアを離れた活動家のNは、二〇一七年に革命の展望を持っていて、「そこに私利私欲を見ていた」という。「僕はプロデューサーだった。ある人たちが八万ルーブル持ってきて、次のようにいったんだ。「防水スプレーがあるんですが、これを売る広告をやってくれませんか」。そんなはした金で働くために、頑張ってきたわけじゃない。革命が起きていたら、もつと別の発注が次々とくるはずだったんだ」。

「僕は地方に住んでいた」と活動家のN。「政治運動を始めたんだ。それで周りを見てみたら、僕が最年長だった。政治運動で、僕は二五歳、それで一番年上。最年長は無理だった」。

ジョージア人ボランティアのNは、彼女に関する映画を撮るための撮影隊という名目で、何人かをロシアから引っ張り出した。

ディスクール…IT関係者たちは孤立して閉じこもっている。家を一軒借りて、そこに住み、インターネットをひき、自分たち用の幼稚園をつくる。「教育係や乳母を雇って、子どもたちに食事を与え、世話をして、成長させる。それだけでいいっていうね。ただ座って、自分の仕事をやるだけ」と知人は憤慨する。彼女はどうかしてみなが一つにまとまるべきだと考えている（しかしどうすべきなのかはわからない）。

「雪があつて助かった」とNはいう。「雪のおかげで思い出せるの、私がここにいるのは、ちくしょう、休暇だからじゃないってね」。

《ドーシチ》のジャーナリストのNは、ジョージア人が背中に唾を吐いてきたとしても怒る権利はないという。「彼らは一四年前の出来事〔南オセチア紛争〕を覚えている。彼らに呼ばれたからきた訳ではないし、僕の顔に「反プーチン」と書かれているわけでもない」。

一〇歳になるNの息子は、どうして家族がロシアを離れたかわかっている？ と訊かれた。「うん、わかっている。でもいまは喋っちゃダメなんだ。もし僕がそのことについて思っていることを話したら、みんなが僕をぶつから」。

戦争が始まった頃、Nがタクシーの乗車中にロシア語で電話をかけた。運転手は彼を罵倒し、タクシーから叩き出した。別の友人の場合はほとんど真逆の結果だった。ジョージア人の運転手は彼が電話で「プーチンはヒトラーだ」といつているのを聞き、運賃を無料にしてくれた。

ある晩、至るところでチャットに「荒らし(トロール)」が現れた。例の「プリゴジンのトロール」というやつだ。「どうだ、ロシアのオカマども、ジョージア語を覚えるか、もしくは家に帰るか？」こんな奇妙な二分法では、誰も挑発に乗らなかつた。

クラブ Bassianiでは土曜日から、ウクライナのトライデントを真ん中に配した「Russia is an occupier (ロシアは占領者)」というスタンプを押し始めた。

Nの話。「この二週間、目にしたものはね、飛行機、トビリシ、友達、ヒンカリ、サペラヴィ〔葡萄種およびワインの名称〕……。そして、無意識に休暇と結び付けていたこの二週間がプツツと切れ、脳がこう考えるの。「じゃ、帰る？」って。帰る家なんてもうどこにもないのに」。

Nとすぐに親しくなったのは、二人とも人はなんのために生きていくのか、ということのパニックになりながらもたくさん考えていたからだ。「もう状況がどうということはないけど、いまは目立たないことが決まりだね。母親とお客さんに食事を出しているの。何人かはもうウチでしか食事をしない。みんなまだ心配ないフリをしているけどね」。

「モスクワにいるジョージア家族のいいところの坊ちゃんがやっているバーがあるんだ」とNがいう。「ウクライナの」プレオブラジェンカで育って、モスクワの立派な学校に通っていてね。だからか、ロシア人が最低だつてことを耳にする機会がなかつたんだ」。この話を友人に伝えると、「で、Nはロシア人が最低だつてどこで耳にす

る機会があったっていうんだ」と彼は激昂した。「彼はどこにいても怖いのよ」と友人の妻は悲しそうにいう。

四つのアパートを持っているある大家が、Nと彼女の夫に部屋を貸すことを拒否した。「何も問題はなかったの、ロシアのパスポートを見るまではね」。

「物語みたいだな。話が進むほど、ますます恐ろしくなっていく」とN。

Nは母親を呼びよせた。そして母親は彼の言葉を使えば「壊れた」。いつも行動力があり、自立的で、仕事のできる女性だった。いまはただただ茫然としている。ホテルをどう予約するかわからず、夜はどう過ごしたらいいかわからず、なんでもかんでも子どもたちに訊き、一人にしておくとしじつと壁をみている。

Nが頭にくるのは、トビリシに移住した「ロシアで最良のリベラルな知性三万人」が、いまに至るまでジョージア語の一〇単語さえ覚えていなければ、覚えようともせず、覚えたいとも思っていないことだった。「薬局で店員にジョージア語で何か単語をいえば、自分に対する態度が二〇〇ポイントもアップするにもかかわらず、だ」。N曰く、「街の中心にある広場では、ジョージア語の単語が一〇個書かれた看板がぶら下がっている。どうぞ親愛なる来訪者のみなさん、紹介します、覚えてくださいってね。誰かその看板を読んだのか？」N自身はといえば、アルファベットを覚えるだけでなく、ジョージア語の授業を受け、道端で人々を呼び止め、広告（「広告では、一番単純で一番よく使われる言葉、「愛」とか「家族」とか、「自由」とかが使われているんだ）、看板、グラフィティを訳してくれるようにお願いしている。もう百回あまり繰り返し返しているらしい。「一度も断られたことはないよ。ただ、僕がモスクワから来たことを話すと、ときどきため息をつかれるだけだ」。

「ロシア国籍をどうやって捨てればいいのよ」と辛そうにNがいう。「まだロシアにはアパートがあって、ママもいて、生まれ故郷でもあるのに……」。

店のレジでNをみた店員が「ロシア人か!」といって、向きを変え離れていった。Nは泣き崩れ、彼女の背中に向かって「Fuck you! I hate Putin!」と怒鳴りつけた。店員は戻ってきた。

ディスクール…ロシア国外で何らかのロシア(バーチャルの? 海賊版の? 実存主義的な? 本質主義的な? コミュニケーション的な?)を作り出す必要があるということ。どうすればいいのかも、何を作るべきなのかもわからない、でも、わたしたちがここにいる限り、ロシアがここにはないとはならない。

恥について、恥ずかしい出来事を言語化するのがすごく辛いということについての会話。「もう何年もただ無邪気で頭がパーだった」とN。

Nはボランティア・センターで働いている。三月八日にこのために引越してきた。「ロシアでウクライナを助ければ懲役一五年ですが、それがここでは仕事になります」。彼は祖母を連れてきていた。「祖母とはうまくやっています。彼女は八〇歳なんです、オムスクにいる三四歳の兄が、似学者がウクライナ人はみな遺伝的に精神疾患にかかりやすいと説明する動画を祖母に送ってくるんです」。Nは大酒飲みで、戦争の四ヶ月前には自分も精神科医やセラピーにかかった。それは、彼の表現を使えば「他人の生活を邪魔し始めた」からで、どうにもよくない状態だったのだ。いまは朝八時から夜九時まで人道支援センターで働き、それ以外は何もいない、セラ

ピーも薬もアルコールも。新しくきた人たちをできるだけ多くセンターに連れていけるよう努めている、と話してくれた。「そうしないと彼らはグループで固まってしまい、ジョージア人はロシア人のことを嫌っていると互いに脅かしあってしまうのです。ジョージア人たちと会話をし、ちゃんと彼らに、わたしたちはそういった人間ではない、わたしたちはプーチンとは違うと説明すべきなんです。わたしは一人ひとりと腰を据えて話し合います。そうすれば、互いに納得ができるんです」。

わたしはNと人道支援者たちが集まっているカフェに行った。ドアのすぐ近くにピアノを弾く老婦人が座っていて、よくわからない曲を演奏していた。彼女は私たちの方を向き、素敵な微笑みを投げかける。「若いお二人はどこからきたの？」とジョージア語の強いアクセントで話しかけられる。「わたしは地元です」すでに長く住んでいるNは答える。「わたしはイスラエルです」わたしは慎重に答える。「それは素晴らしいわね！」と婦人がいう。「いまイスラエル国歌を演奏するわ」。彼女はピアノを弾き、わたしたちはコップにお金を入れる。

よく知られた活動家のNとその妻は銀行で口座を開こうとしたとき、不意にマネージャーからプーチンをどう思うか尋ねられた。「最悪です。わたしたちは反対派です」と答える。「犯罪歴を示してもらえますか？」また唐突にマネージャーは尋ねる。困惑したNと妻は、「幸いにも、わたしたちは足がすぐく速いんです」と説明する。「それはまずいですね」とマネージャーは不満気だったが、口座は開設してくれた。

モスクワでNが捕まらなかったのは、こちらに歩いてきた二人の警官に彼から訊ねたからだだった。「ねえ、この辺りにATMないかな？」彼らは戸惑いながら銀行の方を指差した。心臓がバクバク鳴りながらNはそちらに歩いて行った。その三日後に旅立った。

チェルケシア出身の同級生たちが「招集令状はいつくるんだ？ ウクライナ人たちをぶちのめさないとな！」とNにメールを書いてきた。「同じ頃、ペテルブルグ出身の同級生のところに、二月二十七日に招集令状がきたんです」とNはいう。「それで彼はいまここにおいて、うちの二軒隣のアパートで部屋を借りています」。

チャットの会話。「チャットって本当に便利だ。自分のお金と仕事をジョージアに持っていかなくていいもんな」。

Nはこの土地の抗議デモでおぼえた複雑な感覚について語る。何かに衝突する感覚がないのだと。「身体の中からそんなことを感じるんだ。近接戦に持ち込むには、相手に肩でぶつかっていき殴る必要がある。でもここでは何かにつかつたり、誰かにぶつかつたりはしない。そしてただ沈み込んでいく。そう、悪い夢をみているみたい。

二月二十八日、Nは家族分の航空券を九万六千ルーブルで見つけたが、離れるべきかどうか決心できなかった。

二九日の朝、三三万二千ルーブルの航空券を購入した。

一一歳になるNの娘はロシアに置いてきたくなかったものが三つあった。自分の部屋、レゴ、そしてパパ。

Nは二つのアパートを電話しただけで断られた。三つ目のときは、ロシアのパスポートを見せると賃料を五〇〇ドルから八〇〇ドルにあげられ、彼女から断った。夕方に友人が電話をしてきた。「すごくいい部屋があるの。あなたはロシア人だけどキエフからの避難民だっていっておいたから、そう伝えてくれれば大丈夫」。Nはひと晩

悩んだ。わたしはそんな人間だったつけ、と。いわれた通りにはできなかった。

チャットでの質問。「どうだろう、トビリシに独立系のロシア語本屋を開くのはあまりに無謀かな？」

Nが意地悪げに、ロシア語ではこうやって話せば恥ずかしくないんじゃないかな、という。「こんにちは」の代わりに「戦争くたばれ!」、「さようなら」の代わりに「ウクライナに栄光を!」。その挨拶で挟んでおけば、あとはいいことをいえばいい、と。

Nの妻は戦争の背後でコロナ・ウイルスが忘れ去られているかのような状態に驚いている。「だって実際、コロナで何人死んだか知っている? 一八〇〇万人だよ」。Nはいう「つまりコロナは避けがたい悲運だね」。妻はいう

「一方、戦争は悲劇だわ」。

Nは出国するか否かと逡巡していたときに、大家族の全員を自宅に集め、(彼の表現を使えば)「認識論的松葉杖の手法」を用いた。二週間外に出てみて、戻るのが危なくないとわかれば、戻ってこよう、と彼は提案した。これは出国を後押しした。Nはそれが自己欺瞞であることはわかっていたが、きわめて効果的な手法でもあった。まずなによりも彼自身にとって。「なぜなら、すべて理解しているのに、前に踏み出せないというギャップほど恐ろしいものはないからね」とNはいう。

「戦争が始まったとき」僕らは人よりも早く動いて、他の人の目の前ですべて買い占めてしまうような人間だった」と苦々しくNが話す。「薬やドル、そのほか何でも」。

学術系編集者のNがスーツケースを詰める際、荷物は「重要目録」に従って振り分けられる。これは、その対象の重さ、容量、価値の相関関係が重要だった。「後で仕事やお金など全てを失ったときに、この荷物だけでちゃんと生きていけるようにね」とNはいう。

戦争が始まった頃、オーディオ・マニアとして音楽を楽しむことはできたけど、音楽好きとしては楽しめなかった、とNは語る。つまり音色や響きに喜びを感じることはできたが、「喪に服しているときのように」内容や意味は通り過ぎてしまった、と。

「僕はまだまだまだ成長している、クソ野郎としてって意味でね」とN。

「いまからあなたにいいことを教えます」と活動家のNがいう。「右翼の人たちはこれから大きく沈んでいくでしょう。彼らは思想の危機に直面していて、自分たちの支持者をすべて失い、ロシアでは本場の反戦運動が始まり、帝国としてのロシアが崩壊していきます。それはとても嬉しいことですし、そこに何かしら慰めを見つげようと思います」。

若い活動家のNは上の世代のリベラル系知識人に怒りを感じている。「彼らは自分のメディア資本を使って指一本で反戦運動を盛り上げることができたはずだ。彼らはわたしたちを助けることができたし、それまでの経験を使ってマネージメントを引き受けることだってできた。このマネージメントというのは運動を下支えする作業だけど、なぜ引き受けないんだ」。曰く、「この世界でなにより恐れているのは、リベラルな知識人になってしまっ

と」。二九歳。

Nはまったく真逆の立場にいる両親に「プーチンはヒトラーと同じだ」といった。「彼らは吐き気をもよおしたような顔をして、次のようにいったんだ。「いや、彼は犯罪者で怪物だが、ヒトラーは穴の縁で人々を銃殺した。彼はまだヒトラーじゃない」って」。

「外を歩いていると泣いている人をいつも見かける」とNがいう。別の対談相手は逆に、この二日前にひどい違和感を覚えたという。ロシア人たちは外を歩いているけど、まるで何も起きていないかのように、笑顔で笑い合っている、と。「みんな心の中では恐れていることはわかっているし、この恐怖が最終的に全員に届いたときになってしまうのか恐ろしくもある」。

Nは亡命当初、身体感覚を失ったと語る。「たんに自分の身体がないというだけでなく、物質的なものが何もかもなくなるような感覚です」。その後、この感覚は和らぎはじめた。

Nは戦争の少し前にオンラインでキエフ在住の心理士を見つけたが、ある反戦集会のあとに一五日間拘束されてしまった。特別収容施設では、解放されて心理士と話せることを毎日待ち続けた。Nは二月二三日に解放された。二四日、心理士がNにメッセージを送ってきた。「いま防空壕にいます。でも接続環境が良ければ、面談はかならずやりましょう」。

チャットで人々が書き込んでいる。「手軽なボイス・セックスしたい人はDMください。とても寂しいです」。

人と人との境界線の多くが、いま水のように洗い流されていることについての話。例えば、人々はどんな状況でも一つの家で住むために、とても気軽に集まってくる。「いま多くの境界線が砕け散っている」とNはいう。「わたしは政治運動の中でも境界線を保ちたいとは思っていません。もしアナキストたちにディーゼルを供給する必要があるなら、そのようにします」。

Nが編集長を務める出版物は外国エージェントに認定された。母親はNに「なにか教育プログラムを受けたらどうか」と提案する。例えばプログラミングを習得するか。「どうして?」とN。「どうにかして順応しないでしょう!」「母さんの世代はずっと順応してきて、それでいま俺たちはクソみたいな状況だ」Nは苛立たしげに答える。母親はとても傷つき、Nはそのようにいってしまったことを嘆いた。「でも、あの世代はソ連崩壊以後ずっと順応してきて、それがファシズムに結びついたんだ」。

Nは戦争が始まったあとの月曜日に出国したが、その前の土曜日、最後のペテルブルグ散策をしながら、人がお腹を致命的に刺されても、一分ほどは死ぬことに気付かず、なにも起こらなかったかのように動き続けることができることを考えていた。「つまりさ、道を歩いている人たち、お店にいる人たち、カフェにいる人たちは自分たちが死んでいることをまだ理解できていないんだ」。

「民主主義的統合失調症者」(政敵への蔑称。多くはロシアの政権与党「統一ロシア」を指す)に謝らなきゃならぬ」とNはいう。「民主的統合失調症はすべてにおいて正しくて、僕らはそうじゃなかった。僕らはただ目を閉じていただけだった」。

Nはこの土地での抗議活動について話す。「お葬式では、みんながまな板に手を伸ばして、サラダを切ったりして、どうにか悲しみを振り払おうとする。僕らのやっていることもこれと同じだ」。

Cuddle partyは無期限で延期された。

「Fuck Putin! Fuck Russia!」というグラフィティが消され、その上から「Not all Russians are Putin」と書かれている。

Nの両親は抗議の雰囲気と同調しており、それゆえイデオロギー的にまったく孤立している。友人や隣人たちはみなプーチンを支持しており、両親はNをのぞいて誰とも話すことができない。「父親はパーキンソン病を患っていて、以前よりも物事を理解するのに時間がかかるんだ。出発前に僕がやらなければならなかったのは、父さんに猟銃を捨てさせることだった。もし近所の人たちが彼らの考えで密告し、家宅捜索でもされたら、その猟銃を理由に拘束されてしまうかもしれない。出発前に、僕は父の前に座って何度も繰り返し、「猟銃を壊して、猟銃を壊して、猟銃を壊して」って。翌日、僕は出発した。それから母さんがメッセージをくれた、「父さんは猟銃を壊したよ」と」。

Nは自分が格好の標的となっていることに気付いてから、ペテルブルグで集会に行くのをやめた。彼は大柄で恰幅が良かったのだ。

「僕は毎日その日の予定があつて、三日間はだいたいこうするとわかっているし、二週間の方策もある。で、そのあとは空っぽだ」。

Nはトビリシに自社スタッフを連れていき、「二週間はやるべきことをやり、自分の生活を整えてもらおう」といった。「仕事のことは気にしなくていい」と。それがいまでは「二週間がすぎた。彼らの多くがいまだに茫然自失としている。だが、わたしはあいつらのお父さんじゃない」。

Nは思いやりがあり、感受性があり、エネルギーシユな女性だが、彼女の会社は、他のスタッフは全員男性だった。彼女はいつも冗談で「母さん」と呼ばれていた。戦争が始まった翌日、彼女のところにみな戸惑いながら書いてきた。「母さん、明日は仕事あるのかな」と。

「一ヶ月後にはモスクワに帰りたいう禁断症状が始まるさ」とNはいう。「怖いのは、それがいつぺんに起こることだ」。

ディスクール…「誰もが〔ロシア革命時の〕白軍亡命者の例を思い浮かべる。それは恐ろしく絶望的なものだが、多くのことを教えてくれ、多くのことに備えさせてくれる」。

Nは残った人たちに対して、どうやって様子を訊ねたらいいかわからず、毎朝全員に「愛している」とだけ書いている。

母親がNに電話をかけてきて、「窓の下にある車二〇台のうち、一五台のガラスにZという文字が書かれている」と泣いている。「僕たちがここにいる限り、それを目にしないですむんだ」

「プーチンのこと、ごめんなさい」というフレーズで話し始めないロシア語ネイティブはみんな毒を飲んで死ぬばいなんだ、僕も含めてね」とNはいう。みなが彼に問いかける。「じゃあロシア語話者のウクライナ人たちはどうすればいいの？」

Nと夫は一二歳の息子に、もし戦争が始まったら出国する、と話していた。二月二四日、子どもが「戦争が始まった！ 戦争が始まったよ！」と叫びながら、クローゼットからスーツケースに荷物を移し替えていて、Nは目が覚めた。人生でもっとも恐ろしい目覚めだった。

チャットでの会話。「ジョージアでクソみたいなフェイスブックが閉じられさえすればさ、IT技術は発展しはじめるよ。すると、即座にマーケットプレイスが大きくなるだろ、そうなったら俺はジョージアのすべてに満足するね。俺がここで唯一腹が立つのがそこなんだ。市場バザールに座って、バックギャモンで遊ぶって……。商品を写真に撮って、ネットにあげた方がいいだろ！ それですべてが一挙に良くなる。俺はジョージアが、サカルトヴェロがすごく好きなんだ」。

「もし子どもがいなかったら、モスクワに残っていたと思う」とNはいう。「ユダヤ人でイスラエル大使館があると、なんだか守られているような気がするんだ」。

Nは子どもも連れて家族でトビリシの大使館に抗議にいった。子どもが聞いてくる。「ここではなんでも叫んでいいの?」「いいよ」「警察は僕たちを逮捕しない?」「逮捕しないよ」。そこでNは気がついた。この子の一二年間の人生には、路上で何かを叫んでいい、警察は逮捕しないということがなかったことに。

「みんな大使館前で何を叫ぶべきなのかわからないの」とNはいう。「だって向こうから反応がないんだもの。ただ大声を出すだけ」。

Nはバトウミにビジネスクラブを作ることに決め、第一回の会合を企画した。少人数の人々が集まり、展望について語り合い、企画者はインスタグラムに写真をアップした。その五分後。「N、気でも狂ったのか、いますぐ消すんだ。半分は「ロシアで」指名手配されている人たちだぞ!!!」。

インスタグラムで夏に撮った子どもや恋人の写真を見せながら、Nは涙を流している。「ぜんぶ実際にあつたこと、本当にあつたことだってわかるインスタの記録があつてよかった」。

「もうロシア人っていうのはどういう人間なんだかさっぱりわかんないね」とNがいう。「ロシア人ってのはさ、なんかヤンデックス〔ロシア版Google〕とか、オゾンとか、グレチカ〔蕎麦の実〕とかが混ざってる染みみたいなものだな」。

一〇歳のNはここでロシア系の評判の良い学校に入学させられた。校長はNがどれくらい意欲があるか訊ねた。Nは「まったくくない」と答える。そこで彼女は一から一〇で表現するなら、どれくらい学びたいのか答えてみて、

といわれた。「一」とNはいった。正直に答えたことに感謝され、それからこの子は教育にトラウマがありますね、といわれた。でも、学校にはジャグジーがある。

Nは激しい恋をしている。それは素晴らしい恋だ。もう長くジョージアに住んでいるアメリカ人の恋人は、自分たち用に夏の期間の家を借りることにしたよ、と彼女にいった。「君には家が必要だろ」。彼女は泣きながらいう。「頭おかしいんじゃない？ 夏なんてくるの？」

「君たちはどこ出身？」という質問に、Nと友人は慎重に答える。「私はラトヴィア」、「私はイスラエル」。「なんだよ普通の国じゃないか、なんで答えるのを躊躇したんだい！」。

四年間ジョージアに住んでいるNはつらい離婚の後に恋に落ちた。が、この恋をとっても恐れて、どうにかしてこれを退け、拒み、油断しないようにしていた。「その気持ちがよくあたたかく柔らかくなったと思ったら、戦争が始まったんだ」。

Nは重病の子どもに次のフレーズを繰り返すのが好きだった。「ああ、マーニャ、戦争が終わったら、一緒に暮らそう」「ロシア国内で有名なフレーズ。ただし本来はこのような発言はその後の死を暗示させる一種の「死亡フラグ」として機能するが、ここではその含意はない」。子どもは二月一〇日に快復した。

デイスクール…いま亡命している人たちをなんと呼べばいいかわからない。みんなが言葉を探しているのを見つからないという感じ。

「恥ずかしかつたんだ、とても恥ずかしかつた。その感覚が〔ここに来て〕突然消えた。わかつたんだ、僕は不条理演劇で俳優として働くことはできない、劇団員みんなのことをずっと恥ずかしいと思っていたんだって」。

Nはデモ集会で何かを叫ぶことができない。ロシアにいる人々も集会で叫ぶことができないのから。これは『二人のキャプテン』のように、そのような診断はないのだが、聾者ではない唾者、それが彼だった。「ヴェニアミン・カヴェーリンの冒険小説『二人のキャプテン』の主人公アレクサンドル・グリゴリエフは耳は聞こえるが喋れないという人物」

Nの母は小さな街に住んでいて、ロシア国営テレビの犠牲者だった。彼女は一度もヨーロッパに行ったことがない。Nは母と一緒にフランスにいき、レストランに連れていった。母は周りを見渡し、同年代の女性たちを目にしてこう訊ねた。「今日は水曜日よね。あの人たちはただ食事に来ただけなの？」このときから何かが変わり始めたという。

Cuddle partyが実施された。Nも参加しようとしたが、パーティーの規則が怖気づくほどに厳格だった。「プーチンはどこにでもいるんだな。こうした規制があるものだってプーチンの何かだ」。

Nにはモスクワに残った活動家の友人がいて、その彼女のもとにはいまにも警察がやってきそうだという。彼女はパン粉を食べる訓練を始めた。最初はサルタナ入りを買い、いまではサルタナ抜きを買っている。

Nは毎日ハリコフにいる友人の様子を訊ねている。彼からの返事は「鬱陶しい。死んだら死んだって書くさ」。

チャットにホストからの投稿。「自分自身を守ることにし、自分自身を大切にしている私たち全員のことを誇りに思います」。

「トビリシってペテルブルグに似てるよね」とNがいう。「このくすんだ美しさとか、絶え間なく湧き出るような文化的生活とか、モスクワ出身者があんまり好かれなところとか」。

スペイン在住のNの父親は猛烈な反プーチン派で、娘のことをたえず非難する。「お前はいま、自分がロシア人でロシア語を喋っていることを恥ずかしいと思わないとダメなんだ！」「パパ、じゃあ私たちの抗議活動とか、リベラル系のメディアとか、私たちがやっていることはどうなるの？」「お前はまた内輪の話か」。Nはこのやりとりがとても辛いと話す。

デイスクール…もともと日常的なロシア語に軍用語が多すぎるのか、いまになってみんながそれに気づいて、とても痛ましく感じているのかがわからない。

幼い子どもを連れて客が訪れる。家主の子どもが銃やブラスターを持って走り回っていた。「バン！バン！バン！ドウルドウルドウルドウルドウル！」男の子は、最初は大はしゃぎだったが、その後突然激しく泣き出し、へてきのふたいが自分を襲ってきた、といった。そして、銃を撃つのは悪いことなんだって急にわかった、と。

Nは、「チャットには必ず少佐〔秘密警察を象徴化した神話的人物〕がいる。誰が何を喋っているかを考えないと」という。

ターミナル駅近くのカフェに、「ロシアの侵略者はお断り」というステッカーが貼ってある。「腹立った?」「立ったね」「彼らの気持ちもわかるんだけど、僕も腹が立った」。水を買に行きたかったが、行かなかったという。

Nは大きな解放感を感じている。ここでは求められる仕事の幅が少なく、機会もより少ない。モスクワでは可能性の多様さや大きさが無限にあったけど、ここではもう圧倒的に気楽なんだ、と。

Nは一三歳のときにイスラエルに連れていかれた。彼は怒って、数学教室、モスクワ、友達が恋しくて涙を流し、こう訊ねた。「なんで僕を連れていくの?」「二〇歳のときに、モスクワに戻った。そして三週間前、家族でトビリシに移住した。昨日、子どもがヒステリーを起こしてNにいった。「なんで僕を連れていくの?」。ああ、数学教室、モスクワ、友達。

Nのモスクワのベビーシッターは、プーチンを敬い、年をとったら人と接する仕事をやめ、レーニン図書館のクロークで働き始めることを夢見ていた。まるでその居場所を約束されているかのよう。Nは、彼女とプーチンについて話し、なんとか説明しようとしたが、うまくいかなかった。彼女は目に涙を浮かべてNたちを見送り、子どもに旅行用のプレゼントを買ってやり、とても辛そうに別れを告げた。Nもまた、このことを話しながら涙を流している。「それぞれ自分の信じるものを守ったということなの」。

N曰く、「これは亡命じゃない。ここに居るのは精神衛生のためだし、戻るつもりだ。問題はただ、いつ、どうやって帰ることだね。ものも取らずに家を出たけど、残してきたものはガラクタで、自分たちに大切だっただけだ。本とか、子どものおもちゃとか、二〇〇〇枚のレコードとかね。洗濯物も干しっぱなしだな」。

三月二七日にプーチンの案山子が火に焼べられる。その案山子は干し草をつめ、上からプーチンの写真をピンで留め、短い腕は殉教者のようで、全体としてそのプーチンは撃たれるのを待っている人間のように見えた。不穏な雰囲気だった。何よりも、案山子を囲む最前列にはテレビカメラが並んでいて、一人のジャーナリストが明るい髪をした若い女性と話している。彼女は、「ここには「免罪符のような失望の感覚があります」と話している。

「トビリシに居ることは、辺獄に居るってことだ」とNはいう。「たぶん僕は死んでいて、いまは完全な暗闇になる前なんだ」。



【解題】

ウクライナ生まれ、イスラエル在住、ロシア語話者のリノール・ゴラーリクは、二月二四日以降、もっとも精力的に活動を展開している作家の一人である。ただし、それは作家的な物語作品を産み出しているという意味ではない。彼女はいま現在、人々の「言葉」を蒐集（集積）・記録している。

すでに報じられているように、ロシア国内では厳しい言論統制が敷かれ、こうした状況から逃れるため、数多くのロシア人は近隣諸国を中心に半ば亡命の形で出国している。ゴラーリクは二〇二二年三月から四月にかけて、イスラエル、トビリシ（ジョージア）、エレバン（アルメニア）、イスタンブール（トルコ）、イスラエルと移動

引用元：Google map

しながら、国外に脱出したロシア人の声を書きとめ、その記録を「エクソダス-22 (Исход-22)」と名付けて自身のサイトで公開している (<http://linorgoralik.com/bilisi.html>)。ここに訳出したのはその第一部「トビリシ編」である。

彼女自身は、いま現在、言葉を自ら紡ぎ出すことはできないと考えている。そのため、ここに掲載した文章のほとんどは彼女が耳にした「他者の言葉」の羅列であるが、それでも、作家として言葉に携わってきた彼女がすくい取る言葉の数々はたしかな佇まいを保ち、一つの優れた記録文学として成立している。戦争が始まりロシアを離れた人々が流れ込んだ土地の状況と、そこにいるロシア人たちの姿、そしてそうした状況に困惑し、様々に応答するジョージアの人々の姿を、ゴラーリクは過度に言葉を付け加えることなく、淡々と浮かび上がらせている。そこにあるのはあくまで言葉の断片で、それらを一般化することはできない。断片の裏には、個々人の背景があり、個々人の感情がある。今回の戦争に対する彼らの応答が、ここには等しく並べられている。

「トビリシ編」に関していえば、その場所を首都にいたたくジョージアもまたロシアと複雑な関係を有している土地であり、ふと語るロシア人たちの言葉の裏には、そうした文脈がたしかに存在している。前提となる文脈の共有なしには、あるいはその発言の意図は捉えづらいたころもあるかもしれないが、個人的な発露としての言葉を保つため、訳注は必要最小限に留めた。

なお、この「エクソダス-22」の他に、ゴラーリクはROARというプラットフォーム(電子ジャーナル)も開設している (<https://roar-review.com/>)。ここには、今回の出来事に対する(抵抗の)応答として様々な人々が詩、絵画、映像等の作品を寄せている。「エクソダス-22」やROARで触れることのできる個々の声は、私たちが現在向かい合っている「ロシア」とは異なる、多様な「ロシア文化」の一面を見せてくれるだろう。

あるインタビューでゴラーリクは次のように語っていた。「私はこうした会話からなにかまとまったテキストを生み出したり、大規模な調査を試みているわけではありません。ROARも同じです。私は分析をしたいわけ

ではなく、あくまで組み合わせているだけなのです」¹⁾。

集められた言葉たちを前にして、私たちは何ができるか、その答えを拙速に導くことなく、まずは立ち止まり、彼女と同じように耳を傾けたい。

最後に、本作品の翻訳掲載を快諾してくれたリノール・ゴラーリク氏に最大限の敬意と感謝を申し上げます。

- 1 <https://meduza.io/feature/2022/05/01/чужна-дья-многих-стала-катализатором-проявления-творческого-сил>

リノール・ゴラーリク（一九七五年、ドニエプル（ドニプロ）生まれ）

詩人、作家、アーティスト。二〇冊ほどの詩や散文の著作がある。『呼吸ができるすべてのものたち』『端的に』『何某記念病院』『M1セクター居住者たちの口承作品』『終夜の獣』や一連の子ども向け書籍などがある。ROAR // Russian Oppositional Arts Review («Вестника оппозиционной русскоязычной культуры») (抵抗ロシア語文化レビュー) 創設者、編集長。

チェマダン特別号
「ウクライナ侵攻とロシアの現在」

2022年5月31日 発行

編集・発行
チェマダン編集部
(伊藤 愉 河村 彩 八木 君人)

<https://chemodan.jp/>

表紙デザイン
ナターシャ・アガポヴァ

本文デザイン
宮村ヤスヲ

LETICIA